

平成28年度

# 市原市内遺跡発掘調査報告

山新遺跡（永津前地区第2地点）

椎津城跡（重要遺跡確認調査）

市原城跡（門前地区第4地点）

能満分区遺跡群（上小貝塚地区第4地点）

諏訪台古墳群・諏訪台遺跡（第2地点）

椎津向原遺跡（第4地点）

上境町遺跡（第2地点）

海保大塚遺跡（第2地点）

2017

市原市教育委員会

平成 28 年度

# 市原市内遺跡発掘調査報告

さんしん 山新遺跡 ながつまえ (永津前地区第 2 地点)

しいづじょうあと 椎津城跡 (重要遺跡確認調査)

いちはらじょうあと もんぜん 市原城跡 (門前地区第 4 地点)

のうまんぶんく 能満分区遺跡群 かみこかいづか (上小貝塚地区第 4 地点)

すわだい 諏訪台古墳群・すわだい 諏訪台遺跡 (第 2 地点)

しいづむかいばら 椎津向原遺跡 (第 4 地点)

かみさかいまち 上境町遺跡 (第 2 地点)

かいほおおつか 海保大塚遺跡 (第 2 地点)

2 0 1 7

市原市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、国庫及び県費の補助を受けて、市原市教育委員会が主体となり実施した、市内に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書刊行は、市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 本書所収の調査は以下のとおりである。所在地等の諸情報は巻末の報告書抄録に記載した。
  - (1)山新遺跡(永津前地区第2地点)(調査コードセ541) 確認調査 130 m<sup>2</sup>/1,273 m<sup>2</sup>  
調査期間：平成28年1月12日～1月19日 担当 北見一弘
  - (2)椎津城跡(重要遺跡確認調査)(調査コードセ542) 確認調査 154 m<sup>2</sup>/3,698.549 m<sup>2</sup>  
調査期間：平成28年2月8日～2月23日 担当 近藤 敏
  - (3)市原城跡(門前地区第4地点)(調査コードセ543) 確認調査 159 m<sup>2</sup>/1,590.8 m<sup>2</sup>  
調査期間：平成28年2月29日～3月11日 担当 近藤 敏
  - (4)能満分区遺跡群(上小貝塚地区第4地点)(調査コードセ544) 確認調査 47 m<sup>2</sup>/476.43 m<sup>2</sup>  
調査期間：平成28年4月22日～5月6日 担当 近藤 敏 本調査 86.6 m<sup>2</sup>
  - (5)諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点)(調査コードセ545) 確認調査 78 m<sup>2</sup>/788.73 m<sup>2</sup>  
調査期間：平成28年5月10日～5月19日 担当 近藤 敏
  - (6)椎津向原遺跡(第4地点)(調査コードセ546) 確認調査 55 m<sup>2</sup>/486.8702 m<sup>2</sup>  
調査期間：平成28年6月3日～6月10日 担当 近藤 敏
  - (7)上境町遺跡(第2地点)(調査コードセ549) 確認調査 49.5 m<sup>2</sup>/495.54 m<sup>2</sup>  
調査期間：平成28年9月15日～10月3日 担当 近藤 敏 本調査 80.25 m<sup>2</sup>
  - (8)海保大塚遺跡(第2地点)(調査コードセ550) 確認調査 184 m<sup>2</sup>/1,764 m<sup>2</sup>  
調査期間：平成28年10月5日～10月31日 担当 近藤 敏
- 4 整理作業・本文執筆は各担当が行い、編集は木對和紀が行った。
- 5 各遺跡の調査に際し、基準点測量を実施したのは椎津城跡と海保大塚遺跡である。これ以外の遺跡の図中に示した座標値及び北方位は、地形図等から求めたもので、厳密なものではない。また、水準は近隣の既知点から求めて使用している。
- 6 山新遺跡、椎津城跡、市原城跡は、前年度の調査であるが年度末であったため、今年度の整理・報告とした。

## 本文目次

1 調査遺跡の位置と概要	1
2 山新遺跡(永津前地区第2地点)	3
3 椎津城跡(重要遺跡確認調査)	8
4 市原城跡(門前地区第4地点)	20
5 能満分区遺跡群(上小貝塚地区第4地点)	27
6 諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点)	32
7 椎津向原遺跡(第4地点)	37
8 上境町遺跡(第2地点)	41
9 海保大塚遺跡(第2地点)	45

# 挿 図 目 次

第1図	調査遺跡位置図	2
第2図	山新遺跡(永津前地区第2地点)周辺地形図	4
第3図	山新遺跡(永津前地区第2地点)トレンチ配置図	5
第4図	山新遺跡(永津前地区第2地点)平面図・断面図	6
第5図	山新遺跡(永津前地区第2地点)出土遺物 実測図	7
第6図	椎津城跡(重要遺跡確認調査)周辺地形図	12
第7図	椎津城跡(重要遺跡確認調査)トレンチ配置図	13
第8図	椎津城跡(重要遺跡確認調査)平面図(1)・断面図(1)	14
第9図	椎津城跡(重要遺跡確認調査)平面図(2)・断面図(2)	15
第10図	椎津城跡(重要遺跡確認調査)平面図(3)・断面図(3)・出土遺物 実測図	16
第11図	椎津城跡(重要遺跡確認調査)平面図(4)・断面図(4)	17
第12図	椎津城跡(重要遺跡確認調査)平面図(5)・断面図(5)	18
第13図	椎津城跡(重要遺跡確認調査)平面図(6)・断面図(6)	19
第14図	市原城跡(門前地区第4地点)周辺地形図	21
第15図	市原城跡(門前地区第4地点)トレンチ配置図	22
第16図	市原城跡(門前地区第4地点)断面図(1)	23
第17図	市原城跡(門前地区第4地点)断面図(2)	24
第18図	市原城跡(門前地区第4地点)出土遺物 実測図(1)	25
第19図	市原城跡(門前地区第4地点)出土遺物 実測図(2)	26
第20図	能満分区遺跡群(上小貝塚地区第4地点)周辺地形図	28
第21図	能満分区遺跡群(上小貝塚地区第4地点)トレンチ配置図・断面図(1)	29
第22図	能満分区遺跡群(上小貝塚地区第4地点)平面図・断面図(2)	30
第23図	能満分区遺跡群(上小貝塚地区第4地点)出土遺物 実測図	31
第24図	諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点)周辺地形図	33
第25図	諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点)トレンチ配置図	34
第26図	諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点)断面図	35
第27図	諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点)出土遺物 実測図	36
第28図	椎津向原遺跡(第4地点)トレンチ配置図・断面図(1)	38
第29図	椎津向原遺跡(第4地点)平面図・断面図(2)	39
第30図	椎津向原遺跡(第4地点)出土遺物 実測図	40
第31図	上境町遺跡(第2地点)トレンチ配置図・断面図(1)	42
第32図	上境町遺跡(第2地点)平面図・断面図(2)・出土遺物 実測図(1)	43
第33図	上境町遺跡(第2地点)出土遺物 実測図(2)	44
第34図	上境町遺跡(第2地点)周辺地形図	44
第35図	海保大塚遺跡(第2地点)トレンチ配置図・断面図(1)	46

第36 図	海保大塚遺跡(第2地点)断面図(2)·····	47
第37 図	海保大塚遺跡(第2地点)断面図(3)·····	48
第38 図	海保大塚遺跡(第2地点)出土遺物 実測図(1)·····	49
第39 図	海保大塚遺跡(第2地点)出土遺物 実測図(2)·····	50
第40 図	海保大塚遺跡(第2地点)周辺地形図·····	50

## 表 目 次

第1表	貝類出土量集計·····	40
第2表	主要二枚貝類殻長計測値集計·····	40
第3表	出土遺物観察表·····	51

## 図 版 目 次

PL.1	遺構	山新遺跡(永津前地区第2地点)、椎津城跡(重要遺跡確認調査)
PL.2	遺構	椎津城跡(重要遺跡確認調査)、市原城跡(門前地区第4地点)
PL.3	遺構	市原城跡(門前地区第4地点)、能満分区遺跡群(上小貝塚地区第4地点)
PL.4	遺構	諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点)、椎津向原遺跡(第4地点)
PL.5	遺構	上境町遺跡(第2地点)
PL.6	遺構	海保大塚遺跡(第2地点)
PL.7	遺物	山新遺跡、椎津城跡、市原城跡、椎津向原遺跡、上境町遺跡
PL.8	遺物	山新遺跡、椎津城跡、市原城跡、能満分区遺跡群、 諏訪台古墳群・諏訪台遺跡、椎津向原遺跡、上境町遺跡、海保大塚遺跡

# 1 調査遺跡の位置と概要

平成 28 年度は、能満分区遺跡群（上小貝塚地区第 4 地点）、諏訪台古墳群・諏訪台遺跡（第 2 地点）、椎津向原遺跡（第 4 地点）、上境町遺跡（第 2 地点）、海保大塚遺跡（第 2 地点）、福増中ノ台遺跡の 6 か所の発掘調査を行った。本書では、年度末の調査となった福増中ノ台遺跡を除いた 5 遺跡と、これらに加えて、平成 27 年度末に調査を行った山新遺跡（永津前地区第 2 地点）、椎津城跡（重要遺跡確認調査）、市原城跡（門前地区第 4 地点）の 3 遺跡についても掲載した。

掲載遺跡はいずれも市の北部に位置し、調査原因は、個人住宅建設が 5 か所、社会福祉施設建設が 1 か所、事業場等の造成が 1 か所、重要遺跡確認調査が 1 か所である。

**山新遺跡（永津前地区第 2 地点）**は、縄文海退によって形成された標高 7m 前後の砂丘列帯に位置し、縄文中期阿玉台式土器や弥生後期の久ヶ原式土器などが検出された。このことから、周辺地域の縄文海退が阿玉台式土器の盛行期以前であることが察知される。

**椎津城跡**は、主郭部周辺が平成 27 年 7 月 3 日付けで市原市指定文化財（史跡）に指定された。城郭の主要部である主郭部、主郭東方腰曲、主郭西方腰曲を対象とし、堀の規模や、土塁の有無等についての城郭の詳細を把握するために重要遺跡確認調査を実施した。大きな結果として、①主郭部及び主郭東方腰曲輪は 1.5m 以上の盛土造成が行われていたこと、②主郭部からは盛土内に多量の炭化物の散布が認められたこと、の 2 点が確認された。このことは、文献が示す天文 21（1553）年の椎津落城と、永禄 3（1560）年の椎津大普請との関係を想定させる大規模造成工事が行われていることの証拠となり得る資料の追加である。また、主郭西方腰曲輪では、主郭南側の一ノ堀が、西側に向かって主郭部周りを遮断するように巡ることが確認され、現状とは大きく異なる城郭縄張りであることが確認された。

**市原城跡**は、標高 22m 前後の市原台地上の広範囲に及び、今回の調査区門前地区第 4 地点は、新田川左岸の台地上に位置している。縄文時代の遺構は検出されなかったが、遺物は縄文時代から奈良・平安時代に至る遺物が検出されている。遺物の中には墨書土器 1 点が認められている。

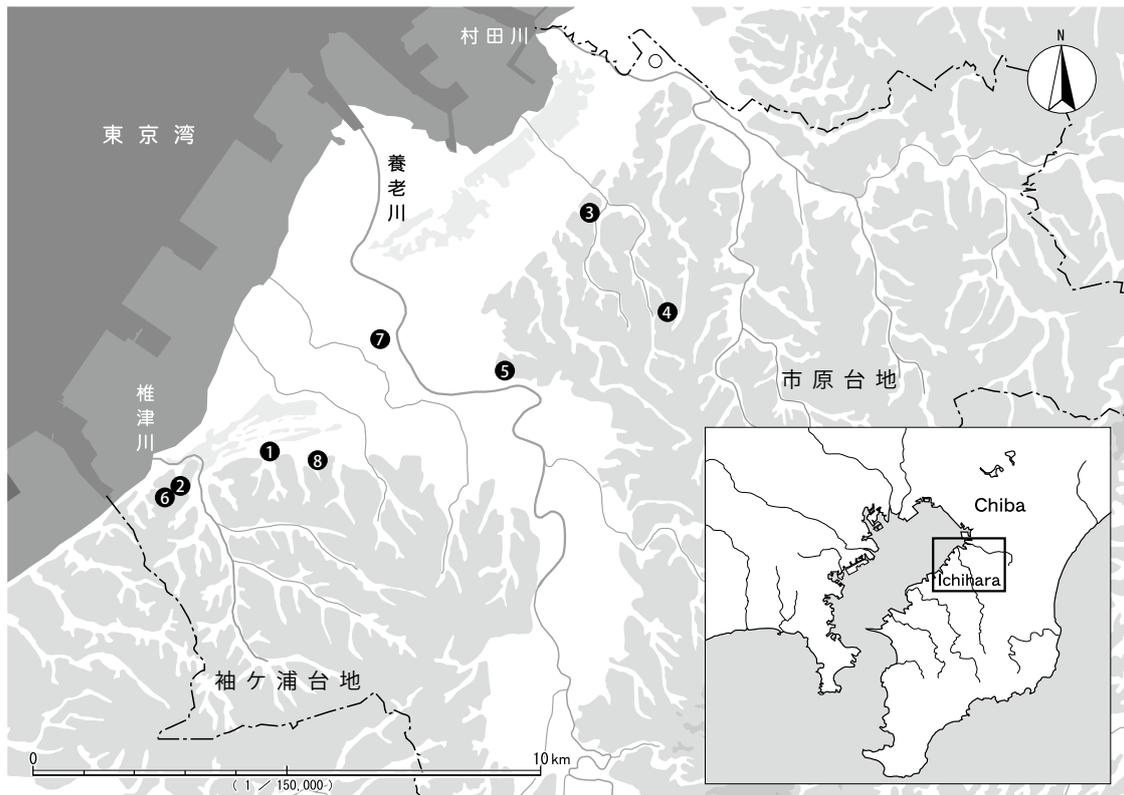
**能満分区遺跡群（上小貝塚地区第 4 地点）**は、新田川と神崎川の開析谷に挟まれた標高 42m 前後の台地中央部に位置している。調査区出土遺物は、表面採取された 1 点の土師器高坏脚部を除きすべて中期末葉から後期初頭の縄文土器であり、時期的に限定された調査区であることが判明した。

**諏訪台古墳群・諏訪台遺跡（第 2 地点）**は、養老川右岸の標高 25m 前後の台地上に位置し、調査区は上諏訪神社境内地に隣接している。調査区東側の造成地は、大規模な縄文早期の集落跡と弥生時代以降連綿と続く墓域が形成されていた天神台遺跡・諏訪台古墳群であるが、調査区周辺は遺構の希薄地帯のようである。出土遺物の大半は、縄文早期の茅山上層式土器で、調査区は天神台遺跡の炉穴分布範囲の北端部に位置しているものと想定される。

**椎津向原遺跡（第 4 地点）**は、姉崎台地北西辺部の標高 38m 前後の台地上に位置し、古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺構と遺物が検出された。1 号住居跡から検出された土師器坏片には、斜格子状暗文が施されており、8 世紀中葉の年代観が想定される。

**上境町遺跡（第 2 地点）**は、養老川左岸の河口地帯標高 5m 前後の微高地上に位置する。確認調査の後、一部遺構の保存が困難な範囲に対し本調査を実施した。ほぼ完掘された 1 号住居跡からは、高坏をはじめとした古墳時代中期の遺物が検出されている。

海保大塚遺跡（第2地点）は、姉崎台地北辺部の海岸平野に面した標高40m前後の台地突端部付近に位置する。当初設定した確認トレンチのほぼ全てから、各種遺構が検出されており遺構密度は極めて高い。周辺には径60m級の円墳と想定されている海保大塚古墳が存在しており、古墳周辺の遺構分布状況を把握することができた。



- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| ① 山新遺跡（永津前地区第2地点）     | ⑤ 諏訪台古墳群・諏訪台遺跡（第2地点） |
| ② 椎津城跡（重要遺跡確認調査）      | ⑥ 椎津向原遺跡（第4地点）       |
| ③ 市原城跡（門前地区第4地点）      | ⑦ 上境町遺跡（第2地点）        |
| ④ 能満分区遺跡群（上小貝塚地区第4地点） | ⑧ 海保大塚遺跡（第2地点）       |

第1図 調査遺跡位置図

## 2 山新遺跡（永津前地区第2地点）

**遺跡の位置** 遺跡は姉崎台地縁辺部の海蝕段丘下、標高 7m 前後の海岸平野に位置し、最も台地に近い東西方向の砂丘帯列上に①の当遺跡は立地している。調査区は山新遺跡の南辺部に当たり、山新遺跡第3地点③（近藤 2005）から、南方向に水田を隔て、約 400m の地点に位置する。調査区南側は県道市原茂原線に隣接し、調査前は畑地となっており、砂丘帯列北辺の海側にあり、北面は水田（後背湿地）となっている（第2図）。

**調査概要** 調査は、福祉施設建設に伴うもので、調査対象面積 1,273 m<sup>2</sup>に対し 130 m<sup>2</sup>の確認調査を実施した。西側の隣接地②も、平成 25 年度に調査が実施されている（小川 2013）。調査区には、南北方向に 5 本のトレンチを設定し調査を進めた（第3図）。表土は灰褐色砂質土壌となっており、地山の黄灰色砂は砂丘堆積物と考えられ、遺構確認面は標高 6.3m 前後である。検出された遺構の覆土は、近世以降の溝状遺構が暗灰色砂、それ以前の遺構は、粘シルト質の黒灰色土、または黒色粘質土であり、標高 5m 前後に立地する山新遺跡第3地点と類似している。

**遺構と遺物** 1 トレンチからは、近世以降の溝状遺構が1条、東西方向に湾曲し検出されている。2 トレンチはトレンチ北側に高い位置からの掘削があり、それは1・3 トレンチからも検出されている（第4図）。平面に数条のプランが認められたが、掘り込みが浅く、遺構として捉えられない。1、2 トレンチでは、粘質の黒色、黒灰色土である遺物包含層が検出されていない。3 トレンチには薄い包含層中に弥生時代後期の土器が検出されたが、遺構プランは確認ができなかった（第4図）。4 トレンチには、溝状遺構と土坑が検出されており、出土遺物は小片ながらも弥生時代後期の壺形土器と甕形土器である。3 トレンチの出土遺物と時期差はないので、一連の遺構と遺物は、包含層内に留まっていたと推測される。5 トレンチは、4 トレンチからの溝状遺構と土坑が検出されている。遺物は弥生時代後期の甕形土器が多く、鉢形土器も出土しており、4 トレンチからの包含層が連続するものと推測される。

遺物は第5図にまとめた。1、2 トレンチでは図示に至る遺物はない。3 トレンチからは、1、2 の器面摩耗した弥生後期の壺形土器が2地点で集中して検出された。4 トレンチからは、3～7、5 トレンチでは、8～14 の弥生後期甕形土器片と鉢形土器があり、隣接トレンチと同時期の遺物である。このほかに 15～18 の縄文中期の阿玉台式土器が出土している。口縁と胴部片があり、接合に至らぬが、胎土、整形技法から同一個体の深鉢と推測される。

本遺跡は海浜砂丘上の遺跡であり、その成立は、出土遺物の阿玉台式土器から、縄文時代中期前半以前と考えられる。これは養老川河口左岸の西野遺跡群 B1 地点、第 27 トレンチ出土の阿玉台式土器と同事例であり、縄文海進以後の海退途中の海岸平野沖積層の形成時期を示している（近藤 2014）。その後、砂丘は安定し、弥生時代以降、現代に至ったものと考えられる。

### 引用参考文献

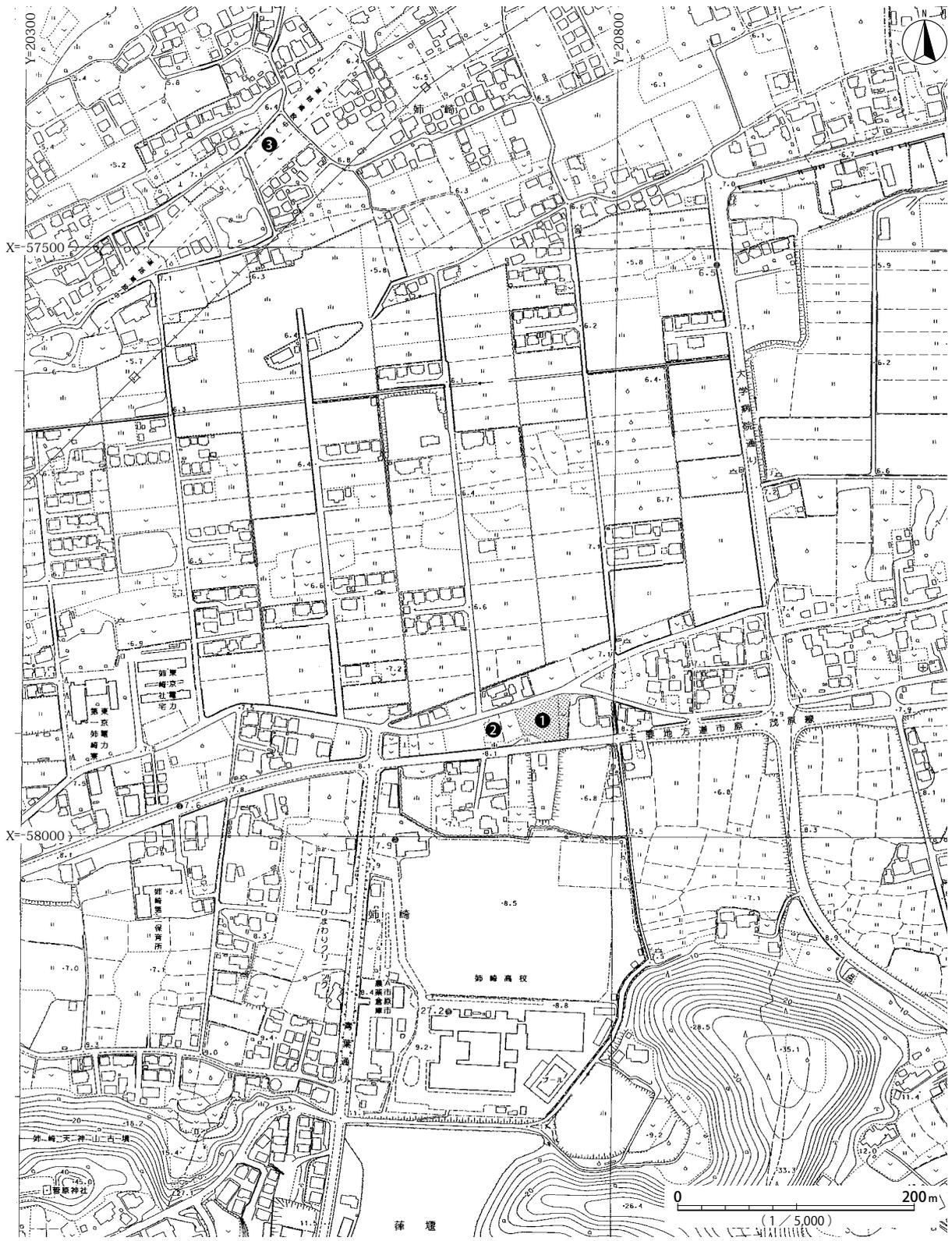
近藤 敏 2005「姉崎山新遺跡（第3地点）」『市原市文化財センター年報』平成 15・16 年度

小川浩一 2005「西野遺跡群 B1 地点」『市原市海上地区遺跡群』（財）市原市文化財センター調査報告書第 97 集

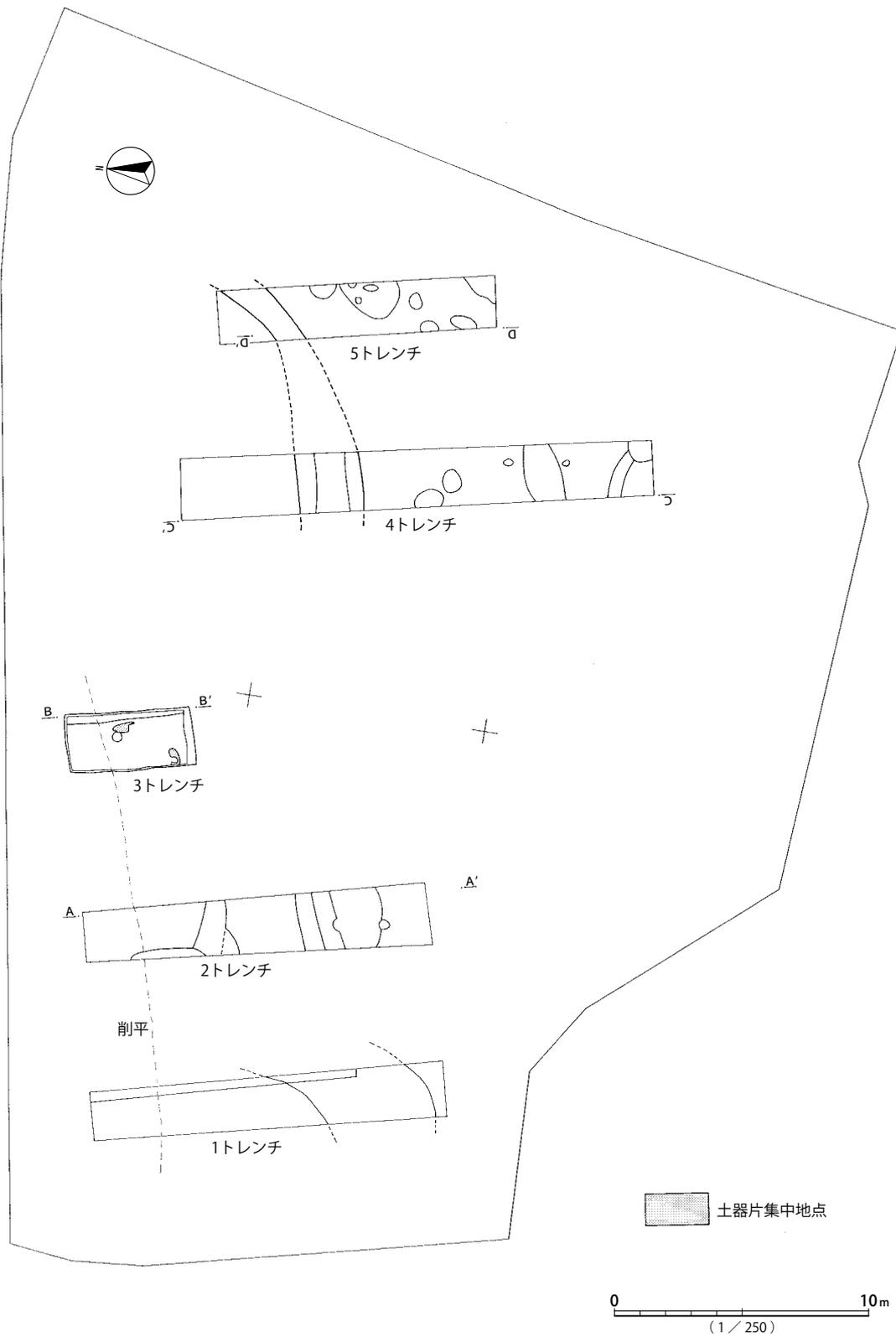
近藤 敏 2014「縄文後期前半の市原市周辺の海域復元」『貝塚博物館紀要』第 41 号千葉市立加曽利貝塚博物館

小川浩一 2013『市原市山新遺跡永津前地区発掘調査報告』（株）QOL・市原市教育委員会

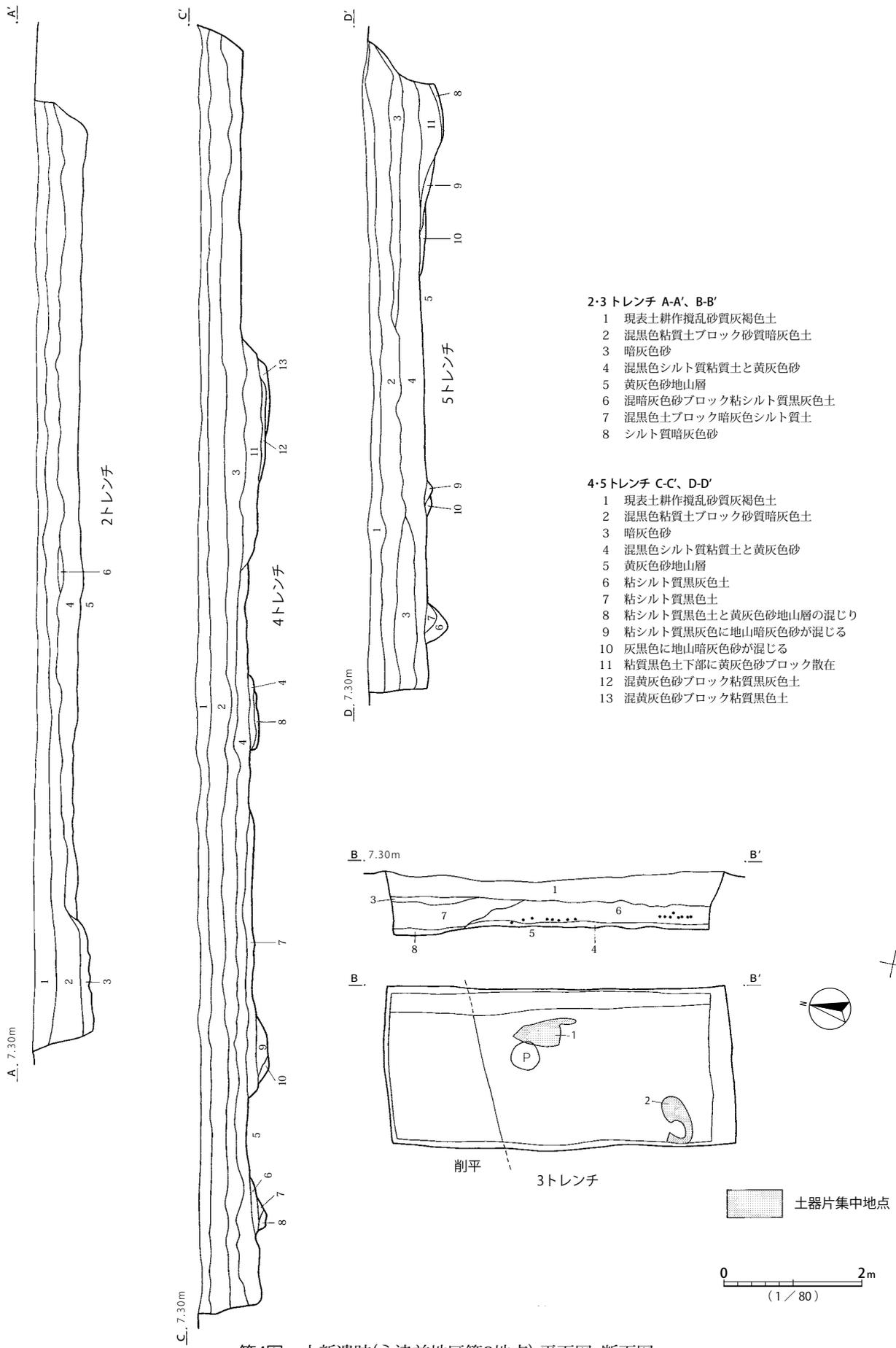
市原市教育委員会 2016「山新遺跡永津前地区」『平成 27 年度市原市内遺跡発掘調査報告』



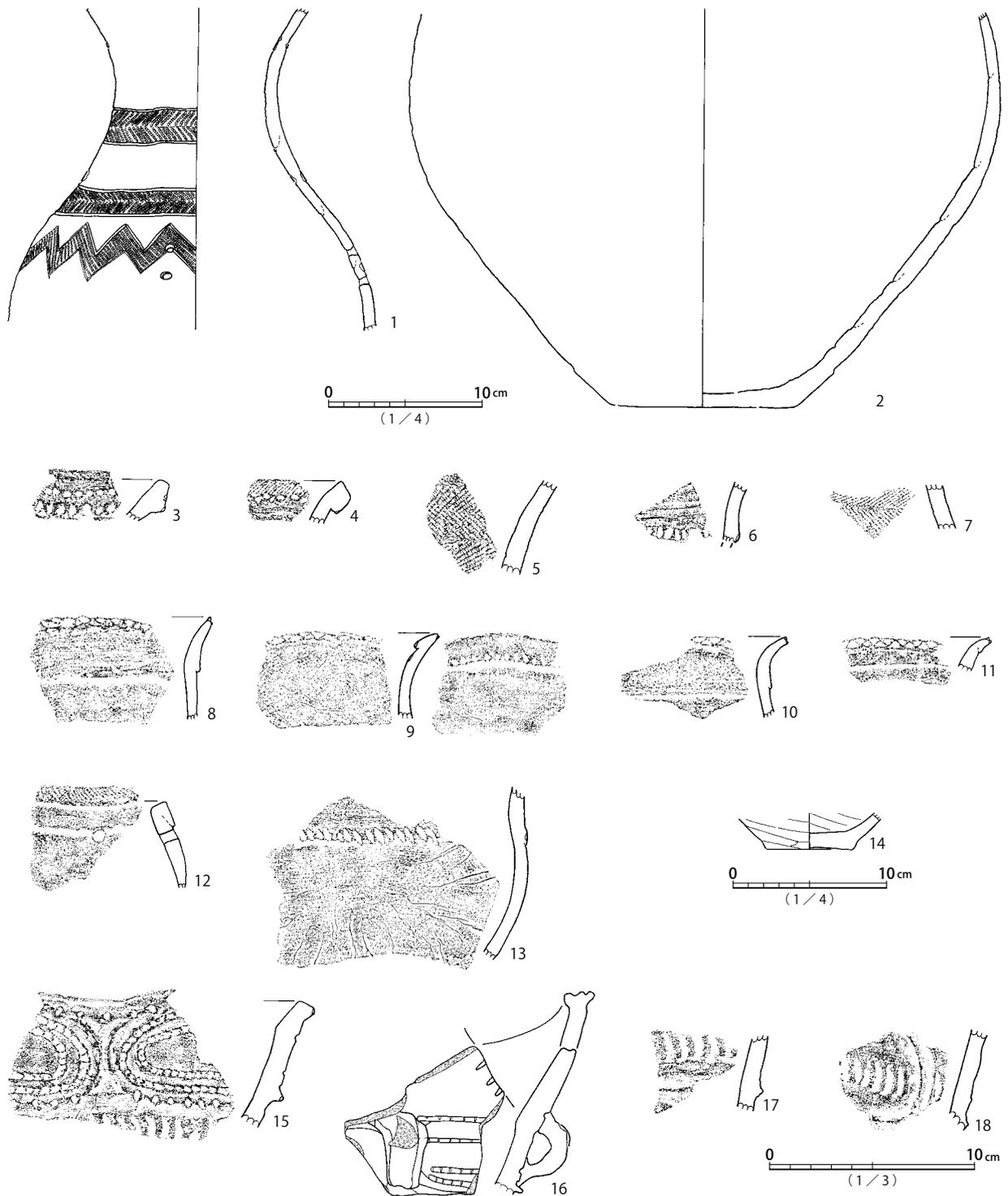
第2図 山新遺跡(永津前地区第2地点) 周辺地形図



第3図 山新遺跡(永津前地区第2地点) トレンチ配置図



第4図 山新遺跡(永津前地区第2地点) 平面図・断面図



第5图 山新遗迹(永津前地区第2地点) 出土遗物 实测图

### 3 椎津城跡（重要遺跡確認調査）

**遺跡の位置** 椎津城跡は東京湾東岸、椎津川の左岸河口部標高約 28m の台地上に位置し、海岸平野と主郭部との比高差は 25m ほどになる。今回の調査は椎津城跡の遺跡範囲の北端部に位置し、城の占地する舌状台地の先端部分に当たる（第 6 図①）。調査区は主郭中央東半分の 1 トレンチ地区、主郭東側の主郭東方腰曲輪の 2 トレンチ地区と主郭西側の主郭西方腰曲輪の 3 トレンチ地区に分かれる。主郭の位置する台地は、東西に開析谷が北から南に入り込み、主郭は東西約 160m、南北約 50m の規模があり、南側は一ノ堀によって台地から切り離され、独立丘状化している（第 7 図）。

椎津城跡は、平成 27 年 7 月 3 日付けで市原市指定文化財として史跡指定され、平成 28 年に追加範囲が指定されている。指定の理由は、戦国時代の城郭跡で学術的価値が高いものとされ、過去、主郭部分の発掘調査がなされている（伊禮 1973、笹生 1990）。また、調査成果を基に多様な評価がなされており、それら資料が文献史料に裏付けられ、遺跡の重要度が認知され史跡指定につながっている（鈴木・須田 1980、八巻 1996、小高 1998）。文献史料には、椎津城の争奪戦が繰り返し記載され、「…永禄の初めごろを境として椎津城は地域の支配の拠点から、戦略上の要地を押える軍事施設として、西上総の数ある城郭の中でもこれほど取り合いの激しい例はなく、その理由はひとえに水陸の接点に位置し、しかも主要な街道を扼する椎津城の地理的条件に求められようが、下総国境に近く常に敵対する勢力間のはざまにあったという歴史的な条件も考慮すべきである」（小高 1998 p.121）と、紹介されている。

また、椎津城跡主郭縁辺部の調査でも、城郭関連、中世遺構事例が報告されている（櫻井 1997、高橋 1998、市原市教育委員会 2016）。

**調査概要** 今回の調査は、市指定された椎津城跡主要部の構造を把握することを目的とした重要遺跡確認調査として、平成 28 年 2 月に実施した。

第 6 図の地形図から、椎津城跡は台地の先端は東京湾に面し、台地下は波蝕台と砂丘帯からなり、北側は椎津川の河口になっている。おそらく河口は天然の良港として「椎津」の地名が示すよう、中世「津」の様相を呈していたものと想定される。海岸線上の砂丘帯上には房総往還が通り、その分岐として第 6 図①の久留里街道西往還がある（註 1）。この久留里街道西往還ルートも、中世以前に遡る古代道路と連絡する可能性が高い（田所 1998）。これらのことから、海上交通と陸上交通の接点となる交通の要衝に、椎津城跡が選地されていることが理解される。

近年、戦国末の城郭の調査例（小高 2014）もあり、椎津城跡が戦国末の城郭として保存状態が良く、数度の改修、修築を経て現在の形状になったことが、今回の調査でも裏付けられた。

**調査遺構** 調査を実施した主郭部は、現標高が 30m あり、かつて家屋建設のため平坦に削平され、南側と東側崖上には、フェンスが設けられている（第 7 図①中央から東側）。

主郭部の調査区を 1 トレンチ地区とし、南北方向に 3 本のトレンチを設定して調査を進めた。表層を剥がすとロームブロックが多い土層となり、断面観察では表層の土壌直下から、水平に押し固められた筋状のロームブロックを多量に含む堆積が観察される（第 8 図上段）。1-1 トレンチの北半分をやや深く掘削して、表層下 1.5m まで、版築状のロームブロックを主材とする突き固められた面が観察された。地山または自然堆積の土壌基盤層は検出されなかったため、現表土下は 1.5m 以上の盛土造成であ

る。1 トレンチ地区の盛土の主材であるロームブロックには、木炭粒が多量に混入しており、平成元年度の主郭部別地点の調査成果（笹生 1990）と合致しており、主郭部は火災後、大規模な盛土造成がなされたと考えられている。平成元年度の主郭部調査区は、今回の主郭調査区の西側に位置し（第7図網点部分）、調査内容を比較すると、今回調査区からの遺構・遺物の検出は少なく、今回の主郭調査区は、かつての宅地造成のため、表層の遺構・遺物は削平された可能性があり、土塁等の表層遺構の確認はできなかった。

主郭東方腰曲輪を2 トレンチ地区とした。標高 26m の一段高い北部分と、その南側に位置し、一段低い標高約 25m との平場に分けられる。どちらも近年まで家屋があり、住宅の基礎が埋没、またはコンクリート基礎が露出している（第7図②）。2-1 と 2-2 トレンチは南北に設定したが、北側は家屋建設による基礎と配管が検出された（第8図下段）。そのため、家屋基礎部分は回避し、南側部分を約 1.5m 掘削した。古井戸西側脇の 2-3 トレンチは、ほぼ全面掘削が可能で、北半分には、焼土と木炭の集中範囲と貝殻の破棄を検出した。それらは、2-1、2-2 トレンチと同じくロームブロック、灰白色の粘土ブロックを主材にした盛土に覆われており、その盛土は、つき固められた互層状の水平堆積である（第9図）。2-4 トレンチは、2-1 南側の連続であり、2-5 トレンチは 2-2 トレンチ南側の連続である。どちらも 2-1 ～ 2-3 トレンチと同じ堆積状況を示し、盛土であることが確認された。2-6 トレンチは東西方向に設定した。断面観察では、ロームブロックと灰白色粘土ブロック主材の版築状土層が互層に堆積しており、主郭東方腰曲輪も主郭同様、表層から地下 1.5m 以上の盛土造成である。

主郭西方腰曲輪と一ノ堀部分を、3 トレンチ地区とした（第7図④）。3-1 トレンチは一ノ堀中央部部分で堀と並行して、東西方向に設定した。トレンチ東端から、東は約 1.5m 地表が高くなっている。そのため一ノ堀の形状変化を観察したが、一段高くなる手前部分と西に離れる部分では差異は認められず、2m 掘削しても堀底は未検出であり、出水したので掘削を停止した。地表下の 50 cm 付近で富士宝永火山灰が検出され、それ以下の堆積は、ロームブロックと黒色土壌の互層が観察され、短期間に人為的に埋戻されたと推定される（第11図上段）。埋戻し土層中に遺物を検出しており、運ばれた土砂中に混入したと考えられる。

3-2 トレンチでは、主郭部側の一ノ堀側立ち上がりを検出している（第11図中段）。検出された堀の側面は、地山自然層を掘り削った荒砂層で姉崎層の基盤層と考えられ、下総層群上部層に相当する（徳橋・遠藤 1984）。また、富士宝永火山灰が地表下約 1m の位置で検出されており、それより上層は耕作土壌になっている。富士宝永火山灰から下は、ロームブロックや白色粘土主材の埋戻し土層が不規則に連続するので、3-1 トレンチと同じく人為的に埋められたと考えられる。

3-3 トレンチは、南北に設置して、北半分は一ノ堀からの西辺堀部分となる。堀底は未検出であるが、堆積は、灰色シルト質粘土ブロックやロームブロックであり、土壌層ではなく短期間に埋め戻された状態を示している。トレンチ南半分は、地山の荒砂層面を地表下で検出しており、四角錐台形状の地山の斜辺が南北方向に検出されている（第13図）。それは一ノ堀の南辺と西辺の外側接合点に位置することから、現遺構確認面レベルで一ノ堀の上辺幅は約 12m となる。

3-4 トレンチは、主郭北方腰曲輪の南西隅の下、主郭西方腰曲輪の L 字状の折れ部に位置する（第7図）。トレンチは東西方向に配置し、東側は主郭北方腰曲輪の城壁際に設定した。城壁際より地山荒砂層を検出し、主郭北方腰曲輪の裾が深く入り込むので、一ノ堀が主郭南辺から西辺に迂回しながら連続

していることが確認された。3-7 トレンチも東側で地山荒砂層を検出しているが、その裾から地表面より 2m 掘削しても検出できないほど堀底は深い。主郭西側の一ノ堀の堆積状況は、主郭側からの埋戻しが認められる。断面ではロームブロックと灰色粘土ブロックの主材による、主郭斜面上方向からの反復的な土砂の投げ入れが観察される。椎津城跡測量図（原図 1：500）では、主郭西方腰曲輪の標高は南側位置で 21m、北側位置で 16m と、北側に向かって斜面を形成しており、南北に長い主郭西方腰曲輪等高線は、南北方向の中央が高く、主郭北方腰曲輪群側（第 7 図⑥）が低い状況が読み取れる。

3-5 トレンチは、3-2 トレンチの南側に位置し、一ノ堀の二ノ郭側の立ち上がりを探す目的で南北方向に設置したが、トレンチ内を地表から 2m まで掘削しても堀底や立ち上がりは検出されなかった。

断面観察では地表下 1 m 付近で富士宝永火山灰を検出し、江戸時代中期以降から畑地化したことがうかがえる。富士宝永火山灰堆積以前は、暗褐色層が連続し、ロームブロック等のごろごろした土層はない。二ノ郭の北西隅下にあたる南側の地表との現行落差は 6m となっている。

3-6 トレンチは、3-4 と 3-7 トレンチで検出した一ノ堀西側辺の外周ラインを検出する目的で、主郭西方腰曲輪を横断するように東西方向に設置した（第 12 図下段）。地山等は検出されず、断面観察においてロームブロック、灰色粘土ブロック主材の水平版築状土層の断面台形の土塁状遺構が観察された。東側は埋め戻しと想定される乱雑な土層が見られ、主郭西側を取り巻く一ノ堀西辺の覆土である。現地地表下から 2m 掘削したが、堀底は未検出である。遺構確認面上での一ノ堀西辺幅は約 12m である。土塁の上端部は約 3m あり、土塁西辺の外側は、西斜面方向に灰色粘土層ブロックの埋戻し、ないしは整地層が観察され、地表下 30 cm 付近で富士宝永火山灰の集積がみられた。そのため土塁西側は、18 世紀以後の江戸時代中期以降に再度の埋め戻し、ないしは整地がなされたと推測される。

3-8 トレンチは、3-3 トレンチと 3-5 トレンチ間に設定して、一ノ堀の南辺に連続することを、地山荒砂面で確認しており、一ノ堀の最大幅部分で遺構確認面幅が約 15m となる。堀幅は連続して広くなり、3-2 トレンチと 3-5 トレンチの遺構確認面では、約 20m となっている。3-3 トレンチ南半分の西側は、四角錐台形状の南北方向斜辺の西側にある。堀の堆積状況は、3-3 トレンチ北側半分同様、ロームブロックと灰色粘土ブロックの混合土で、短期間の埋戻しが観察される（第 13 図）。

3-9 トレンチは、土塁の南延長と、3-3 トレンチの西半分の状況を確認するために設定した。3-3 トレンチの一ノ堀隅部分は検出されず、地山荒砂層を地表直下で検出し、西方向に下って斜面を形成することが確認されたが、土塁状遺構は確認できなかった。一ノ堀南西外周部分は、二ノ郭南辺と西辺との関係、椎津城跡西側に大きく入り込む南北方向開析谷の谷頭部分であり、複雑な地形や構造が推測され、不明な部分が多い。

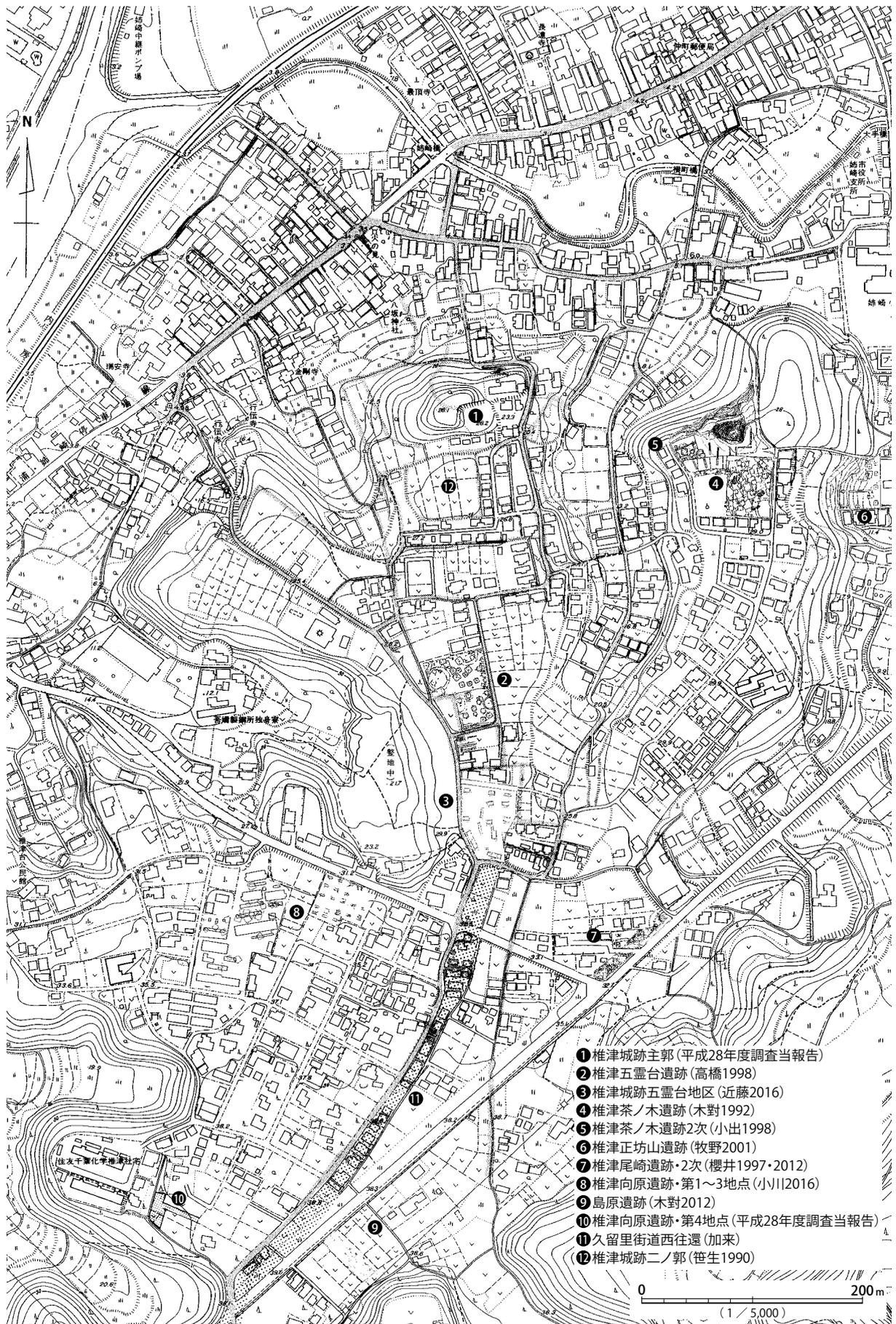
3-10 トレンチは、土塁の南側の状態を検出するため小規模に掘削し、地山荒砂層を検出したので、土塁状遺構の上端部の延長と判断した（第 12 図上段右）。

**出土遺物** 主郭部の 1 トレンチ群、主郭東方腰曲輪部の 2 トレンチ群、主郭西方腰曲輪部の 3 トレンチ群から出土した遺物を第 10 図にまとめた。検出された遺構は全て中世遺構であり、主郭部及び主郭東方腰曲輪に配置した 1、2 トレンチ群の遺構確認面は、すべて盛土中である。このことから、中世末（16 世紀後半）に大きく盛土造成されて、現在の椎津城跡の形状となっている（小高 1999）。これらの盛土から出土した遺物は、その造成時に混入したと考えられる。1 トレンチ群出土の掲載遺物はない。1～3 が中世時期の遺物で、それぞれ 2-3、2-5、3-6 トレンチから出土した。4 は 2-5 トレンチから出

土した土師器高坏脚部である。5、7～15は埴輪片であり、2・3トレンチ群から出土している。椎津城盛土内に埋没した古墳の遺物と推定されるが、古墳については全く不明である。6の石製五輪塔水輪部は、平成28年の調査時に元地権者から渡されたもので、主郭西方腰曲輪の3-6トレンチ、3-7トレンチ間で「耕作時の採集」と、見聞した。石造物は、主郭から転落してきた可能性も考えられる。

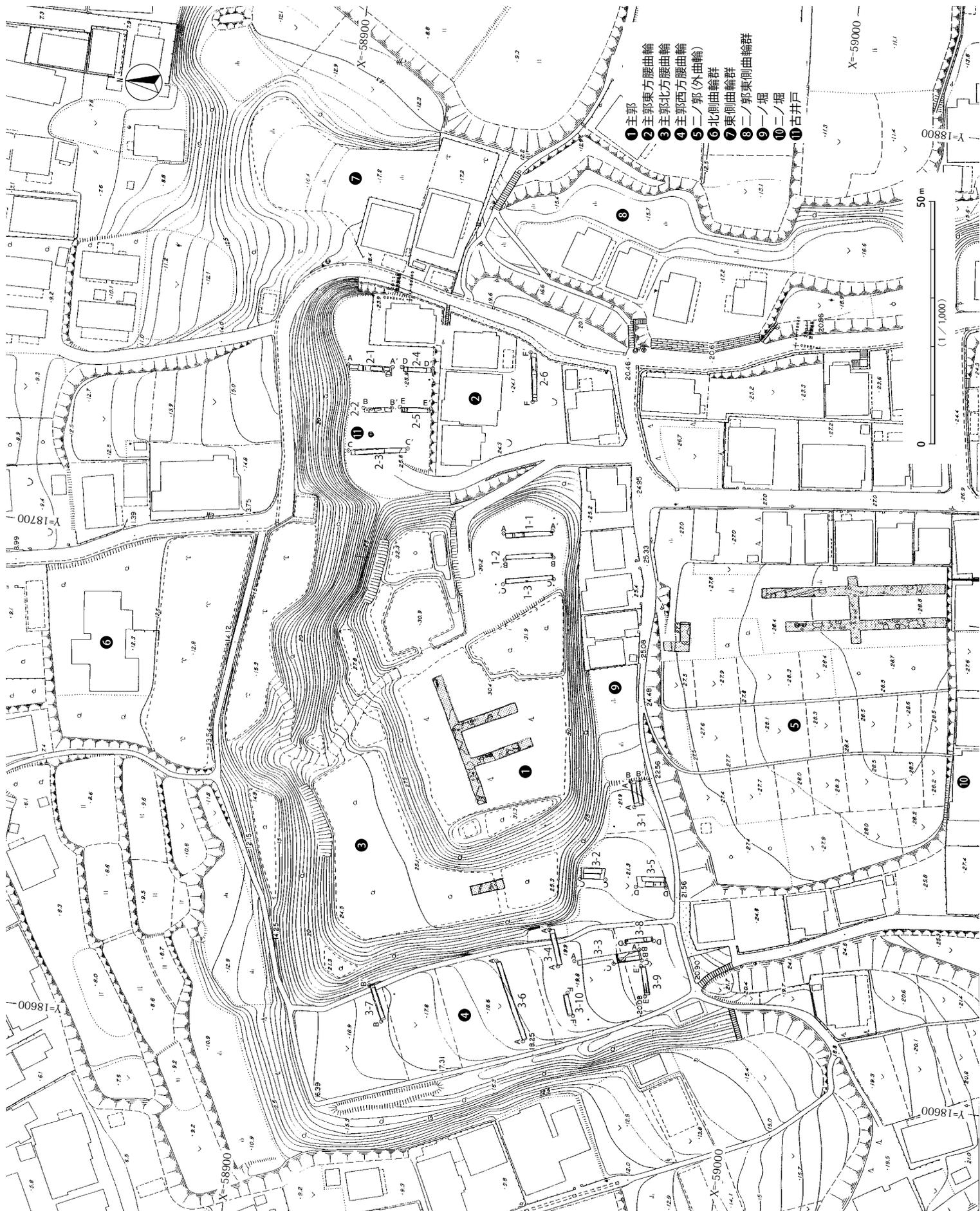
#### 引用参考文献

- 伊禮正雄 1973『椎津城の歴史（本丸跡と内濠の試掘について）』市原市教育委員会
- 鈴木英啓・須田 勉「椎津城跡」1980『日本城郭体系 6 千葉・神奈川』新人物往来社
- 徳橋秀一・遠藤秀典 1984『姉崎地域の地質』地域地質研究 通商産業省工業技術院地質調査所
- 千葉県教育庁文化課 1986「椎津城跡－内濠の要衝－」『房総のあけぼのⅢ』千葉県教育委員会
- 笹生 衛 1990「市原市椎津城跡」『千葉県中近世城跡研究調査報告書』第10集（財）千葉県文化財センター
- 木對和紀 1992『市原市椎津茶ノ木遺跡』（財）市原市文化財センター
- 八巻孝夫 1996「椎津城跡・正坊山城跡」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』千葉県教育委員会
- 櫻井敦史 1997「椎津尾崎遺跡」『市原市文化財センター年報』平成6年度（財）市原市文化財センター
- 小出紳夫 1998「椎津茶ノ木遺跡第2次」『市原市文化財センター年報』平成10年度（財）市原市文化財センター
- 小橋健司 1998「椎津堰谷遺跡第1地点・第2地点」『市原市文化財センター年報』平成10年度
- 高橋康男 1998「椎津五霊台遺跡」（財）市原市文化財センター調査報告書第64集
- 小高春雄 1998「椎津城跡」『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料 千葉県史料研究財団
- 田所 真 1998「椎津坂ノ上遺跡」『市原市文化財センター年報』平成7年度（財）市原市文化財センター
- 小高春雄 1999「椎津城跡」『市原の城』編集発行小高春雄
- 市原市教育委員会 2001「椎津正坊山遺跡」『市原市内遺跡発掘調査報告』平成12年度
- 田所 真 2005「椎津城跡について」『市原市五井・姉崎地区の遺跡と文化財』市原市地方史研究協議会
- 市原市教育委員会 2012「椎津尾崎遺跡第2地点」『市原市内遺跡発掘調査報告』平成23年度
- 市原市教育委員会 2012「島原遺跡」『市原市内遺跡発掘調査報告』平成23年度
- 小高春雄 2014「大網白里市小西城跡」『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書』平成25年度（財）千葉県文化財センター
- 市原市教育委員会 2016「椎津城跡」『市原市内遺跡発掘調査報告』平成27年度
- 市原市教育委員会 2016「椎津向原遺跡第3地点」『市原市内遺跡発掘調査報告』平成27年度
- 註1 加来利一「迅速測図を用いた久留里街道西往還の推定と付近の石造物」（千葉県の道標 <http://kaku-net.jp/>）



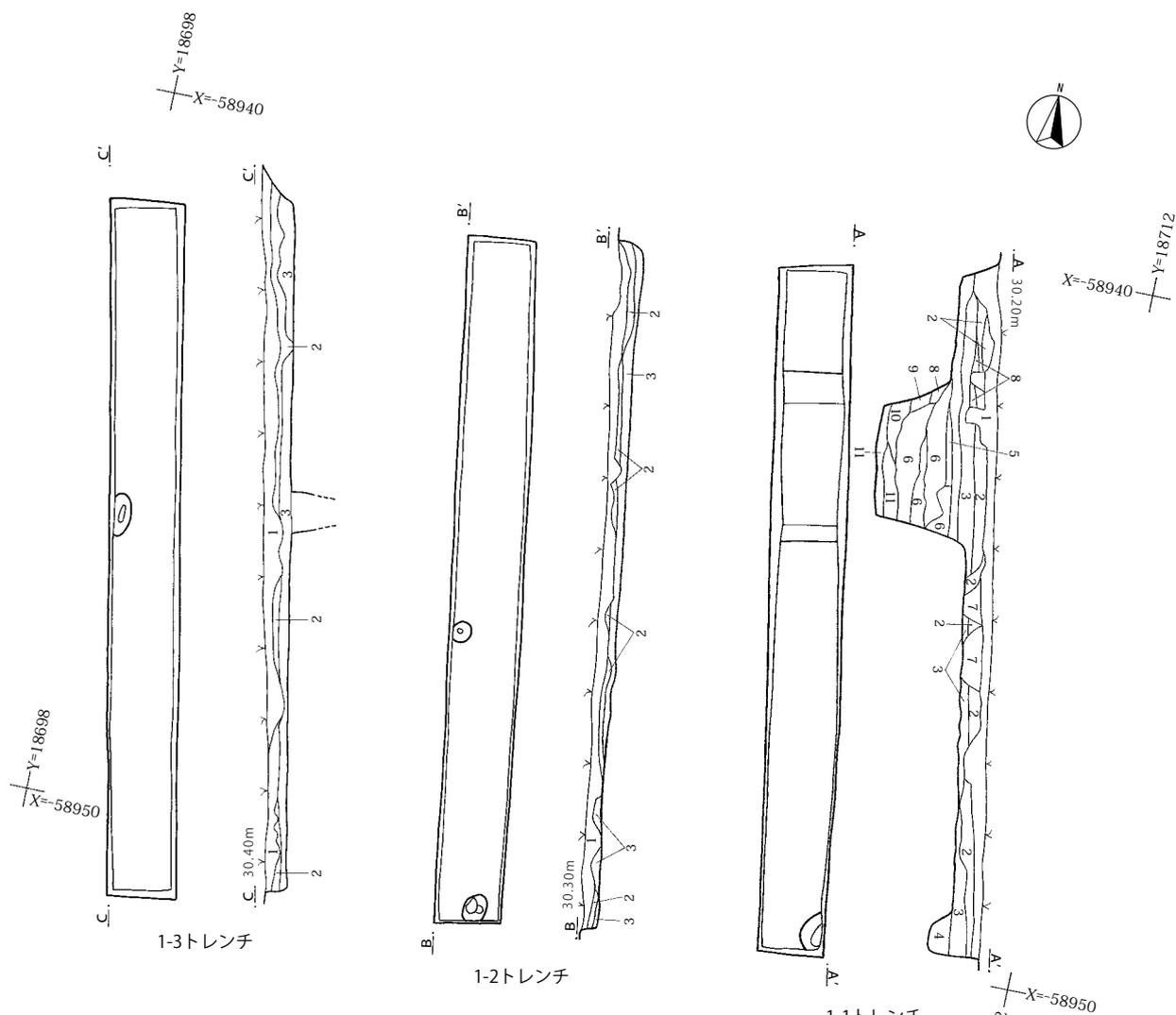
第6図 椎津城跡(重要遺跡確認調査) 周辺地形図

(S=1:5000 昭和55年 市原市地形図 F2)



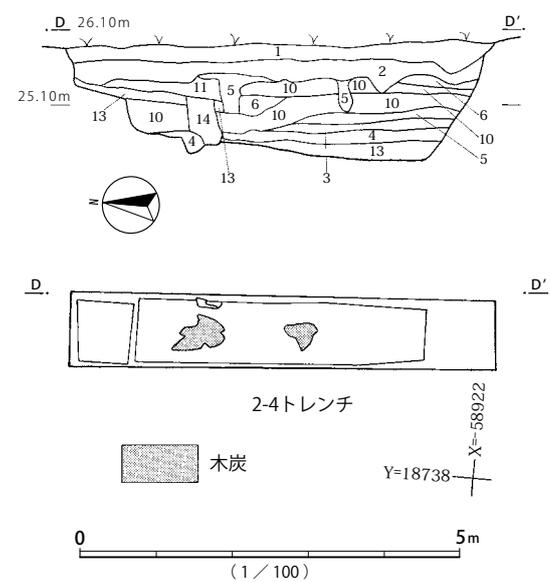
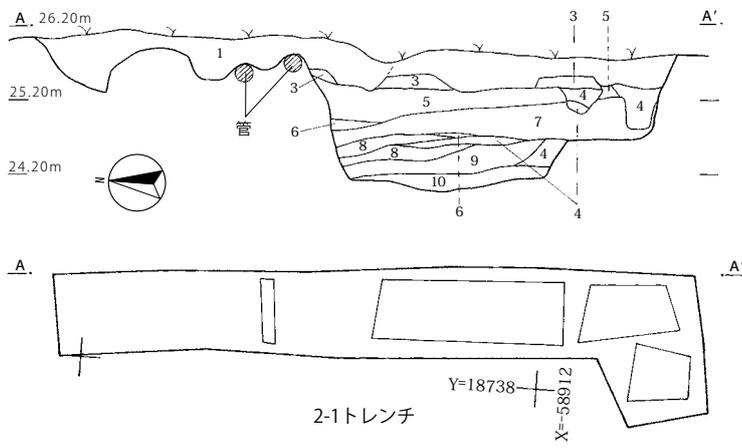
第7図 椎津城跡(重要遺跡確認調査) トレンチ配置図

(S=1:1000 平成5年 測量地形図)

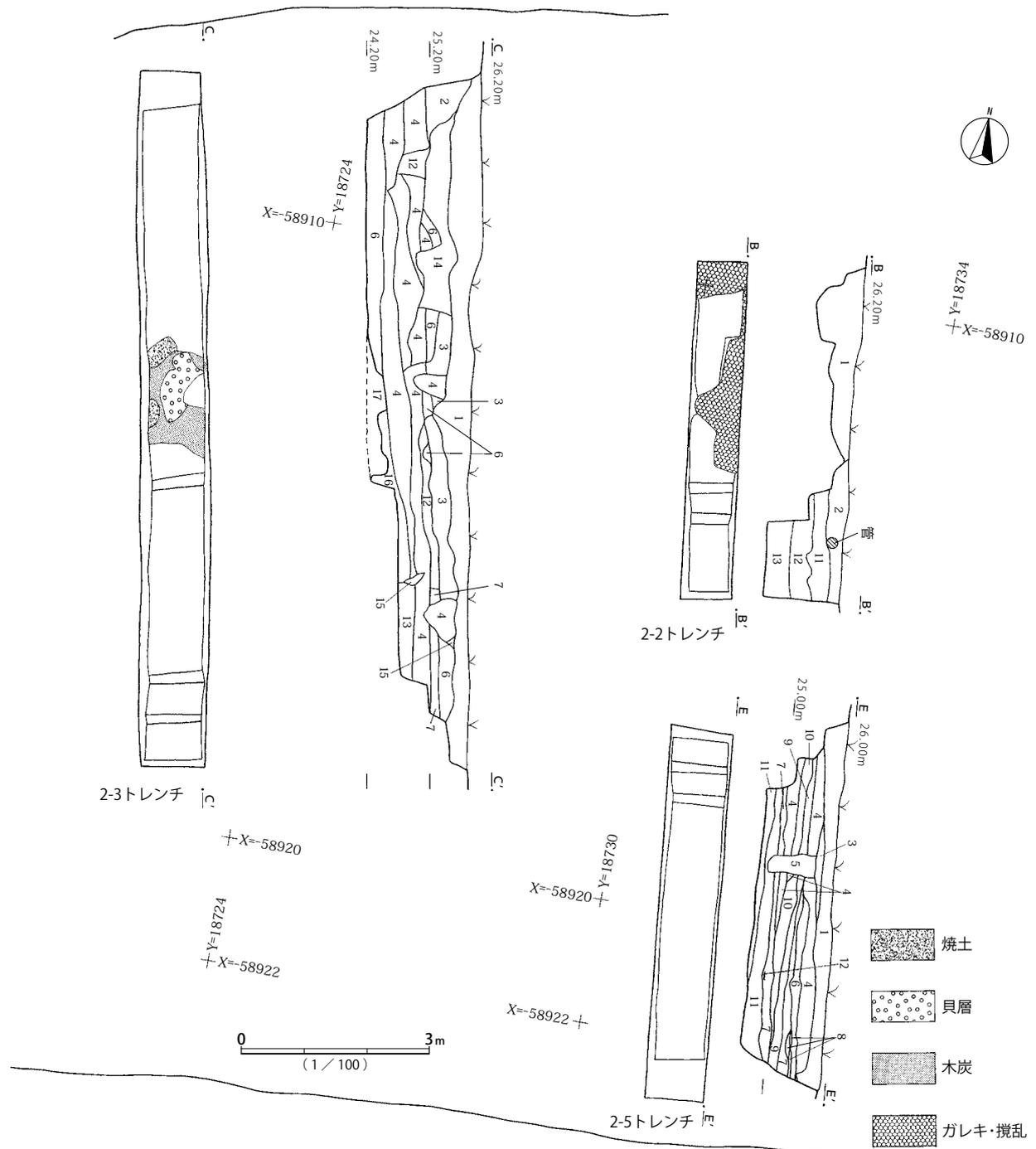


1-1トレンチ A-A'、1-2トレンチ B-B'、1-3トレンチ C-C'

- 1 現表土 混現代ゴミ・ローム粒明褐色土
- 2 硬化混小ロームブロック褐色土
- 3 混木炭粒・木炭片・ロームブロックが散在する暗褐色土
- 4 硬化した混木炭粒・木炭片・ロームブロックが散在する暗褐色土
- 5 硬化した混木炭粒・木炭片・ロームブロックが散在する暗褐色土
- 6 混黒色土・ロームブロック褐色土
- 7 混黒色土・ロームブロック褐色土
- 8 混ローム褐色土
- 9 混暗褐色土褐色土
- 10 混ロームブロック褐色土
- 11 混暗褐色土ロームブロック



第8図 椎津城跡(重要遺跡確認調査) 平面図(1)・断面図(1)



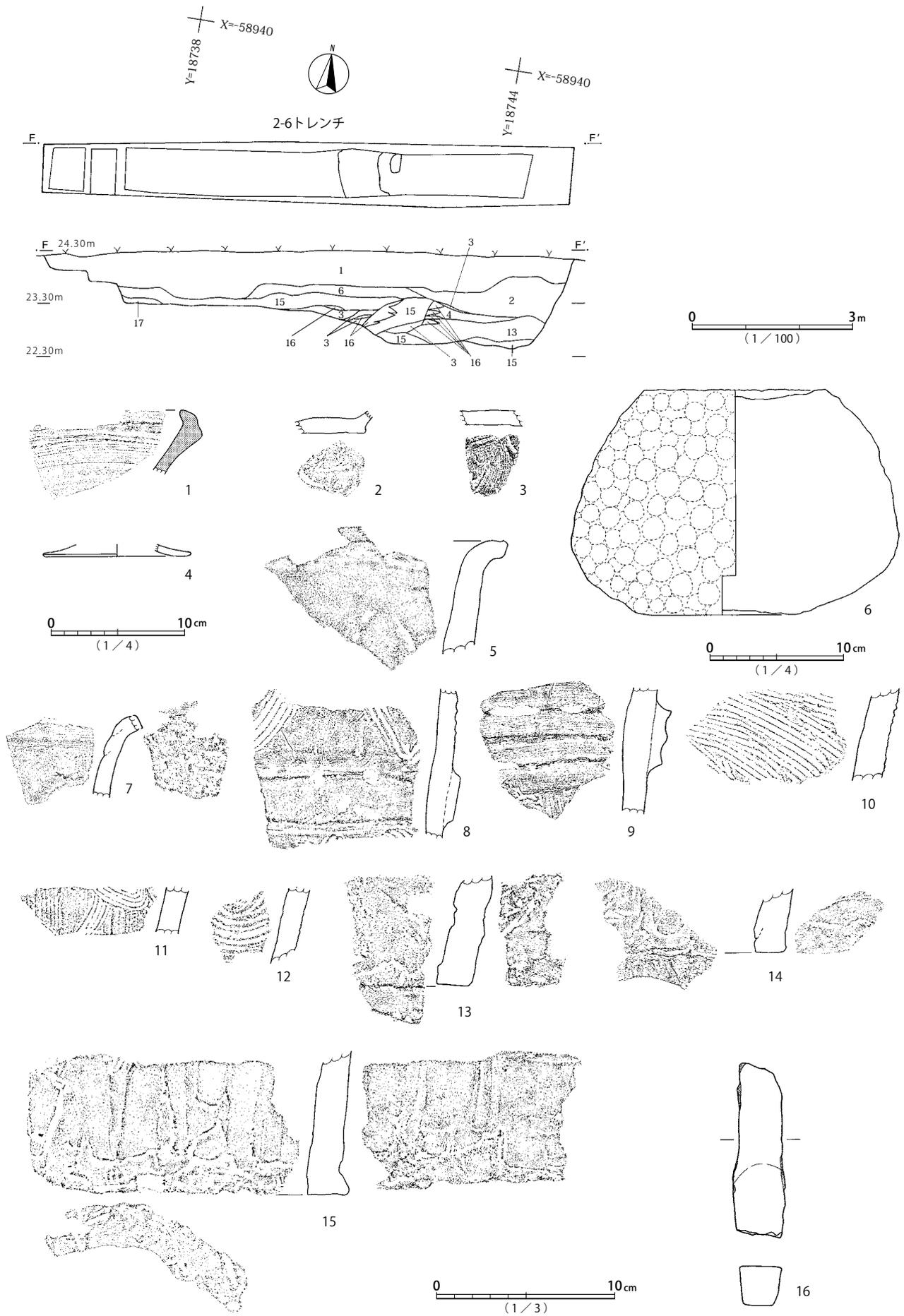
2-1 トレンチ A-A'、2-2 トレンチ B-B'、2-3 トレンチ C-C'

- 1 現表土 混現代ゴミ瓦礫・コンクリート基礎攪乱
- 2 暗褐色土層
- 3 混ローム粒褐色土
- 4 混ローム、ロームブロック褐色土
- 5 混ロームブロック・暗褐色土の褐色土
- 6 混ローム暗褐色土
- 7 混暗褐色土・灰白色粘土塊のロームブロック褐色土
- 8 混ロームブロック・木炭・灰・暗褐色土
- 9 混大量ロームブロック褐色土
- 10 混木炭片・暗褐色土・灰白色粘土の暗褐色土
- 11 混木炭片暗褐色土
- 12 混ローム粒・灰白色粘土の暗褐色土
- 13 混ロームブロック・灰白色粘土の暗褐色土
- 14 黒褐色土
- 15 木根
- 16 混ロームブロック・木炭片の褐色土
- 17 混褐色焼土・木炭灰

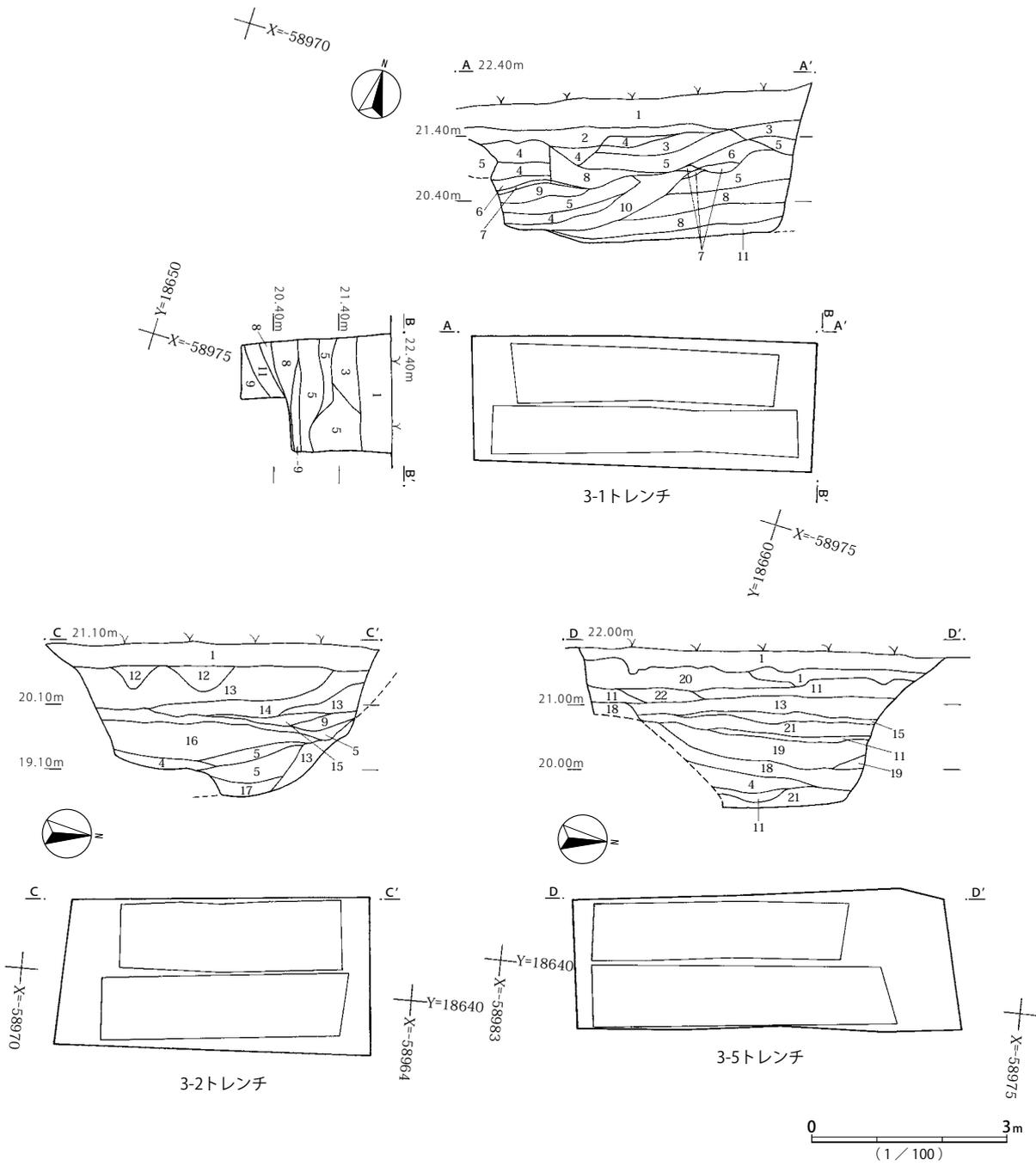
2-4 トレンチ D-D'、2-5 トレンチ E-E'、2-6 トレンチ F-F'

- 1 現表土 混瓦礫・宅地造成客土の攪乱暗褐色土
- 2 混ローム粒・灰白色粘土粒の褐色土
- 3 混ローム粒褐色土
- 4 混ローム粒暗褐色土
- 5 混ローム粒・粘土粒の褐色土 (ピットの覆土)
- 6 混ローム・粘土粒の暗褐色土
- 7 混ローム・粘土ブロック褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 混ローム粘土塊の暗褐色土
- 10 混ローム粒・暗褐色土の灰白色粘土
- 11 混ロームブロック・木炭片の褐色土
- 12 木炭片
- 13 混ローム・ロームブロックの褐色土
- 14 混暗褐色ロームブロック褐色土
- 15 混灰白色粘土・ロームブロック褐色土
- 16 黒色土
- 17 褐色土

第9図 椎津城跡(重要遺跡確認調査) 平面図(2)・断面図(2)



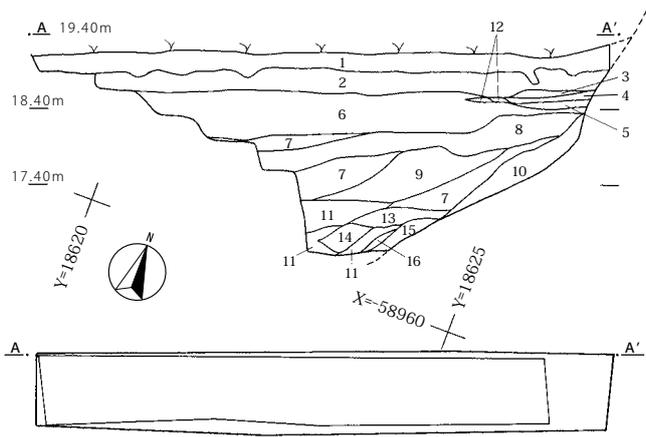
第10図 椎津城跡(重要遺跡確認調査) 平面図(3)・断面図(3)・出土遺物 実測図



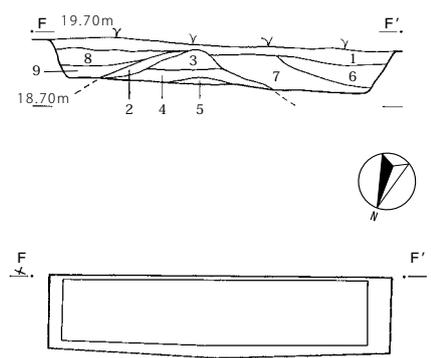
3-1トレンチ A-A'、B-B'、3-2トレンチ C-C'、3-5トレンチ D-D'

- |  |   |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1 現表畑耕土灰褐色土</li> <li>2 混富士宝永火山灰・ローム粒の暗褐色土</li> <li>3 混ローム粒・黒色土の褐色土</li> <li>4 混ローム褐色土</li> <li>5 混ロームブロック褐色土</li> <li>6 混黒色土・ロームブロック褐色土</li> <li>7 混ローム黒色土</li> <li>8 混ロームブロック暗褐色土</li> <li>9 混ローム粒暗褐色土</li> <li>10 混ロームブロック・黒色土の暗褐色土</li> <li>11 暗褐色土</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>12 耕作攪乱灰褐色土</li> <li>13 混ローム粒・砂粒の褐色土</li> <li>14 混ローム粒・ロームブロック・砂粒の褐色土</li> <li>15 混富士宝永火山灰・ローム粒の褐色土</li> <li>16 しまっている混ローム粒・砂粒の褐色土</li> <li>17 混砂ロームブロック褐色土</li> <li>18 混白色粘土粒・ローム粒の褐色土</li> <li>19 混白色粘土塊・ローム粒の褐色土</li> <li>20 混白色粘土粒・褐色土</li> <li>21 褐色土</li> <li>22 混白色粒暗褐色土</li> </ul> |
|--|---|

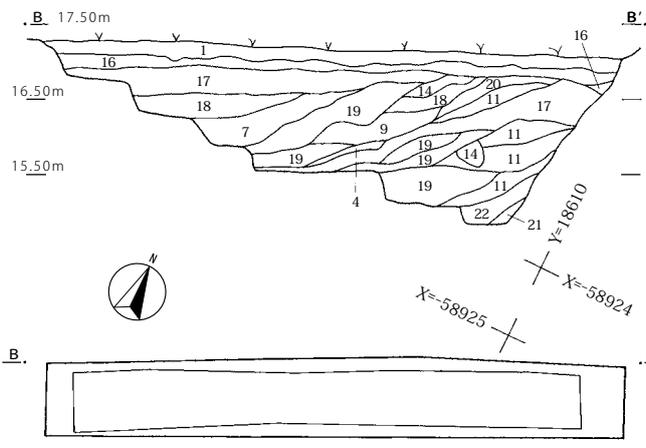
第11図 椎津城跡(重要遺跡確認調査) 平面図(4)・断面図(4)



3-4トレンチ

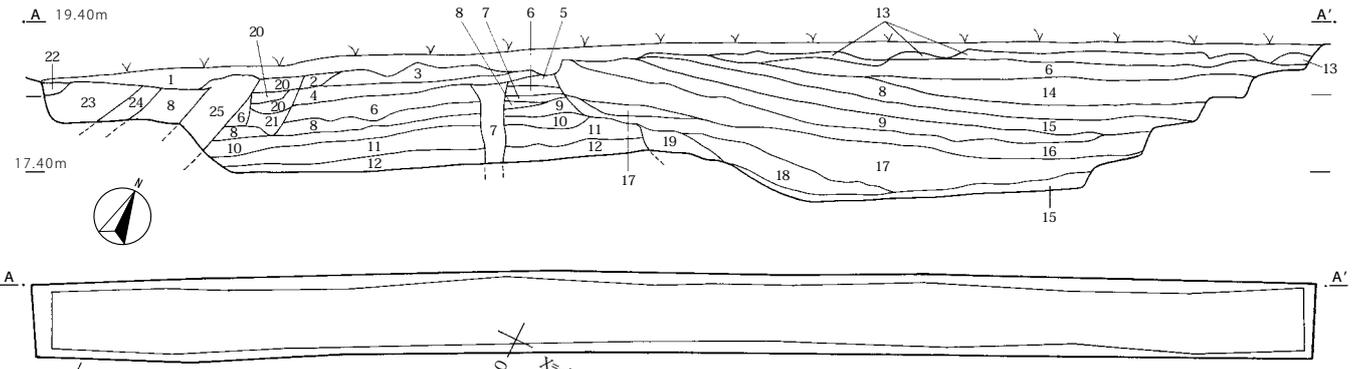


3-10トレンチ



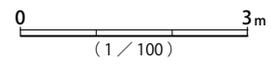
3-7トレンチ

- 3-4トレンチ A-A'、3-7トレンチ B-B'
- 1 現表畑耕土 砂質灰褐色土
  - 2 混砂粒・灰褐色土
  - 3 混砂・粘土層
  - 4 混富士宝永火山灰褐色土
  - 5 混灰色粘土・砂の褐色土
  - 6 混灰色粘土・砂・木炭の褐色土
  - 7 混灰色粘土・ローム粒褐色土
  - 8 混灰色粘土・小ロームブロック・黒色土の褐色土
  - 9 混黒色土・灰色粘土褐色土
  - 10 混ロームブロック・黒色土の暗褐色土
  - 11 混粘土・ロームブロック褐色土
  - 12 木根攪乱灰褐色土
  - 13 混ローム粒・木炭粒の暗褐色土
  - 14 混褐色土・ロームブロックの褐色土
  - 15 混粘土灰色砂
  - 16 混ローム粒暗褐色土
  - 17 混ローム粒褐色土
  - 18 混粘土粒褐色土
  - 19 混ロームブロック・灰色粘土の暗褐色土
  - 20 混ロームブロック褐色土
  - 21 混粘土褐色土
  - 22 混粘土暗褐色土

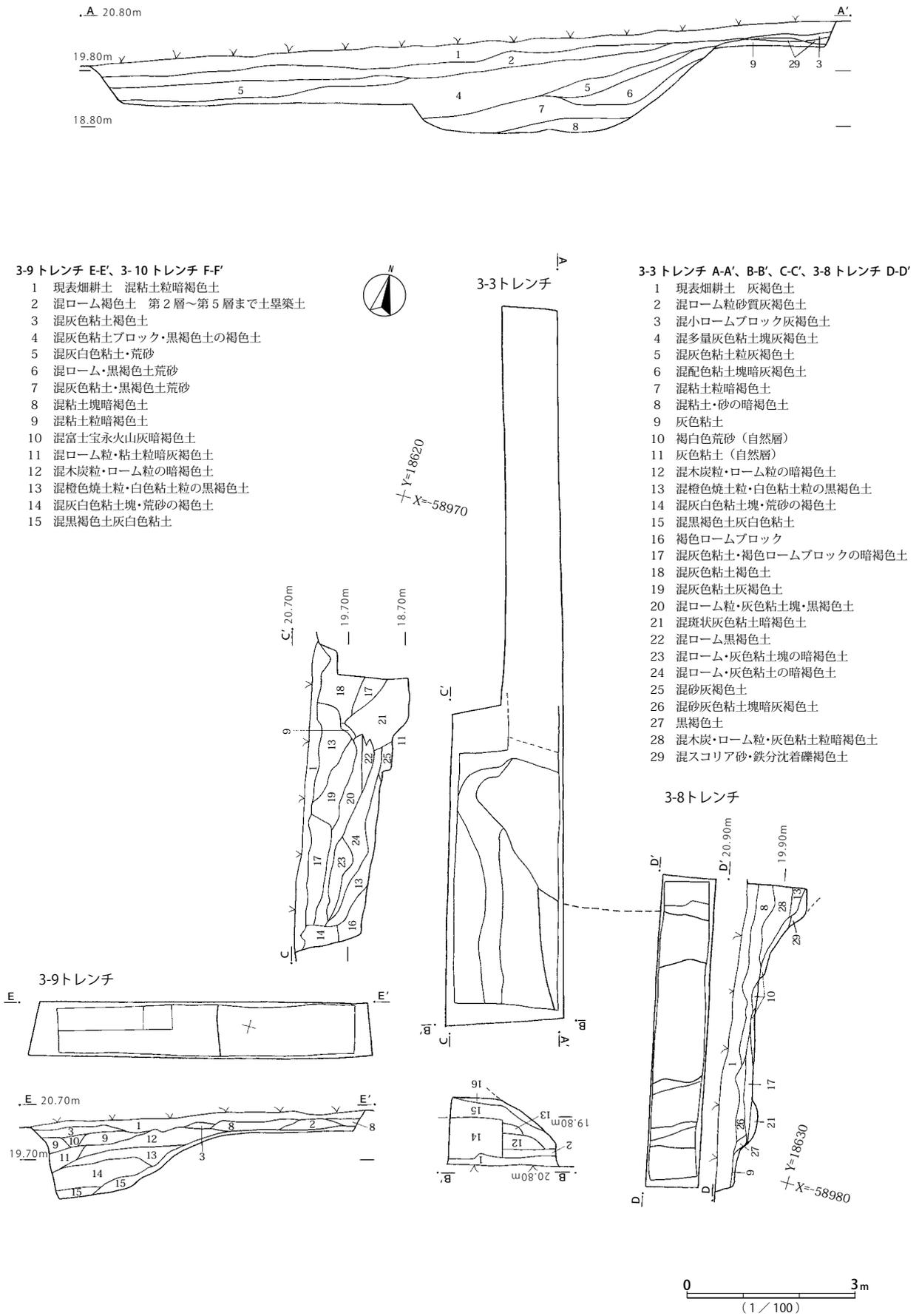


3-6トレンチ

- 3-6トレンチ A-A'
- |                            |                   |                           |
|----------------------------|-------------------|---------------------------|
| 1 現表畑耕土 砂質灰色土              | 10 混木炭粒・粘土粒の暗褐色土  | 19 混灰色粘土褐色土 (第19層まで一ノ堀覆土) |
| 2 混粘土粒・灰褐色土 第2層～第12層まで土壘築土 | 11 混多量灰色粘土砂質灰褐色土  | 20 混富士宝永火山灰褐色土            |
| 3 混多量灰色粘土褐色土               | 12 粘質褐色土          | 21 混焼土粒・ローム褐色土            |
| 4 混灰色粘土・ローム粒・木炭粒の褐色土       | 13 混ローム粒・木炭粒の暗褐色土 | 22 砂質褐色土                  |
| 5 灰色粘土                     | 14 混灰白色粘土粒暗褐色土    | 23 混砂灰色粘土ブロック             |
| 6 混粘土粒・ローム粒の褐色土            | 15 混斑状粘土塊褐色土      | 24 混褐色砂・粘土粒褐色土            |
| 7 混灰色粘土褐色土 柱痕跡?            | 16 混ローム粒・粘土粒の暗褐色土 | 25 混砂・灰色粘土粒・ローム粒・灰色土      |
| 8 混灰色粘土褐色土                 | 17 混ローム粒・砂の褐色土    |                           |
| 9 混粘土暗褐色土                  | 18 混粘土塊・ローム粒の褐色土  |                           |



第12図 椎津城跡(重要遺跡確認調査) 平面図(5)・断面図(5)



第13図 椎津城跡(重要遺跡確認調査) 平面図(6)・断面図(6)

## 4 市原城跡（門前地区第4地点）

**遺跡の位置** 遺跡は、市原台地中央新田川左岸標高22m前後の台地上に位置する（第14図①）。台地は新田川に向かって傾斜しており、4トレンチでは遺構確認面が現地地表下1.5m～2mとなっている。西側隣接では、門前地区第3地点②（2015年）、東方向30mの近隣では第2地点③（2014年）、北方向40mでは第1地点④の調査が実施されている（2013年）。同じく市原城跡の古代の遺跡としては、南西方向200mに市原城跡辻地区第1、第2地点⑤（2011、2013年）の調査が実施されている。また、当調査区から南東250mには、県指定無形文化財「柳楯神事」の出発地点である市原八幡神社⑥が鎮座している（島田1999）。その鎮座位置は、大字市原と大字郡本の境界である市原条里制遺跡の区画線上に存在し、注目される。

**調査概要** 調査は、個人住宅の建設に伴って実施され、調査区は赤道によって東西に分割されている。東側調査区の南半分（3～6、11、12トレンチ）はローム地山まで削平され、一段高く客土してかさ上げされていた。そのためか3、6トレンチの遺構検出はない（第15図）。その調査区北半分も耕作攪乱がソフトロームからハードロームまで及ぶ個所が多く、遺構確認面では攪乱が随所に及んでいる。調査区の赤道を挟んだ西側調査区も攪乱及び削平部分が多く、遺構の遺存状態は悪い。

**遺構と遺物** 1号溝状遺構は1、16トレンチ間で検出され、断面は逆台形を呈し、底辺2m、上辺3m、遺構確認面からの深さ0.5mを測り、埋め戻して整地された様子が断面でも観察できる。検出された遺物のうち、遺構に伴うものは9～13で、時期的には平安時代に機能を停止していたと考えられる。2号溝状遺構は、12トレンチから検出され、断面は逆台形を呈し、規模は底辺1m、上辺2m、確認面からの深さは0.8mを測る（第17図）。出土遺物は、第19図40の古墳時代前期の甕形土器が出土した以外は、いずれも小片で時期の確定ができない。1号溝状遺構と2号溝状遺構の方向（座標北から東へ62度傾く）は、一致しているが、2号溝状遺構の規模は1号よりやや小さい。稻荷台遺跡L-5地点の4号溝状遺構と同規模と推測される（田中2015）。奈良・平安時代の土坑については、同時期の住居跡と重複関係にあるものが多く、新旧関係も不明である。また、7、12トレンチの土坑は、その規模から竪穴住居跡である可能性が高い。この他にも、小規模な溝状遺構が、11、15トレンチから検出され、11トレンチでは2条が並行しており、1号、2号溝状遺構の掘削範囲を避けているようにも観察できる。1号、2号溝状遺構を一連の溝と考えると、最大25mほど間隔が空き不連続となるため、南側緩斜面に連絡する通路的空間の可能性はある。

検出された遺物は第18・19図にまとめた。縄文時代の遺物は、後期前半の土器片が若干出土する程度で、遺構の検出もなかった。弥生時代の遺物は、1、7、8、12、13～15、16トレンチで図示可能遺物が出土し、4、5、7トレンチでは竪穴住居跡を検出している。奈良・平安時代の土師器・須恵器については、1～4、8～12、14トレンチから出土している。奈良・平安時代の竪穴住居跡については、遺存状態が悪く判然としないが、2、8、9、13、14トレンチから検出されており、出土遺物より9世紀以降と考えられる。

今回の第4地点の調査は、比較的広範囲の確認調査となったが、市原城跡門前地区第1、第2地点の調査成果と比較すると、弥生時代後期の集落跡が第4地点まで広がることが確認された。第3地点の古墳時代後期の住居跡は、今回の確認調査区では検出されなかった。また平安時代の9世紀代の集

落も第1地点から連続することも確認された。第1地点の掘立柱建物跡は9世紀の前半を占め、その後は竪穴住居跡の集落域になると推測されている。

#### 引用参考文献

島田 潔 1999 「地割復元図」『上総国府推定地歴史地理学的調査報告書』市原市教育委員会

市原市教育委員会 2011 「市原城跡辻地区」『平成22年度市原市内遺跡発掘調査報告』

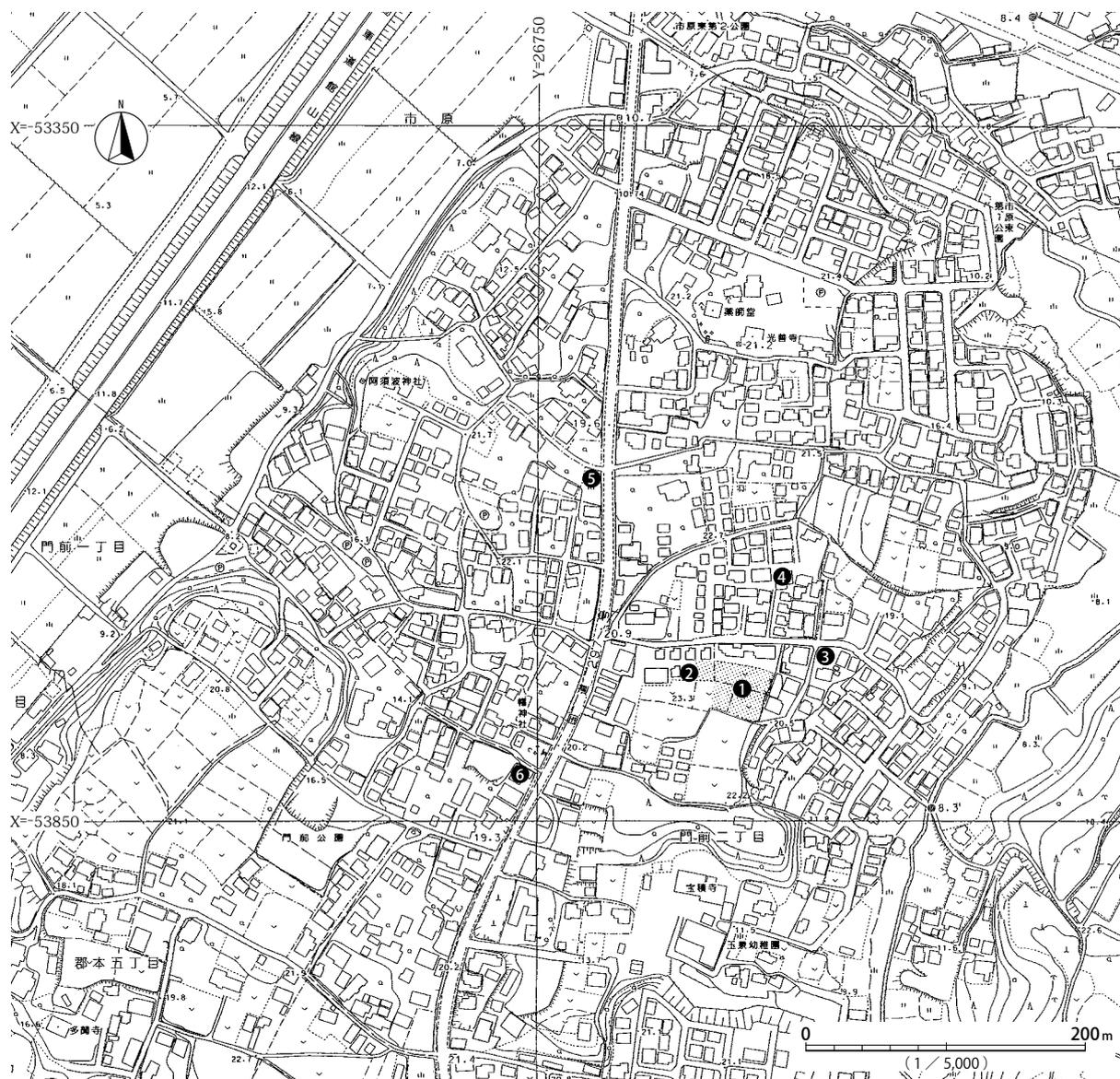
市原市教育委員会 2013 「市原城跡辻地区第2地点」『平成24年度市原市内遺跡発掘調査報告』

市原市教育委員会 2013 「市原城跡門前地区」『平成24年度市原市内遺跡発掘調査報告』

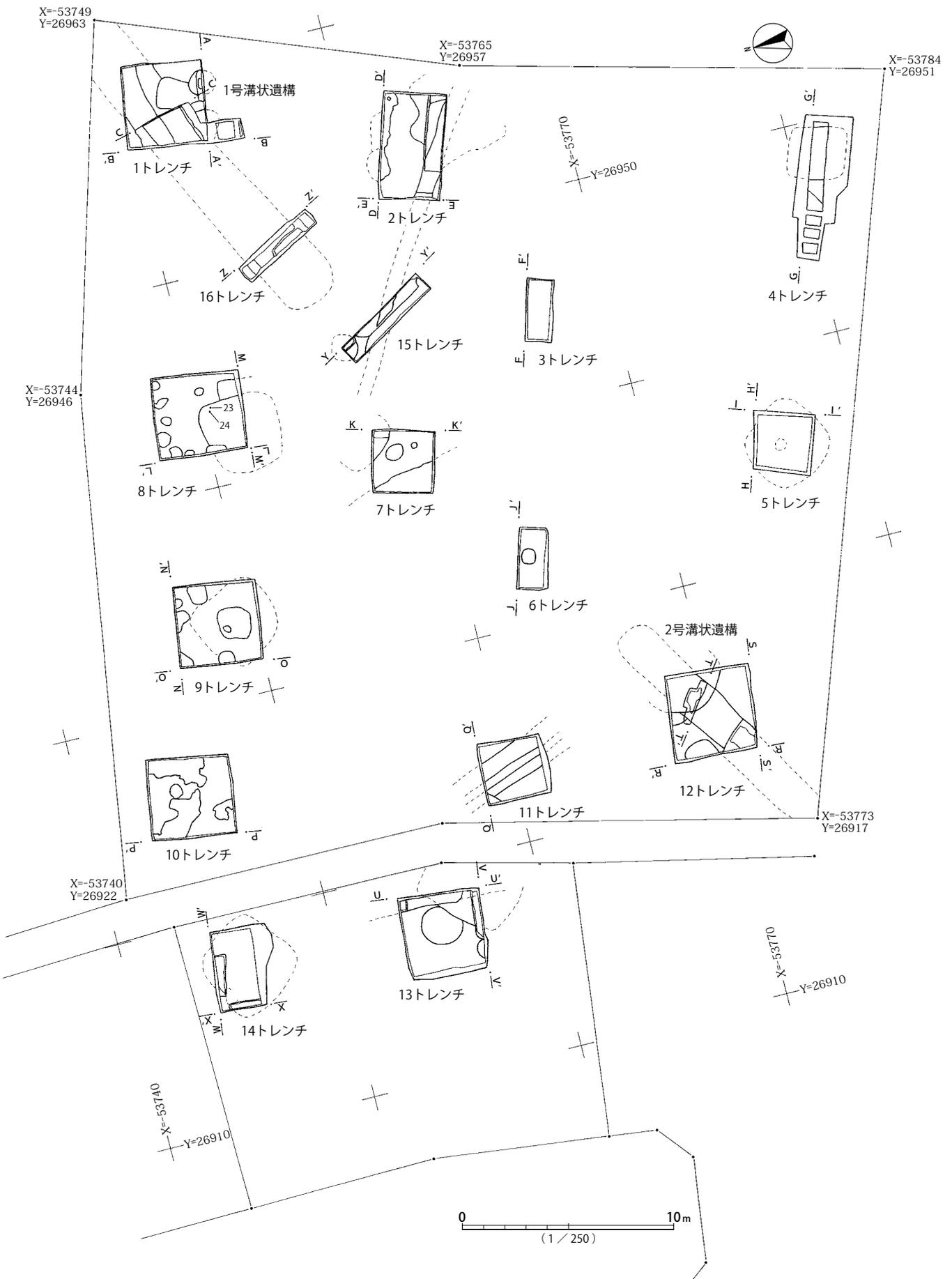
市原市教育委員会 2014 「市原城跡（門前地区第2地点）」『平成25年度市原市内遺跡発掘調査報告』

市原市教育委員会 2015 「市原城跡（門前地区第3地点）」『平成26年度市原市内遺跡発掘調査報告』

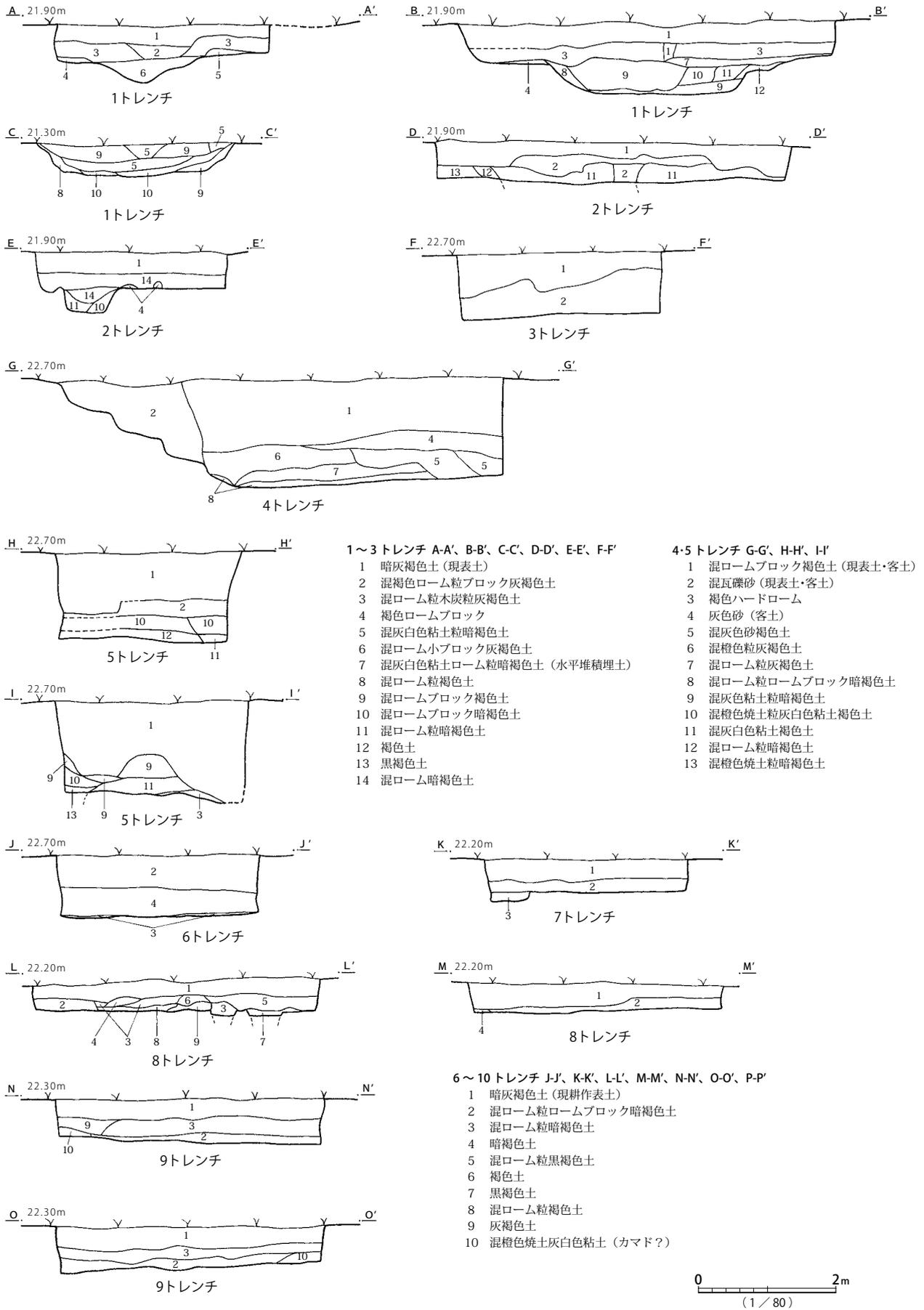
田中清美 2015 『市原市稲荷台遺跡L1・L4地点』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第33集



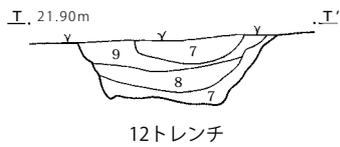
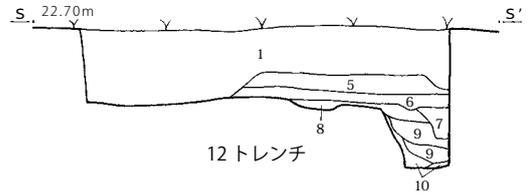
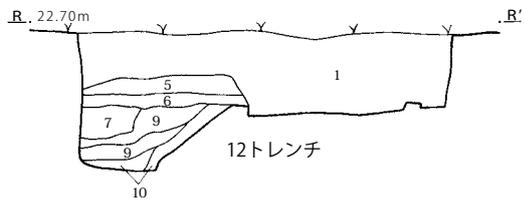
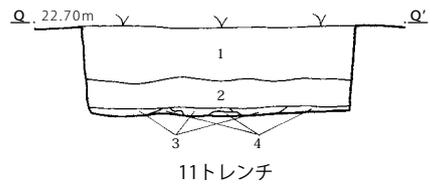
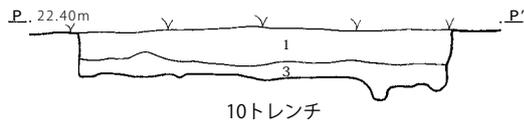
第14図 市原城跡(門前地区第4地点) 周辺地形図



第15図 市原城跡(門前地区第4地点) トレンチ配置図

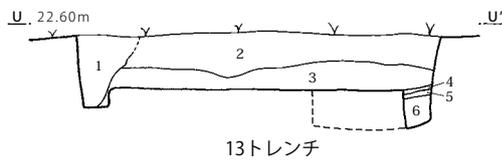


第16図 市原城跡(門前地区第4地点) 断面図(1)



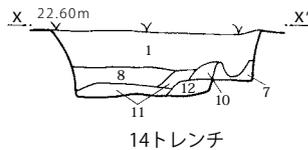
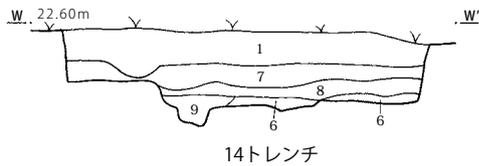
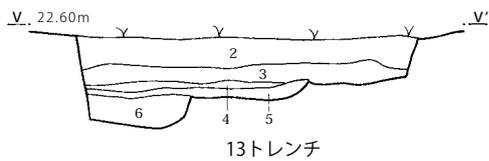
11・12トレンチ Q-Q'、R-R'、S-S'、T-T'

- 1 砂客土（現表土）
- 2 混瓦礫砂（客土）
- 3 混ローム粒暗褐色土
- 4 褐色ハードローム
- 5 暗灰褐色土
- 6 混ローム粒灰白色粘土粒褐色土
- 7 混ローム粒黒褐色土
- 8 混ローム粒暗褐色土
- 9 黒褐色土
- 10 混ローム黒褐色土



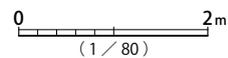
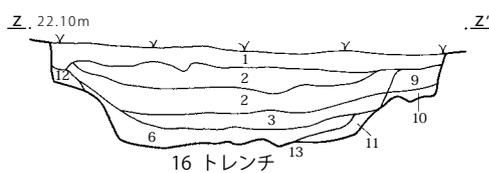
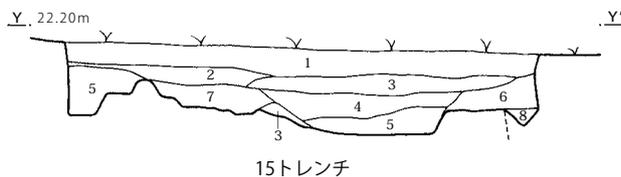
13・14トレンチ U-U'、V-V'、W-W'、X-X'

- 1 攪乱ゴミ
- 2 混ゴミ暗褐色土（現表土）
- 3 混ローム粒橙色焼土粒暗褐色土
- 4 混ロームブロック褐色土（粘床）
- 5 混ロームブロック暗褐色土
- 6 混ローム粒褐色土
- 7 混ローム粒暗褐色土
- 8 混ローム粒橙色焼土粒褐色土
- 9 混灰白色粘土粒褐色土
- 10 砂質灰白色粘土
- 11 混砂質灰白色粘土褐色土
- 12 砂質灰白色粘土（カマド?）

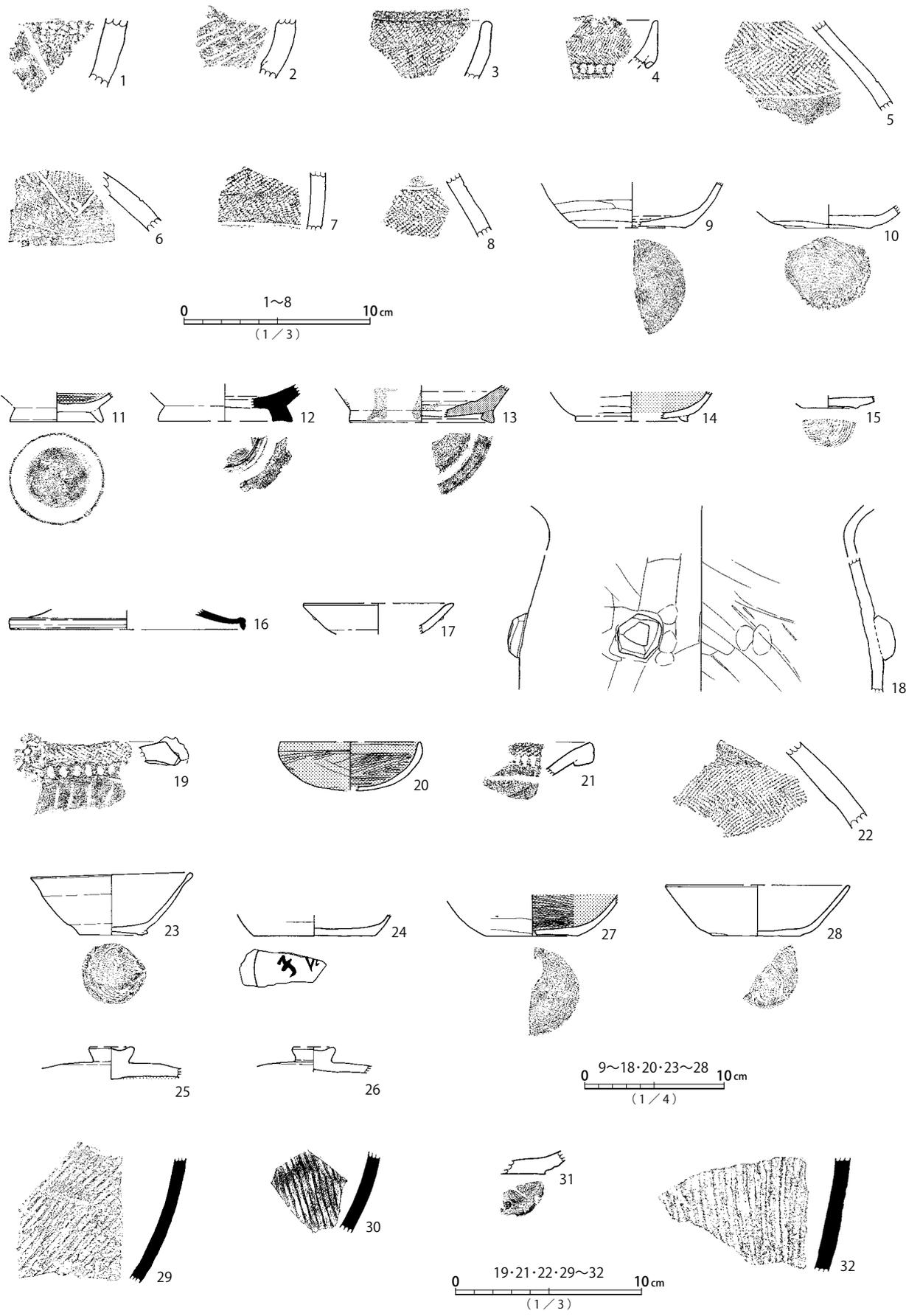


15・16トレンチ Y-Y'、Z-Z'

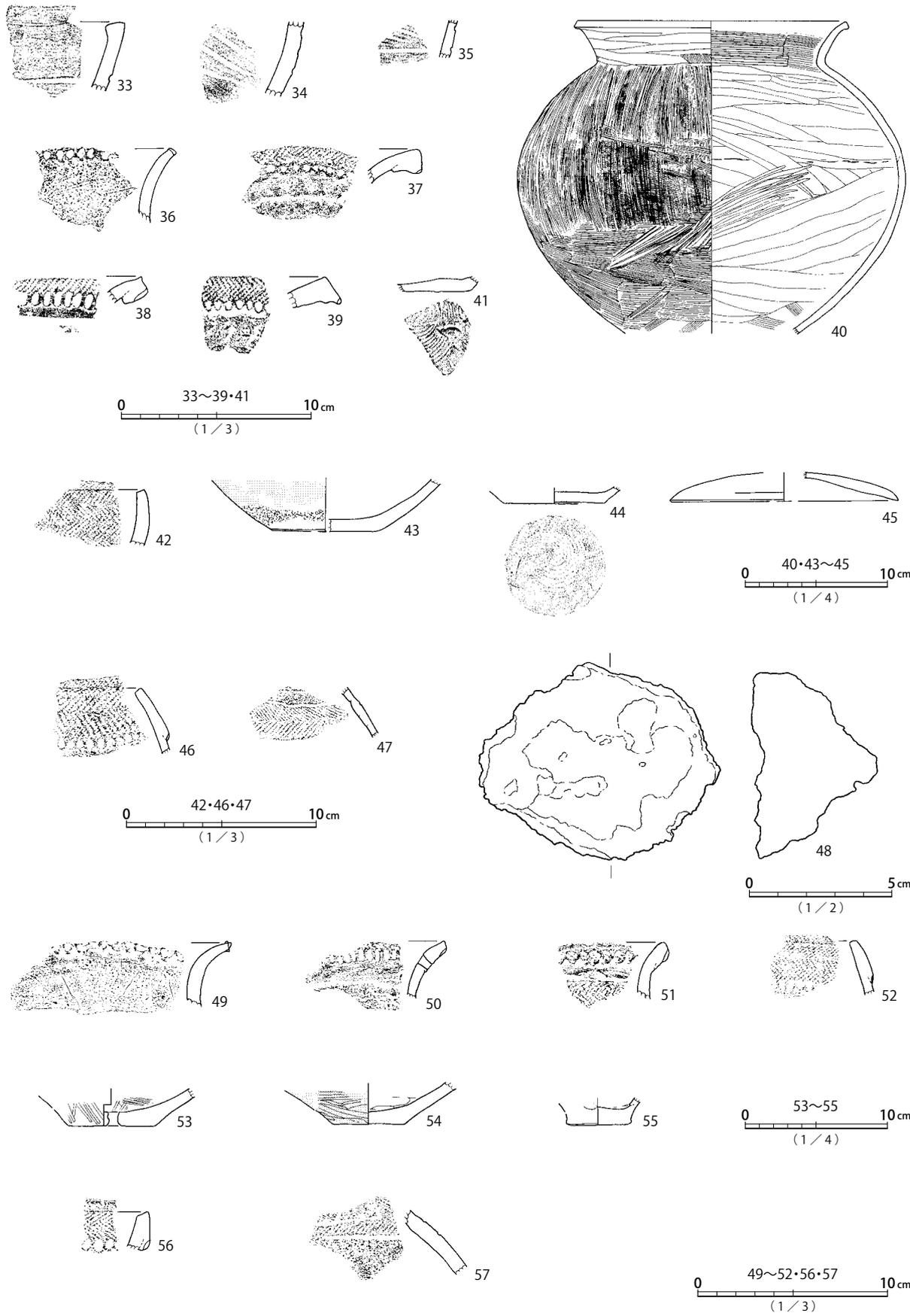
- 1 褐色土（現表土）
- 2 混ローム粒小ロームブロック褐色土
- 3 混ローム粒灰褐色土
- 4 混ローム粒橙色焼土粒黒色土
- 5 混ロームブロック灰褐色土
- 6 混ローム橙色焼土粒暗褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 黒色土
- 9 黄褐色ソフトローム
- 10 黒褐色土
- 11 暗褐色土（攪乱）
- 12 混灰白色粘土ローム粒褐色土
- 13 暗褐色土（ローム漸移層）



第17図 市原城跡(門前地区第4地点) 断面図(2)



第18図 市原城跡(門前地区第4地点) 出土遺物 実測図(1)



第19図 市原城跡(門前地区第4地点) 出土遺物 実測図(2)

## 5 能満分区遺跡群（上小貝塚地区第4地点）

**遺跡の位置** 遺跡は市原台地中央部、新田川と神崎川の開析谷に挟まれた、標高 42m 前後の台地上中央部に位置し、隣接する市道より 1.5m 程高い地点に存在する（第 20 図①）。近隣では、北方向約 400m に能満分区遺跡群（忍澤 1989）第 1 地点②と、能満上小貝塚遺跡（忍澤 1995）の第 3 地点③がある。また当遺跡に隣接する市道建設に伴う調査が行われており、これを能満分区遺跡群（半田 1990）第 2 地点④として命名し、調査順に地点名を付すと、今回調査区は、第 4 地点となる。当遺跡群南端の能満分区貝塚⑤は、字貝殻塚に位置している。

**調査概要** 調査は個人住宅の建設に伴う確認調査であり、調査区に対し 5 本のトレンチを設定して調査を進めた。すべてのトレンチの遺構確認面は、現表土から 30 cm 程度で極めて浅く、耕作によるソフトローム上面の攪乱も観察されている。

確認調査の結果、3～5 トレンチからは、遺構等の検出がなかった。1、2 トレンチからは、土坑やそれに伴う遺物が検出され、市道から進入のための掘削が不可欠であるため、保存が困難な遺構所在範囲の 86.6 m<sup>2</sup>について、本調査を実施した。

**遺構と遺物** 検出遺構は大小の土坑群である。2 号遺構は、底面が平坦で、深さも 1m 近くあり、小竪穴遺構と考えられる。検出遺物はわずかながら、全て加曽利 E 式最終段階に限定される、縄文時代中期末葉の遺構である。その他の遺構は、耕作等によって遺構上半部以上が削平され、定型的な遺構はない。

本遺跡の遺物は、第 23 図に示した。表面採集された 41 の土師器高坏脚部のほかは、すべて縄文時代に属する。確認調査で検出された縄文土器の 1～4 は、中期末から後期初頭の時期であり、本調査で出土した土器とほぼ同時期である。1 号遺構からは 5、2 号遺構からは 6～14、3 号遺構の 15～23 までは縄文時代中期末、24～26 は縄文後期中葉と考えられるので、包含層と遺構遺物が混入している。4 号遺構の 27～32、5 号遺構の 33、7 号遺構の 34、9 号遺構 C の 35、36、11 号遺構の 37～40 は概ね縄文中期末から後期初頭の土器である。石器は、9 号遺構 A から出土した黒曜石製の小型石鏃がある。

本調査範囲が狭小であり、検出遺構も散漫である。しかし、過去の調査事例と今回の調査を対比すると、遺構・遺物の時期と時代は、ほぼ合致しており、字地名として『貝塚』が付される遺跡の調査事例が追加されたことになる。

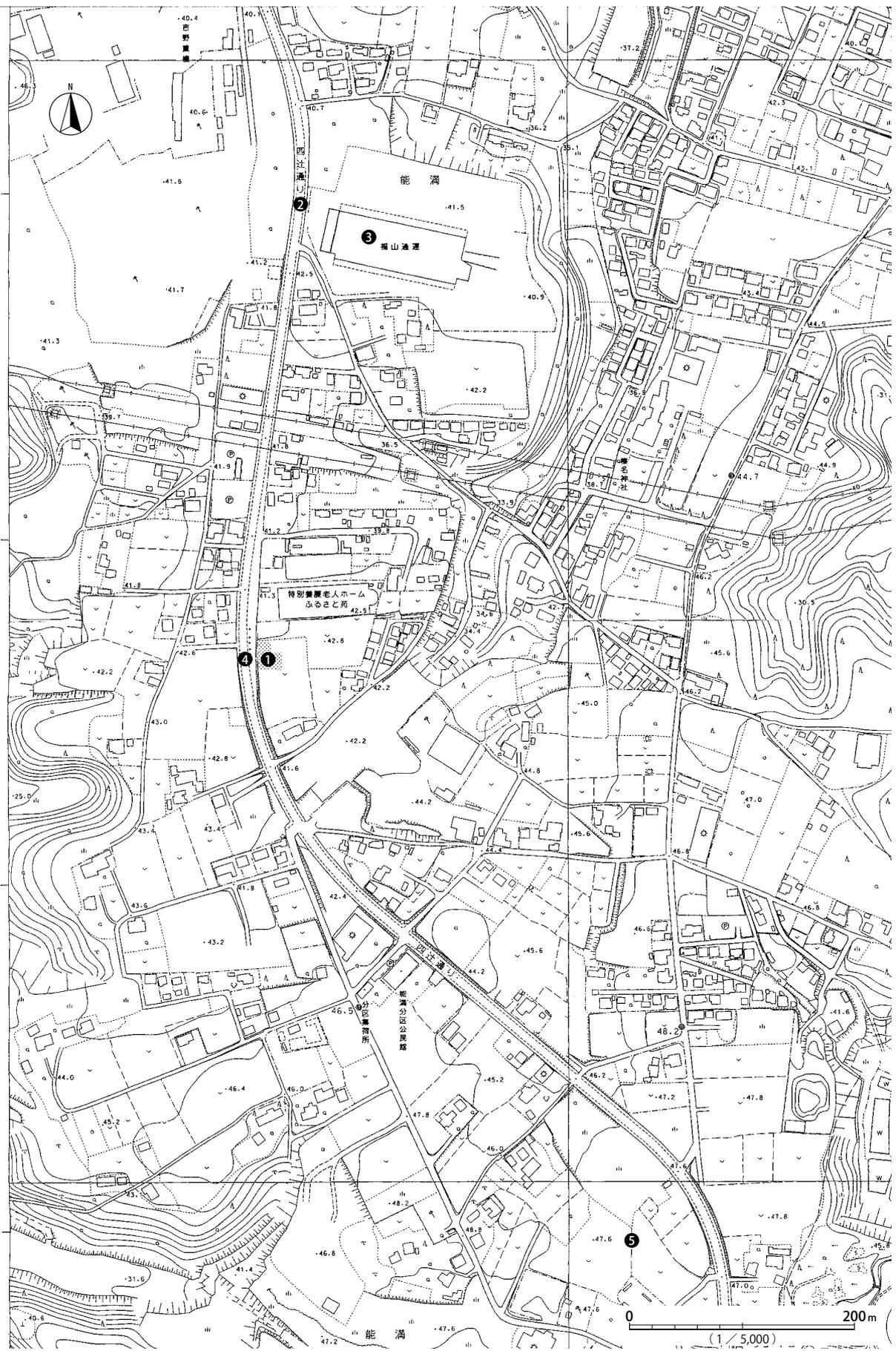
### 引用参考文献

忍澤成視 1989 「能満分区遺跡群」『市原市文化財センター年報』平成元年度

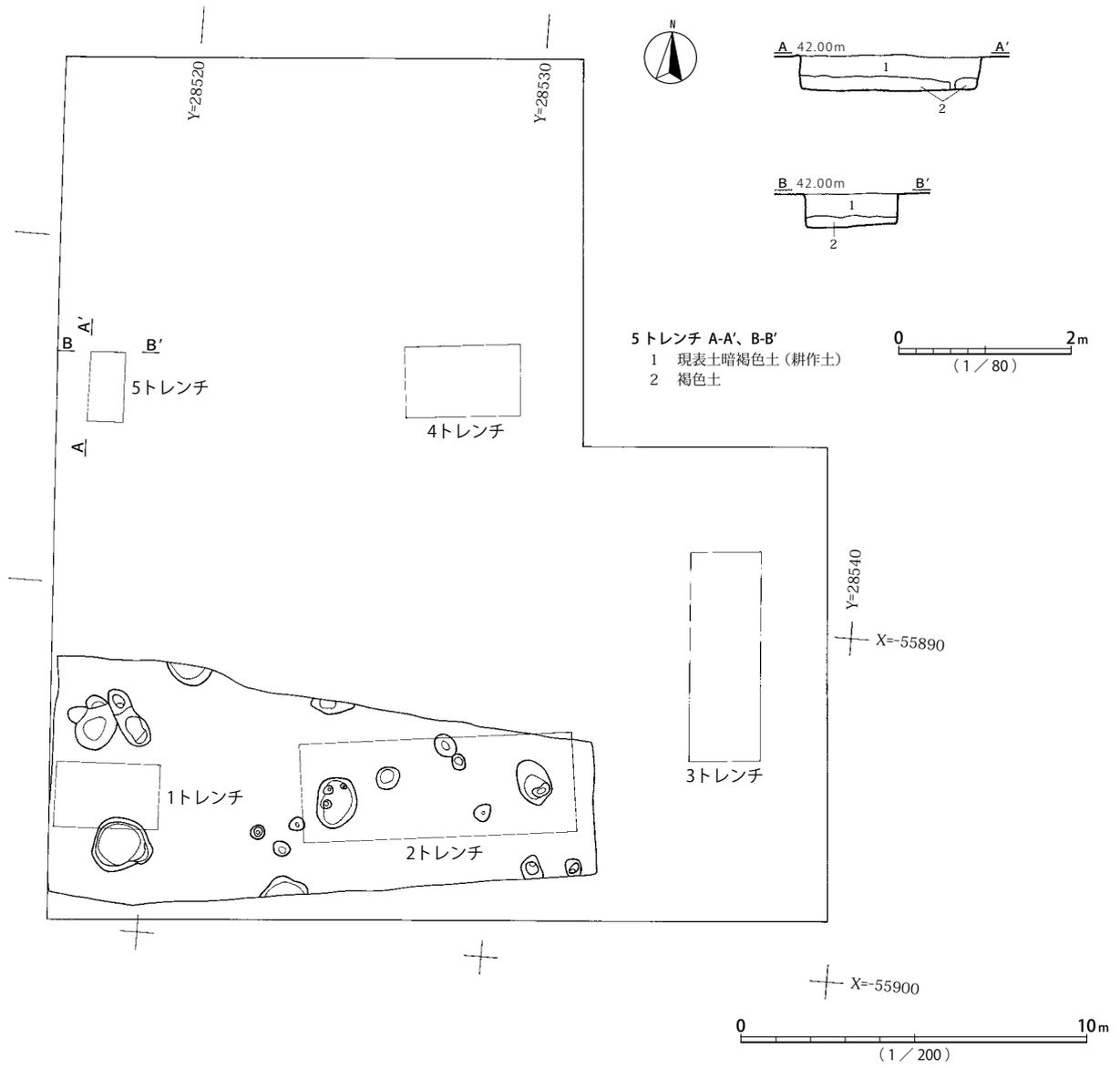
半田堅三 1990 「能満分区遺跡群」『市原市文化財センター年報』平成 2 年度

忍澤成視 1995 『市原市能満上小貝塚』（財）市原市文化財センター

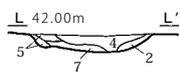
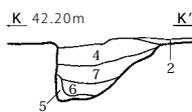
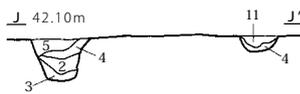
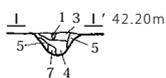
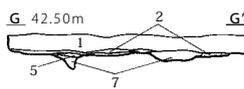
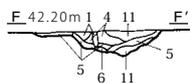
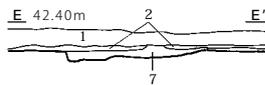
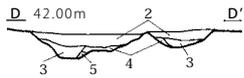
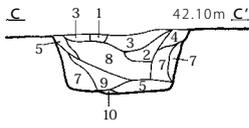
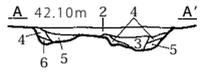
市原市教育委員会 2014 「能満分区遺跡群」（貝殻塚地区）『平成 25 年度市原市内遺跡調査報告』



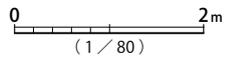
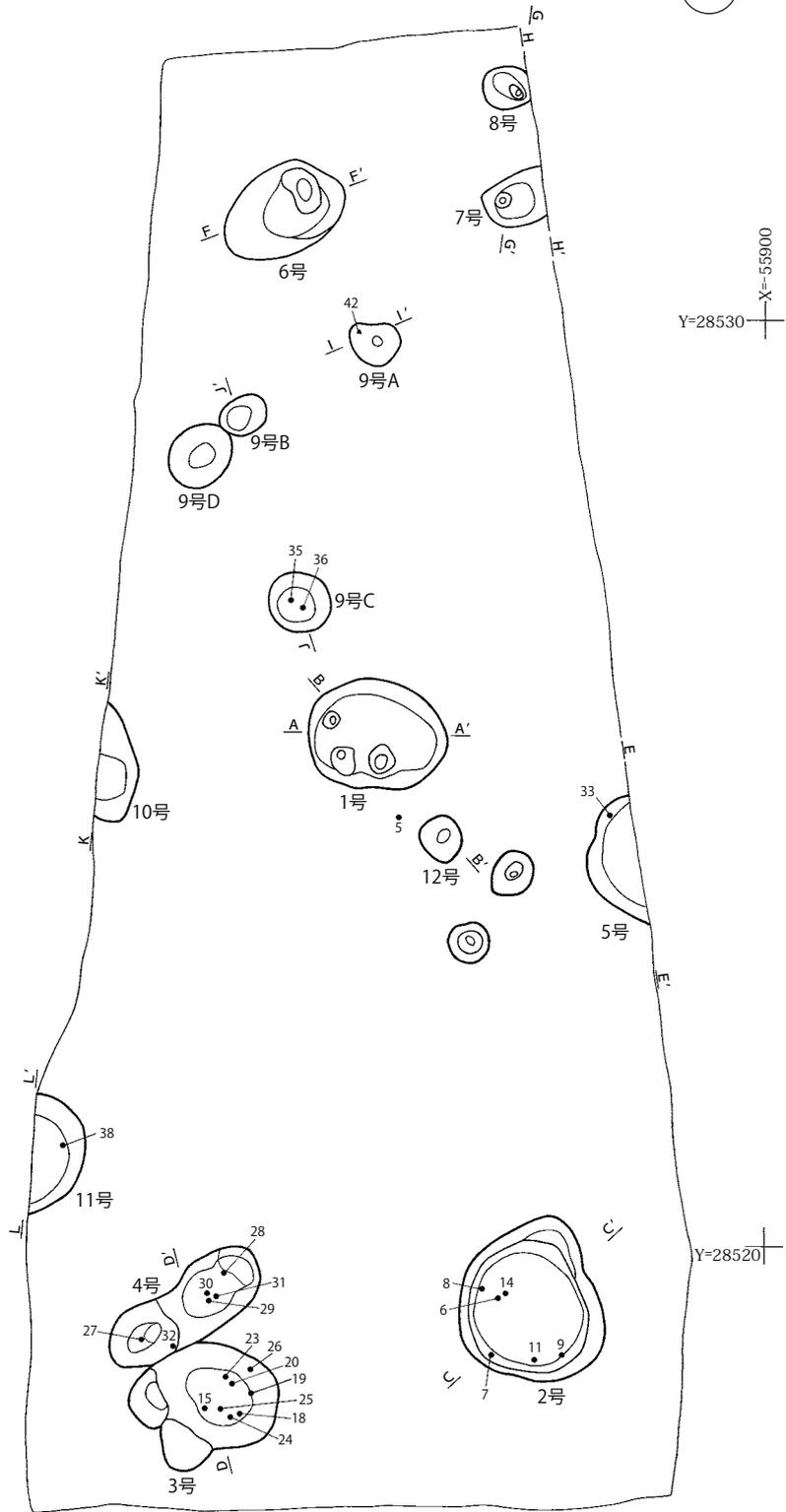
第20図 能満分区遺跡群(上小貝塚地区第4地点) 周辺地形図



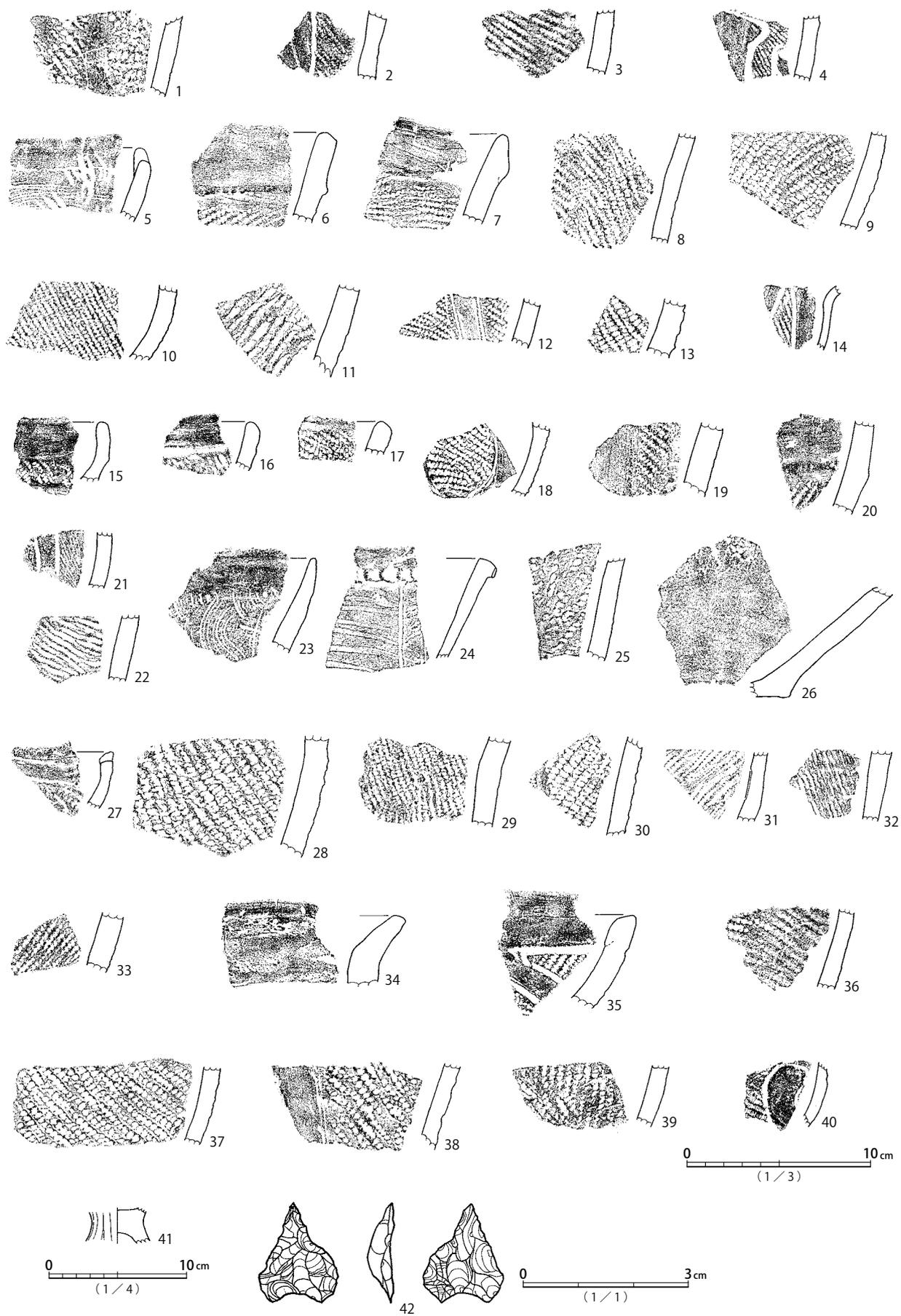
第21図 能満分区遺跡群(上小貝塚地区第4地点)トレンチ配置図・断面図(1)



- 1~11号遺構 A-A' ~ L-L'
- 1 現表土暗灰褐色土 (耕作土)
  - 2 混ローム粒暗褐色土
  - 3 混ローム粒黒褐色土
  - 4 暗褐色土
  - 5 褐色土
  - 6 褐色ロームブロック
  - 7 混ローム褐色土
  - 8 混ロームロームブロック黒褐色土
  - 9 黒色土
  - 10 混焼土粒暗褐色土
  - 11 黒褐色土



第22図 能満分区遺跡群(上小貝塚地区第4地点) 平面図・断面図(2)



第23图 能满分区遗迹群(上小貝塚地区第4地点) 出土遺物 実測図

## 6 諏訪台古墳群・諏訪台遺跡（第2地点）

**調査概要** 遺跡は、養老川右岸の沖積地に面した標高 25m 前後の台地上、村上地区の上下諏訪神社の境内地脇に位置する（第 24 図①）。周辺は国分寺台地区の土地区画整理により、昭和 63 年まで大規模な発掘調査が継続的に実施されてきた。隣接地では天神台遺跡の調査が実施され、調査グリッドでは、GG 区、GH 区に接していると考えられる（忍澤 2013、第 5 図）。その成果から、縄文時代の遺構は当調査区内では希薄で、炉穴分布範囲の北端部に位置すると考えられる（忍澤 2013、第 6 図）。南方約 20m においては、天神台遺跡上層として調査が行われた諏訪台古墳群があり、現在でも諏訪神社境内に遺跡は残存している（北見 2015）。

**調査概要** 調査は個人住宅建設に伴って実施され、現地の調査前は畑地として耕作されており、一部はローム下 1 m 以上攪乱されている。調査地は諏訪台 10 号墳（第 24 図②）の東隣に当たり、隣接には SS73、SS74、SS75 の弥生時代中期の方形周溝墓群内に位置する（北見 2015、Fig11）。

**遺構と遺物** 1 トレンチからは、方形周溝墓の周溝の一部を 2 条と炉穴 1 基が検出された。2 トレンチでは、縄文時代土坑を 1 基検出している。3～5 トレンチは、諏訪台 10 号墳の周溝範囲を検出する目的で設定したが、攪乱等から明確な周溝プランは検出できなかった。6、7 トレンチからは、遺構は検出されず、遺物も少ない。もともと遺構遺物が希薄な地点と考えられる。

現表土下 40～60cm でソフトローム上面が検出され、遺構確認面となっている。当地の標準土層は、黄褐色ソフトロームの上に褐色のローム漸移層であり、縄文早期の明確な包含層は観察されず、黒褐色土または黒色の土層から縄文時代早期時期の土器が出土する（第 26 図）。

本遺跡出土遺物を第 27 図にまとめた。遺構は調査区全体において、散漫であり、それらは近隣調査事例と合致する。2、7 トレンチは遺物が少なく、その他のトレンチから早期後半条痕文系土器群の茅山上層式土器が、ローム漸移層以上の黒色土層から出土している。

1～19 の土器と、20 の磨石が、1 トレンチから出土している。2 トレンチでの図示可能遺物はなく、3 トレンチから 21、22、4 トレンチから 23～30 が出土している。30 は早期中葉の沈線文系土器であり、混入と考えられる。5 トレンチからは 31～33、6 トレンチから 34 が出土している。条痕文系土器すべて胎土に繊維を含み、焼成は良好である。明確に遺構に伴う遺物は検出されなかったが、覆土から土坑はすべて縄文時代早期と想定され、遺構外出土遺物も早期の包含層出土と考えられる。

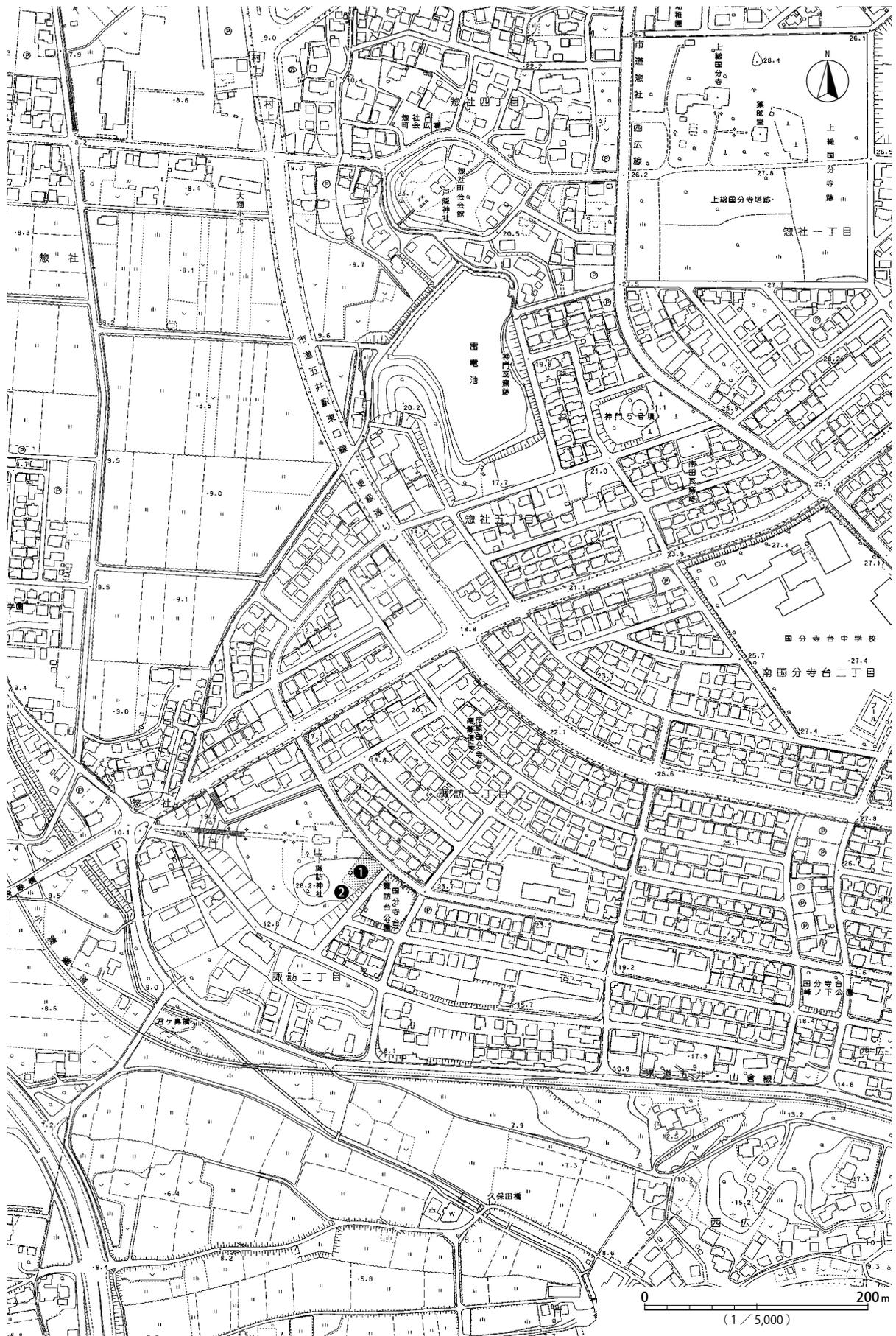
弥生時代の方形周溝墓については、明確な遺物が出土していないが、隣接の調査成果で方形周溝墓群が連続していることは確実であり、それらは諏訪台 I 期の墓域である（北見 2015）。

本遺跡の隣接地には、大規模な縄文時代早期の集落跡と、弥生時代の遺構の墓域が存在していたが、調査区は、その狭間のような遺構密度の低い位置に立地していることが判明した。また、調査区は諏訪神社境内と隣接しており、諏訪台 10 号の墳丘部分はすべて境内地に所在している。現在周辺は市街地となっており、境内地が一段高く残された状態の環境となっている。

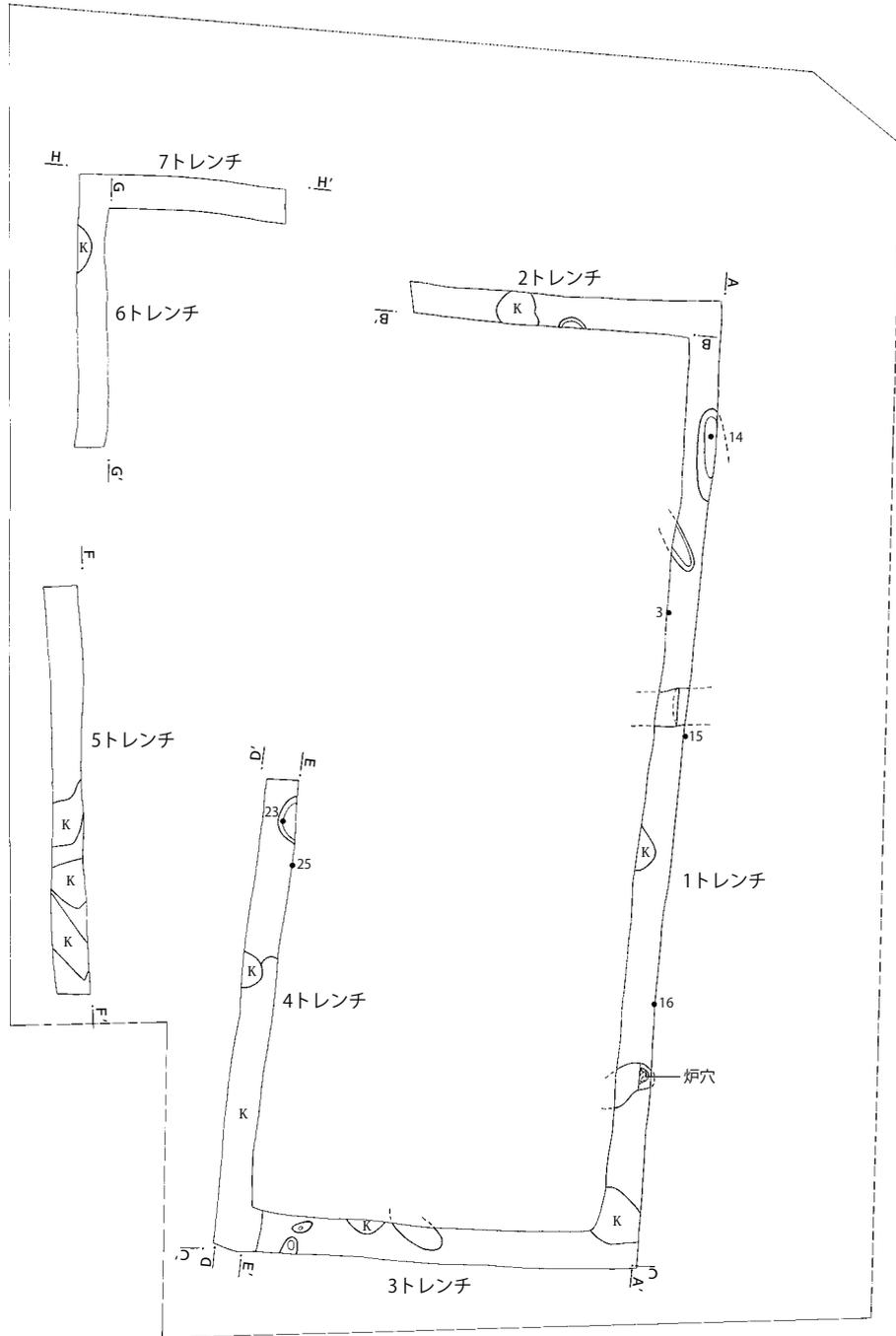
### 引用参考文献

忍澤成視 2013 『市原市天神台遺跡 I』市原市教育委員会 上総国分寺台遺跡調査報告 XXIII

北見一弘 2015 『市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡 II』市原市教育委員会 上総国分寺台遺跡調査報告 XXVI



第24図 諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点) 周辺地形図

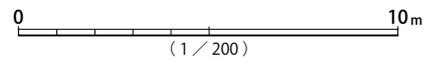


1～3トレンチ A-A'、B-B'、C-C'

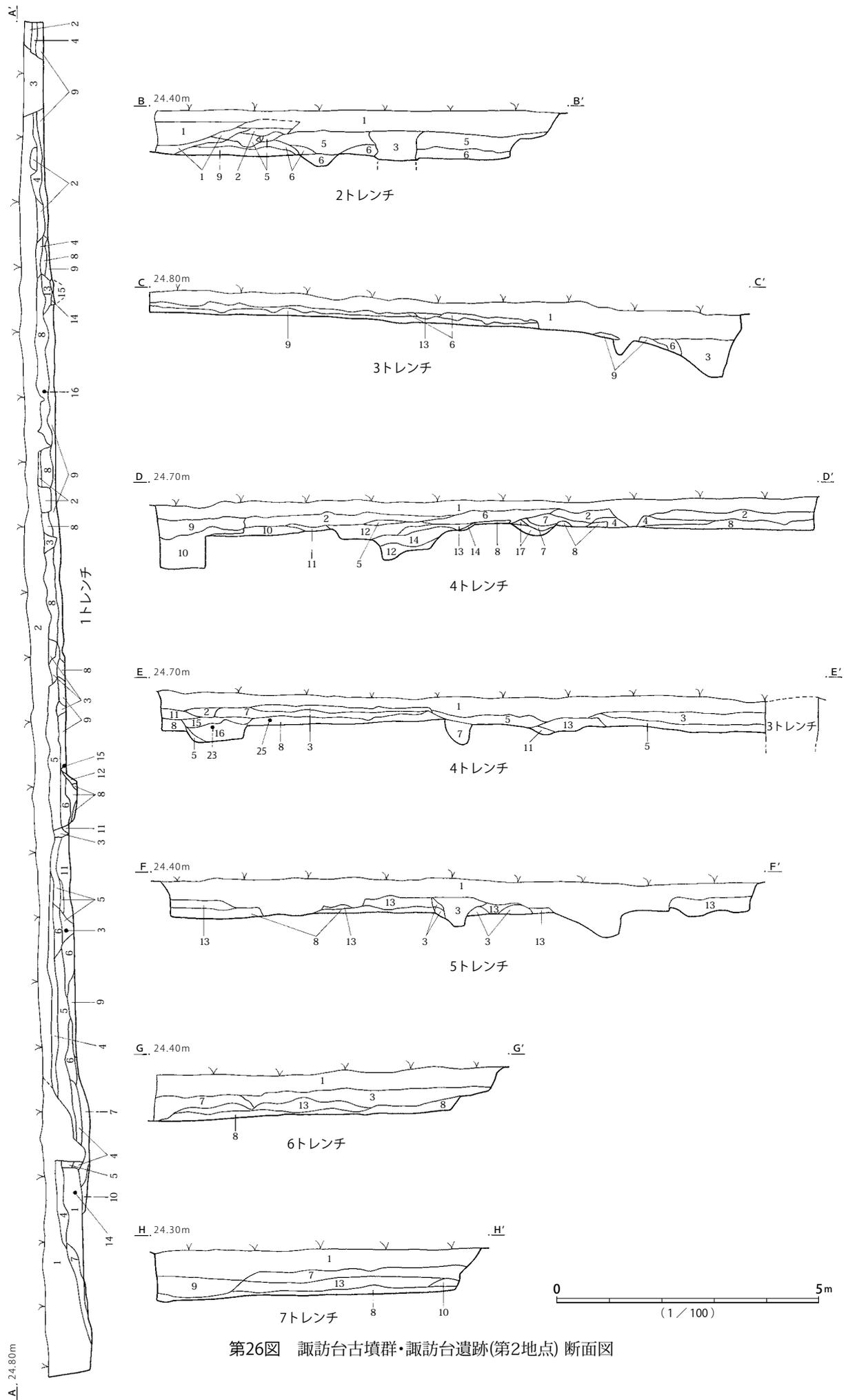
- 1 ロームと黒褐色土（現表土と造成埋土）
- 2 暗灰褐色土
- 3 混ローム黒褐色土（攪乱）
- 4 黒灰色土
- 5 黒色土
- 6 黒褐色土
- 7 混ローム粒黒褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土（ローム漸移層）
- 10 黄褐色ソフトローム層
- 11 混ローム褐色土
- 12 混ローム暗褐色土
- 13 褐色土
- 14 混橙色焼土暗褐色土
- 15 混橙色焼土

4～7トレンチ D-D'、E-E'、F-F'、G-G'、H-H'

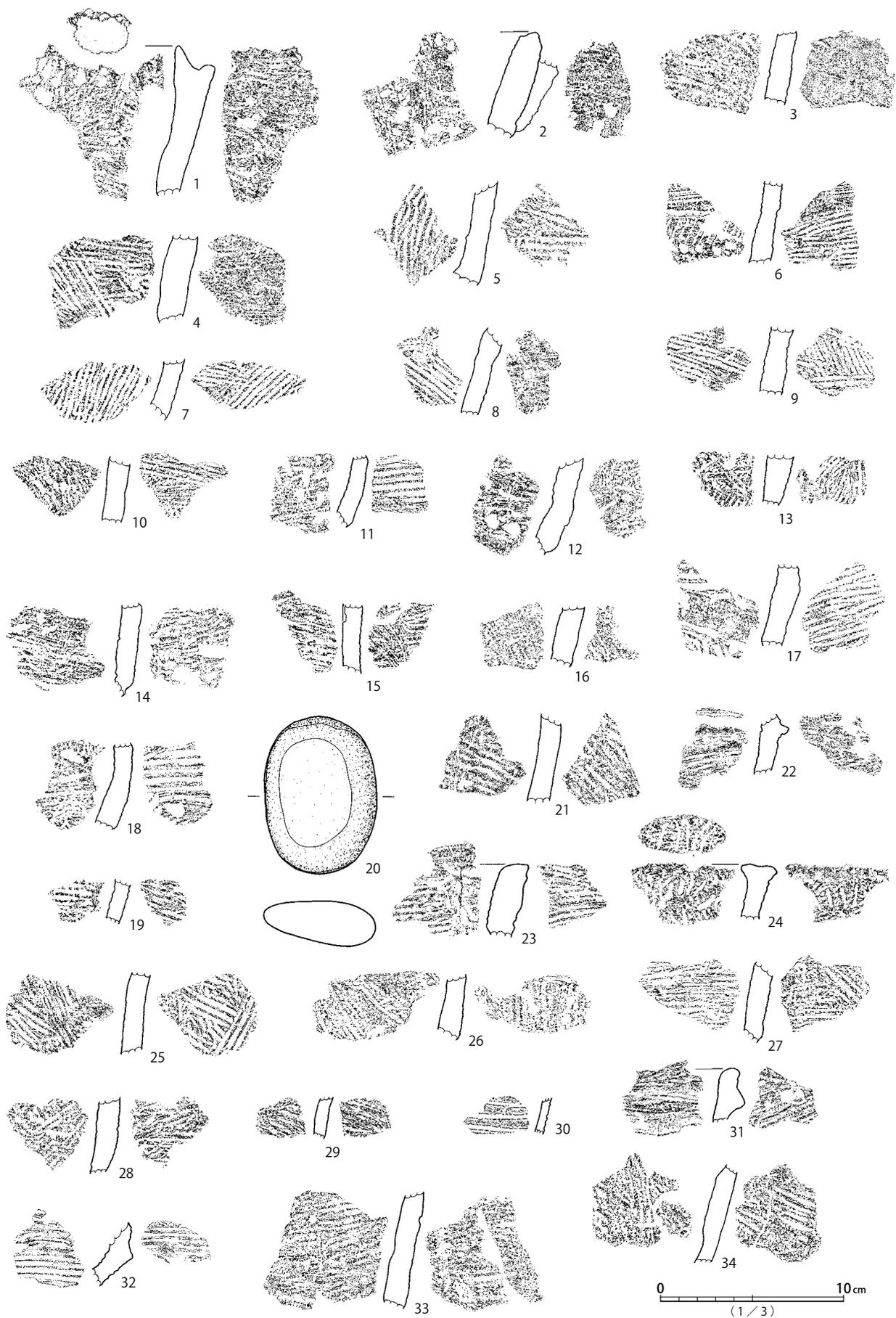
- 1 暗灰褐色土（現表土）
- 2 混ローム粒灰褐色土
- 3 黒灰色土
- 4 褐色土
- 5 混ロームブロック黒褐色土
- 6 混ローム灰褐色土
- 7 黒色土
- 8 暗褐色土（ローム漸移層）
- 9 混ローム粒黒褐色土
- 10 混ローム粒暗褐色土
- 11 混ローム粒褐色土
- 12 褐色ロームブロック
- 13 黒褐色土
- 14 混ローム褐色土
- 15 混斑点褐色土暗褐色土
- 16 混斑点褐色土黒褐色土
- 17 混ローム黒褐色土



第25図 諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点) トレンチ配置図



第26図 諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点) 断面図



第27図 諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点) 出土遺物 実測図

## 7 椎津向原遺跡（第4地点）

**遺跡の位置** 現地は姉崎台地北西辺部、東京湾東岸姉崎海岸線から700m南に入った支谷の谷頭北側の、標高38m前後の台地上に位置している（3 椎津城跡第6図⑩）。市指定史跡椎津城跡が占地する台地の南西辺に幅約150mの支谷があり、その西側台地が椎津向原遺跡となっている。その支谷の南西側谷頭に近い地区に椎津向原遺跡第1～3地点（3 椎津城跡第6図⑧）が立地している（市原市教育委員会2009、2014、2016）。近隣では北東方向約800mに、椎津城跡主郭部がある。椎津城下には、海岸線と海蝕崖の間に房総往還が通っている。久留里西往還推定路（3 椎津城跡第6図⑪）は、房総往還沿いの瑞安寺前から分岐し、行伝寺の脇を抜けて台地を切り通して椎津城跡を迂回して、椎津新田方面に向かうとされている（3 椎津城跡第6図網点部分）。遺跡範囲は都市計画道路椎津八幡線が南限となっている。その路線上の椎津堰谷遺跡には、中世以前と推測される道路遺構が、本調査で検出されている（小橋2001）。

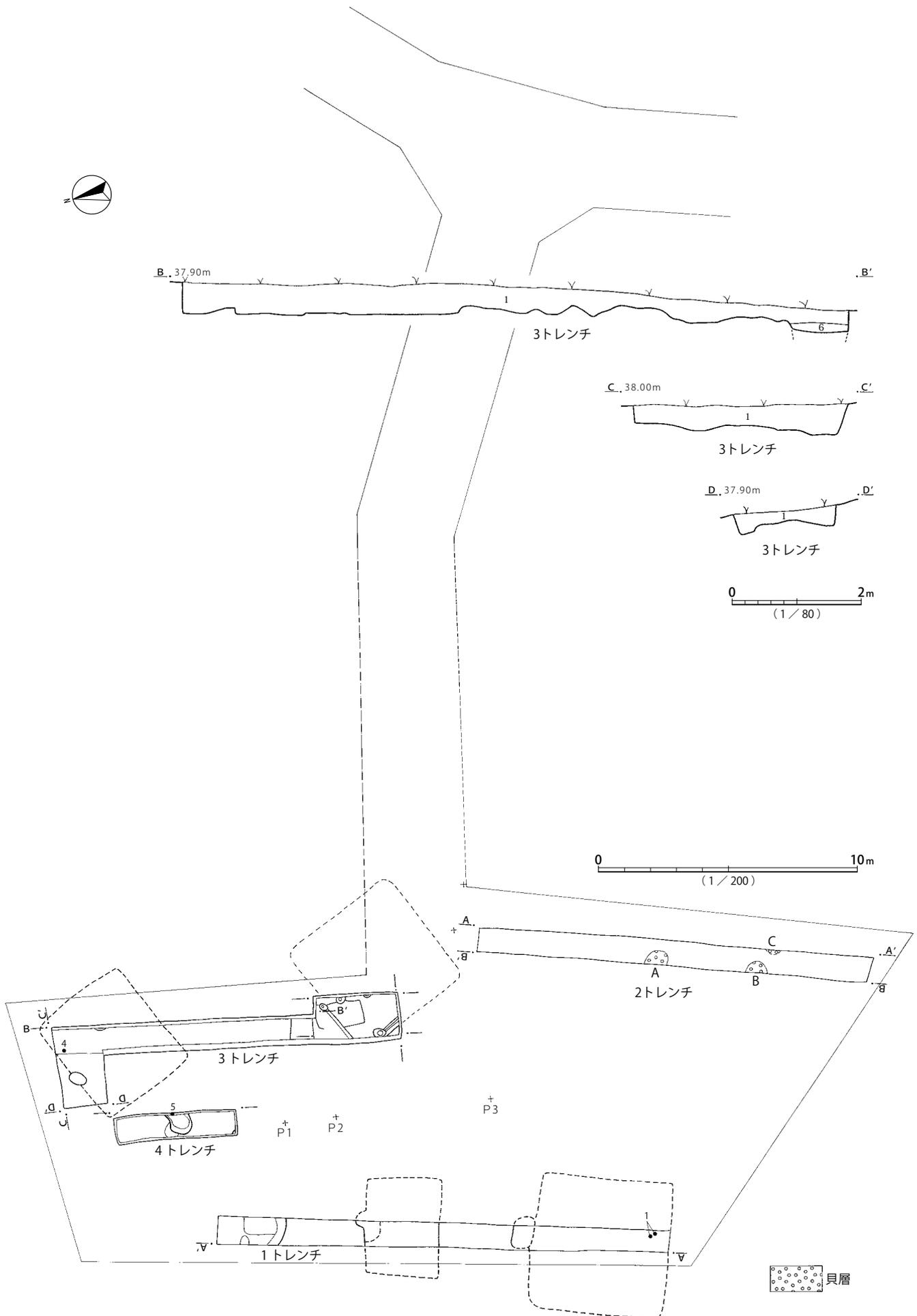
**調査概要** 椎津向原第1、2、3地点では古墳時代後期の竪穴住居跡が検出され、第3地点では奈良・平安時代の竪穴住居跡も検出されている。椎津向原遺跡第3地点から南へ約300mの今回調査の第4地点では、奈良・平安時代の4軒の竪穴住居跡が検出されている（第28図）。広範囲の椎津向原遺跡内での、同時期集落の存在が明らかとなった。現地の地表からソフトローム層までの40～60cmの層序は、土層断面の観察によれば、耕作攪乱表土層であり、包含層等は検出できない。

**遺構と遺物** 調査区は支谷方向に傾斜しており、1、2トレンチの南端は、黒色土壌層が厚く堆積しており、ロームの地山が急激に支谷に落ち込んでいる。1トレンチでは方形プランの北側に灰白色粘土層が検出されており、竪穴住居跡と推定される。出土遺物には第30図1の甕形土器と2の坏形土器片があり、3は小型の土錘であり奈良・平安時代と推定される。2トレンチからの図示遺物はないが、黒色～黒褐色土層から、貝ブロックが3か所に検出された。3トレンチの北端からは竪穴住居跡が確認され、浄化槽に当たる部分の本調査を行ったところ、4の土師器甕形土器底部を出土した。3トレンチ北端部分からは、竪穴住居床面の一部を検出しているが、攪乱のため詳細は不明である。4トレンチからは土坑が1基検出され、覆土中から5の古墳時代後期の須恵器坏蓋が出土した。

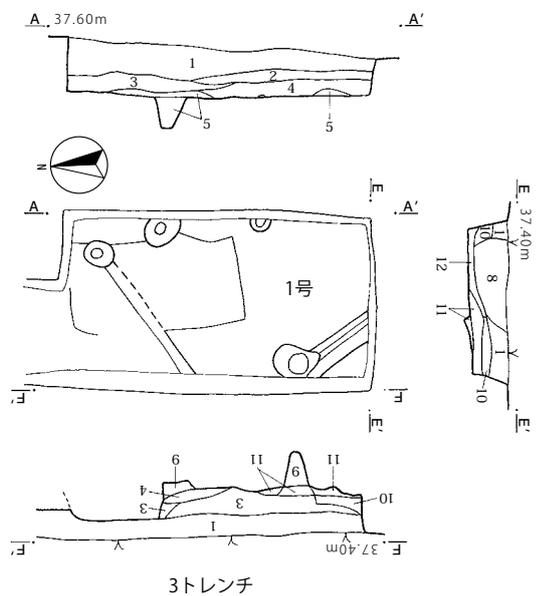
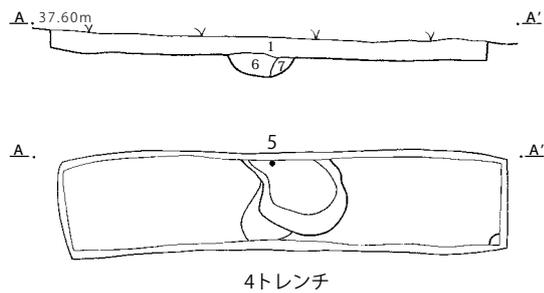
本遺跡からは、字名の小木戸（コキド）から想定される中世の遺構・遺物は出土していない。2トレンチから検出された貝ブロックは、古代集落遺跡の断片的な名残と考えられ、椎津尾崎遺跡周辺でも類似の古代地点貝塚と考えられる遺構がある。椎津向原遺跡の隣接遺跡、袖ヶ浦市（望陀郡）との境界付近の、椎津堰谷遺跡等は、遺構密度は低くなるものの、古代時期まで集落が継続して存在している。それらの集落群が断続的な遺跡として、椎津地域の中世につながっていくことになる。

### 引用参考文献

- 小橋健司 2001 「椎津堰谷遺跡（第2地点・第2地点）『市原市文化財センター年報』平成10年度
- 市原市教育委員会 2009 「椎津向原遺跡」『平成20年度 市原市内遺跡発掘調査報告』
- 市原市教育委員会 2014 「椎津向原遺跡第2地点」『平成25年度 市原市内遺跡発掘調査報告』
- 市原市教育委員会 2016 「椎津向原遺跡第3地点」『平成27年度 市原市内遺跡発掘調査報告』



第28図 椎津向原遺跡(第4地点)トレンチ配置図・断面図(1)

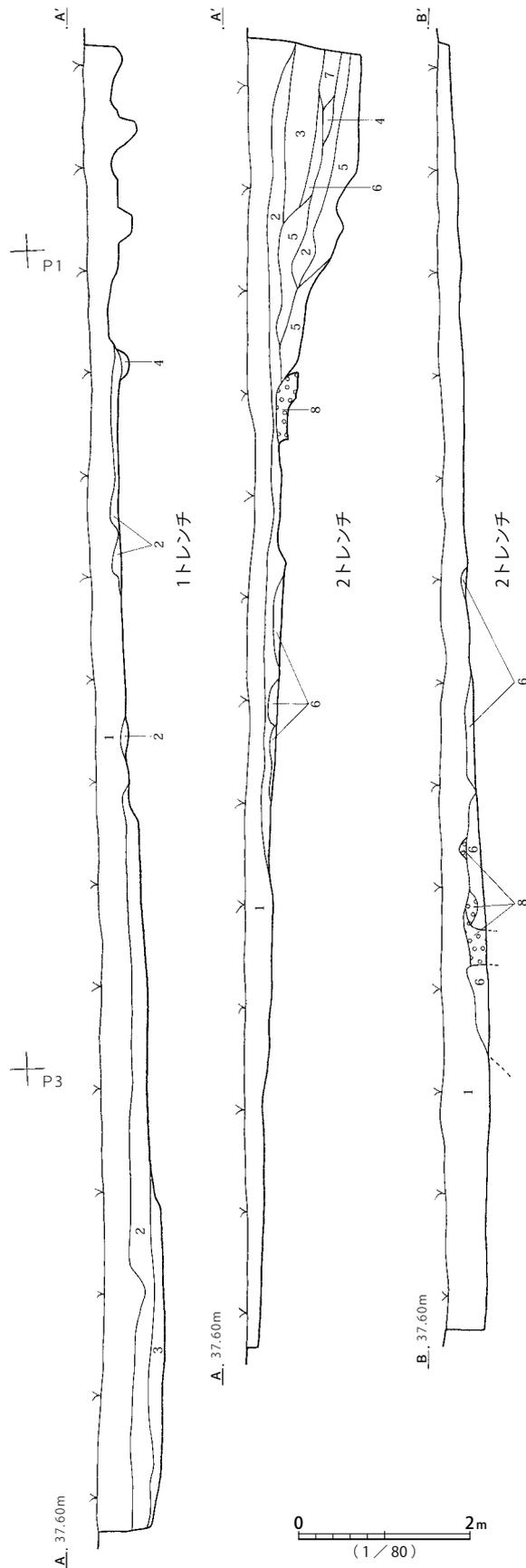


1トレンチ A-A'、2トレンチ A-A'、B-B'

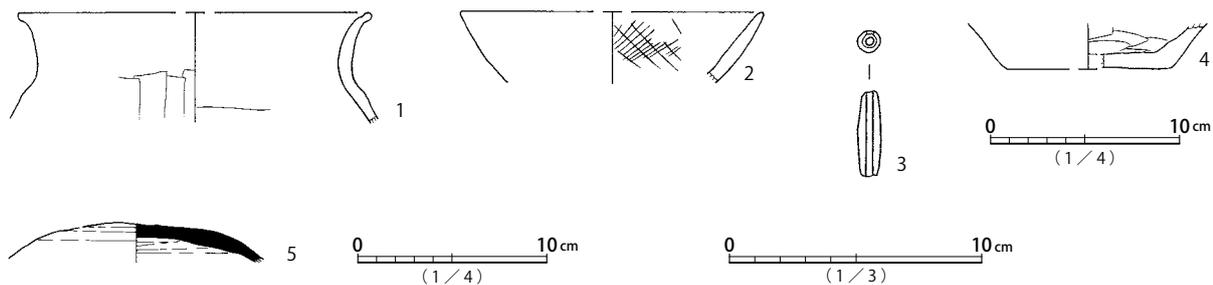
- 1 表土灰褐色土 (客土)
- 2 混ローム粒暗褐色土
- 3 混橙色粒、ローム粒暗褐色土
- 4 褐色土
- 5 混ロームブロック暗褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 混ロームブロック褐色土
- 8 混貝黒褐色土

3トレンチ・1号遺構 A-A'、B-B'、C-C'、D-D'、E-E'、F-F'、4トレンチ A-A'

- 1 表土灰褐色土
- 2 混ローム暗褐色土 (住居覆土)
- 3 混ローム褐色土
- 4 混ローム暗褐色土
- 5 混白色粘土、ローム褐色土
- 6 黒褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土 (攪乱)
- 9 混ロームブロック、ローム粒褐色土
- 10 混白色粘土、橙色粒暗褐色土
- 11 褐色土
- 12 混ロームブロック褐色土



第29図 椎津向原遺跡(第4地点)平面図・断面図(2)



第30図 椎津向原遺跡(第4地点) 出土遺物 実測図

第1表 貝類出土量集計

遺構No.	水洗前重量 (g)	水洗後重量 (g)	集計貝重量 (g)	腹足綱			二枚貝綱												合計 (NISP)				
				イボキサゴ	ウミニナ	アラムシロ	サルボウ		ナミマガシウ		シオフキガイ		マテガイ		カガミガイ		アサリ			ハマグリ		オキシジミ	
							L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		L	R	L	R
2トレンチ 貝ブロックA	8,250	3,138	2,742						254	263						35	31	35	30	1	3	336	
										78.3%						10.4%		10.4%			0.9%	100.0%	
2トレンチ 貝ブロックB	2,000	571	468	165	1	2	5		27	31		1	1	1	8	3	10	8	1	1	223		
				74.0%	0.4%		2.2%		13.9%		0.4%	0.4%		3.6%		4.5%		0.4%			100.0%		
2トレンチ 貝ブロックC	8,300	1,877	1,085	781	9	17		3	32	41	1		3	1	8	11	10	11			877		
				89.1%	1.0%	1.9%		0.3%	4.7%	0.1%	0.3%		1.3%		1.3%		1.3%				100.0%		

第2表 主要二枚貝類殻長計測値集計

遺構No.	2トレンチ 貝ブロックA					
	シオフキガイ (L)		アサリ (L)		ハマグリ (L)	
	N	%	N	%	N	%
-30.0						
-32.5	5	3.0	1	3.6		
-35.0	21	12.8	3	10.7	1	4
-37.5	30	18.3	7	25.0		
-40.0	29	17.7	3	10.7		
-42.5	26	15.9	6	21.4	2	8.0
-45.0	20	12.2	5	17.9	3	12.0
-47.5	18	11.0	2	7.1	1	4.0
-50.0	12	7.3	1	3.6	3	12.0
-52.5	3	1.8			2	8.0
-55.0					4	16.0
-57.5					1	4.0
-60.0					2	8.0
-62.5					2	8.0
-65.0					3	12.0
-67.5						
-70.0					1	4
-72.5						
合計	164	100.0	28	100.0	25	100.0
	平均 (mm)	52.80	平均 (mm)	45.61	平均 (mm)	52.80
	標準偏差	8.52	標準偏差	4.00	標準偏差	8.52

## 8 上境町遺跡（第2地点）

**遺跡の位置** 遺跡は養老川左岸の河口流域、沖積地の標高4～5mの微高地上に位置する（第34図①）。また、野毛から青柳にかけての地区は、養老川沖積谷が東西方向に存在し、沖積層の基底面が、現表土から30m～40mの位置に埋没している（徳橋・遠藤1984）。これらの地域では、自然堤防上に古墳時代以降からの遺跡が見られ、その一例が当遺跡である（森脇1997）。近隣では西方約300mに位置する微高地上の野毛上境町遺跡第1地点（第34図②）について、市道建設に伴う発掘調査が実施され、杭列2条と、近世水田跡等が検出されている（小川2001）。

**調査概要** 個人住宅の建設に伴う確認・本調査を実施した（第31・32図）。トレンチは母屋部分を中心に3～8のトレンチを配置し、敷地の西端に1トレンチ、浄化槽設置部分に2トレンチを設定した。2トレンチからは、土坑に伴う遺物が検出された。1、3、6トレンチからは明確な遺構が検出されず、土師器の小片を伴う黒灰色土または黒色土の10cm前後の包含層を観察した（第31図）。確認調査の結果、保存が困難な範囲に対し、本調査を実施することとなった。対象は、遺構の保存困難な2トレンチの一部、家屋建設のため保存が困難な範囲である（第31右図）。

**遺構と遺物** 2トレンチ部分の本調査は、浄化槽で掘削される1㎡が対象で、土坑全体の規模は不明である。土坑覆土の黒褐色土中に第33図7が出土しており、1トレンチ検出遺物の第33図4～6の甕形土器、高坏形土器と同時期であり、古墳時代中期の所産である。

竪穴住居跡は1号遺構として調査され、一辺約5mの方形を呈している。明確な支柱穴は検出されないが、中心部に地床炉、その北東側に副炉を検出している（第32図）。住居床面は地山である黄灰色砂質粘土層の上面にあり、中央部付近には床硬化面が観察できた。覆土は黒色土を基本とする。遺物は少ないが、全て床面に張り付くように小片が出土しており、第32図1の小型手づくね土器が壁近くで検出されている。住居には3号と4号の土坑が重複しており、土層断面等での新旧関係が判断できないが、土坑が新しいと推測される。

4トレンチからは土坑を検出し、確認調査の出土遺物は第33図8～10であり、いずれも古墳時代中期の甕形土器、高坏形土器、坏形土器である。

7トレンチ検出の土坑は、本調査では4号遺構として調査し、底面からピット状の落ち込みと第32図3の高坏形土器脚部を検出している。1号遺構と4号土坑の南側に、2条の北東から南西方向に溝状遺構があり、時期的には中世以降と推測される。また、当地は近世以降、水田の土地利用もあったと地権者から聞き取っており、あるいは水田に関わる遺構なのかもしれない。姉崎地域の、海岸砂丘上ではない沖積平野からの竪穴住居跡の検出は極めてまれであり、今後資料の追加が予測される。

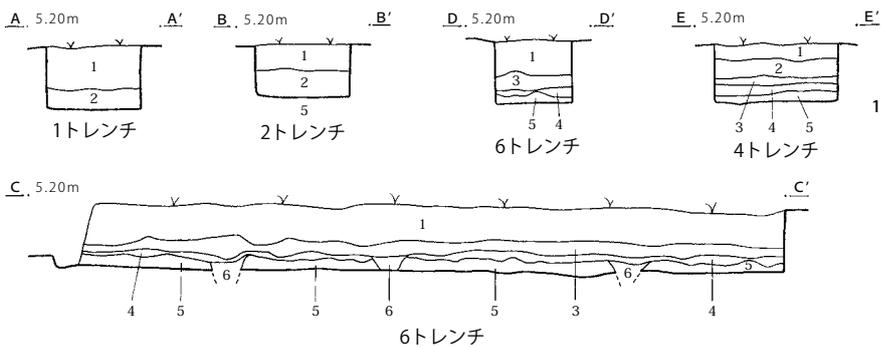
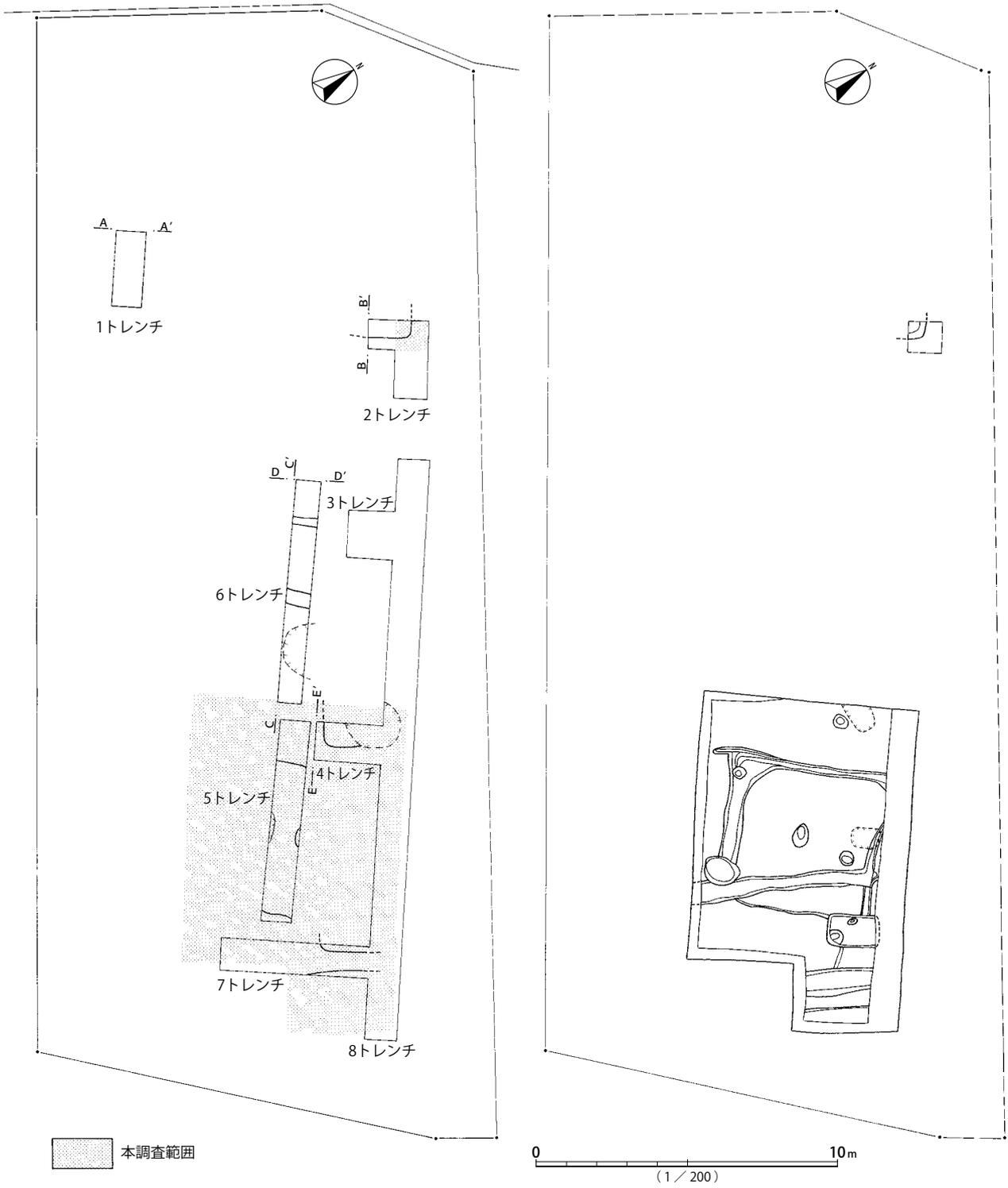
### 引用参考文献

徳橋秀一・遠藤秀典1984「VI.2 沖積層」『姉崎地域の地質』地域地質研究報告 地質調査所

森脇 広1997「第1章第1節」『千葉県自然誌』本編2（財）千葉県史料研究財団 千葉県

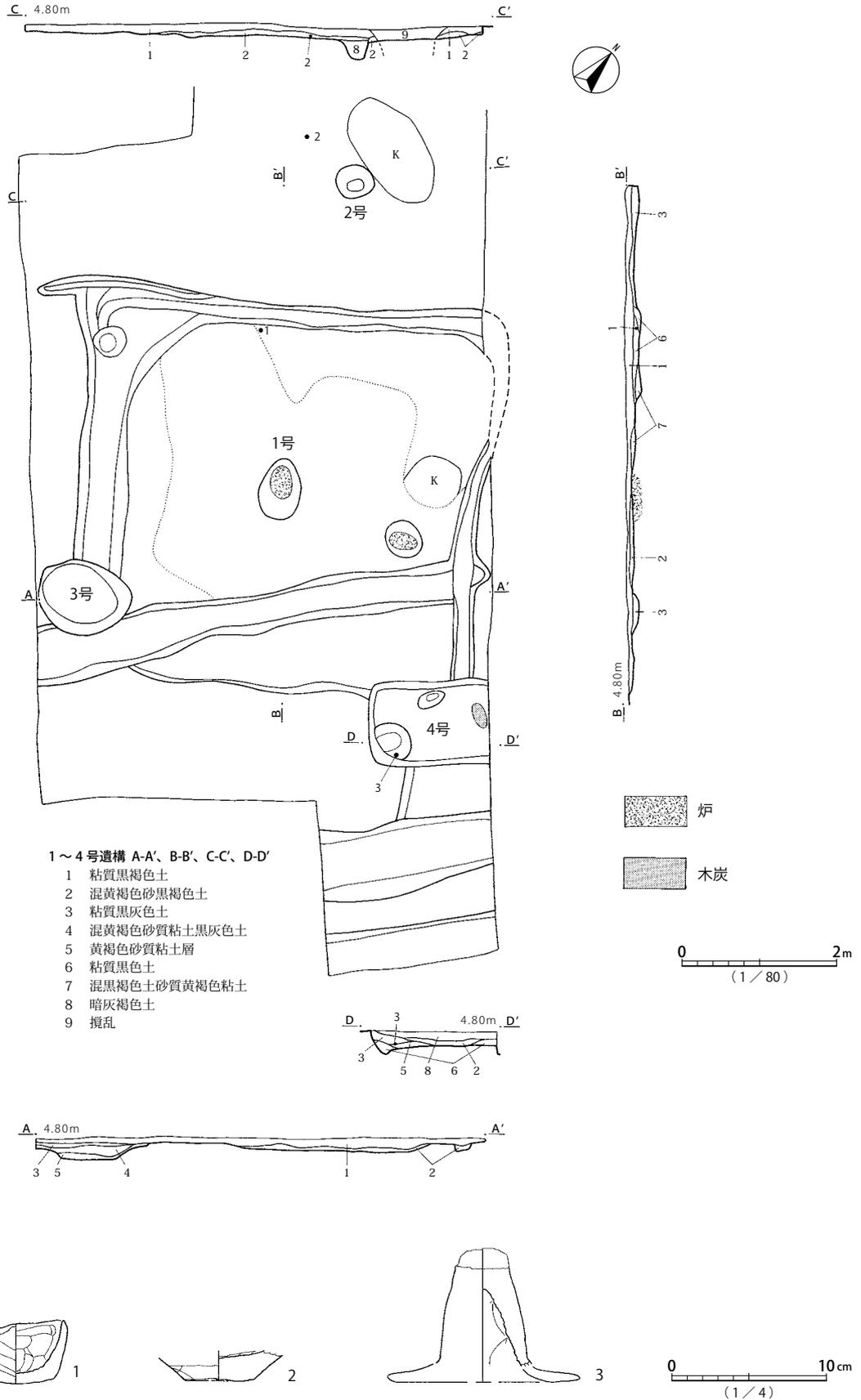
千葉県教育委員会1999「449 上境町遺跡」『千葉県埋蔵文化財分布地図（3）』

小川浩一2001「付編1.野毛上境町遺跡発掘調査報告」『市原市文化財センター年報』平成10年度

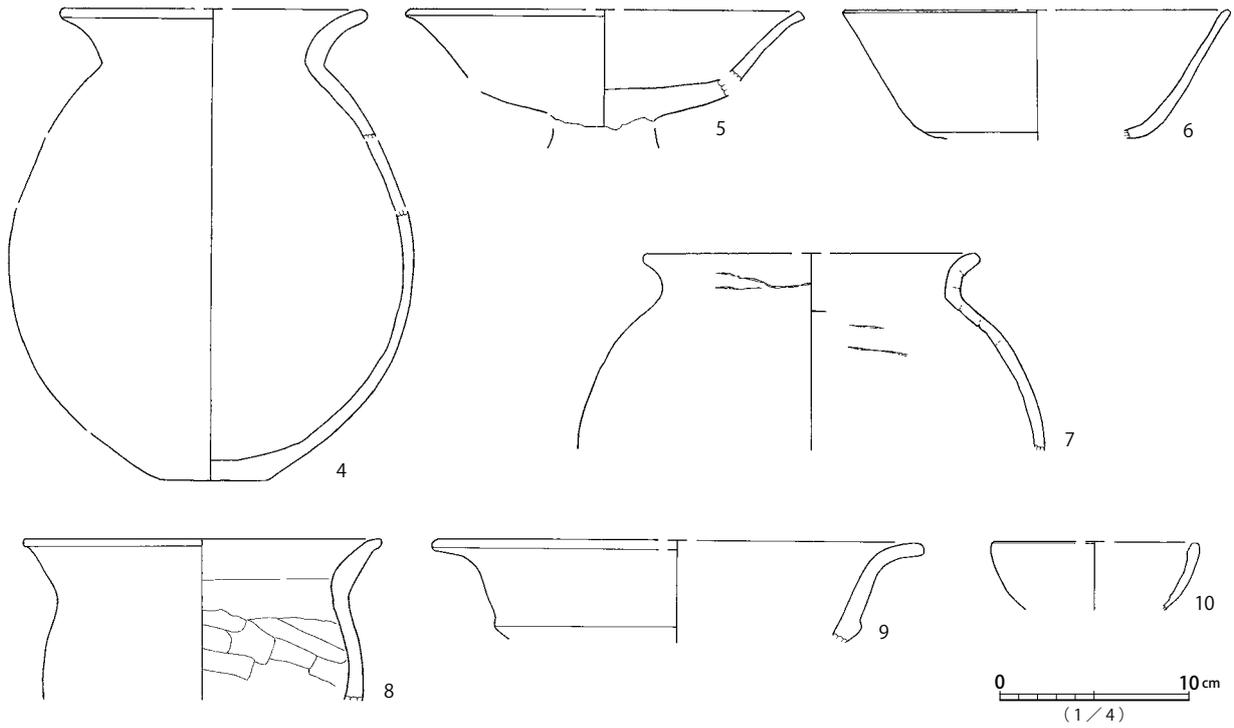


- 1・2・4・6トレンチ A-A'、B-B'、C-C'、D-D'、E-E'
- 1 現表土攪乱砂質灰褐色土
  - 2 暗褐色土
  - 3 混土器片粘質黒褐色土
  - 4 混黄褐色砂質粘土茶褐色粘質土
  - 5 黄褐色砂質粘土
  - 6 黒褐色土

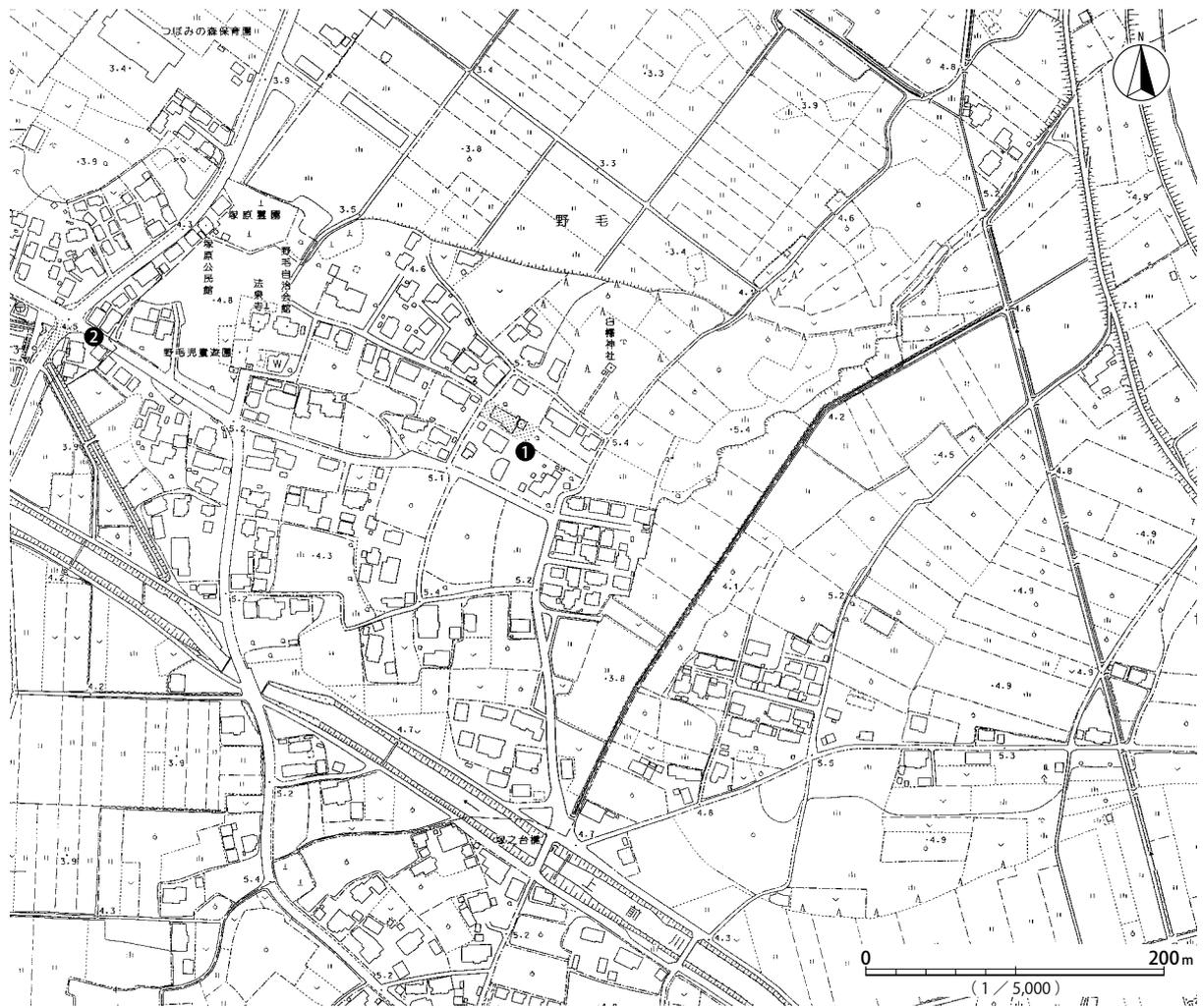
第31図 上境町遺跡(第2地点)トレンチ配置図・断面図(1)



第32図 上境町遺跡(第2地点) 平面図・断面図(2)・出土遺物 実測図(1)



第33図 上境町遺跡(第2地点) 出土遺物 実測図(2)



第34図 上境町遺跡(第2地点) 周辺地形図

## 9 海保大塚遺跡（第2地点）

**遺跡の位置** 遺跡は、姉崎台地北辺部海岸平野に面した標高 40m 前後の台地上に位置する（第 40 図 ①）。近隣では南西方約 300m の支谷を隔てた台地上に、畑木小谷遺跡②の調査（北見 2000・2002）が行われており、古墳時代後期円墳や弥生時代後期、古墳時代前期の竪穴住居跡等が検出されている。近隣地域は海保遺跡群として大規模調査が実施されており、北西側隣接部は、海保大塚遺跡③として調査されている（国際文化財株式会社 2014）。当遺跡の東側隣接部には、海保大塚古墳④があり海保大塚遺跡の字名の由来となっている。また、同遺跡の南側隣接部は、海保小谷遺跡⑤である。

**調査概要** 当調査区の東側が標高 42m、西側斜面下が標高 35m となっており、ほとんど平坦面がなく、概ね調査区全体が西側緩斜面となっている。確認対象面積 1,764 m<sup>2</sup>に対して、上層 184 m<sup>2</sup>の確認調査を実施した。また、下層確認調査では、調査区北端の 1 トレンチ、23 トレンチを対象として、表土から 2m の深度での掘削を実施した（第 35 図）。掘削範囲 2m × 2m、層厚 20 cm のロームを 10 点採取して精査したが、旧石器時代の遺物の検出を見ないまま、最下面において東京パミス TP を検出したため、調査を終了している。

**遺構と遺物** 調査区北部 4、5、7 トレンチにおいて、奈良・平安時代の溝状遺構を検出し、22 トレンチも同時期の溝状遺構と推測される。調査区内において古墳時代から古代遺構の覆土は、黒色有機質土であり、その覆土を有する直線状の溝状遺構を 8、13、15 トレンチ内に 3 条検出した。遺物の出土はないが、隣接の本調査成果から古墳時代の方形周溝墓と推測される。25 トレンチ検出の土坑は、土壇墓の可能性がある。弥生時代後期の竪穴住居跡は、隣接の大塚遺跡と同様に斜面部まで調査区全体に 30 軒展開している。弥生時代以前の遺構の覆土は、褐色土または暗褐色土となっており、弥生時代住居覆土の土壌は、第 37 図の 19 トレンチ断面が示すとおり黒色土または黒褐色土が基本である。縄文時代の遺構は土坑が 9、14 トレンチに検出されている。

本遺跡の出土遺物を第 38・39 図にまとめた。縄文土器と石器 1～7 が西側斜面部に集中しており、付近には遺構と包含層が存在すると推測される。弥生時代の出土遺物は、8～44 まですべて後期の時期であり、住居跡に伴うと考えられる。45 の須恵器片は、短頸壺の破片と推測され、5 トレンチ出土のため古代の溝状遺構に伴うと考えられる。

隣接の海保大塚遺跡第 1 地点の調査では、馬の背状の台地上に 100 を超える遺構が検出されている。

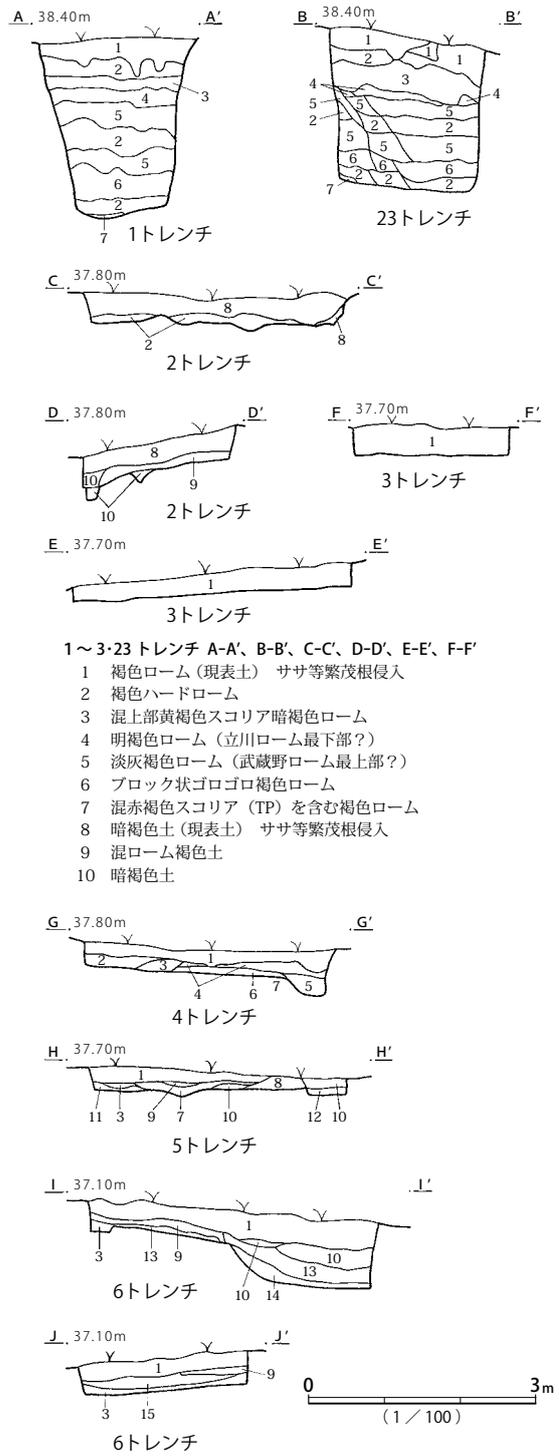
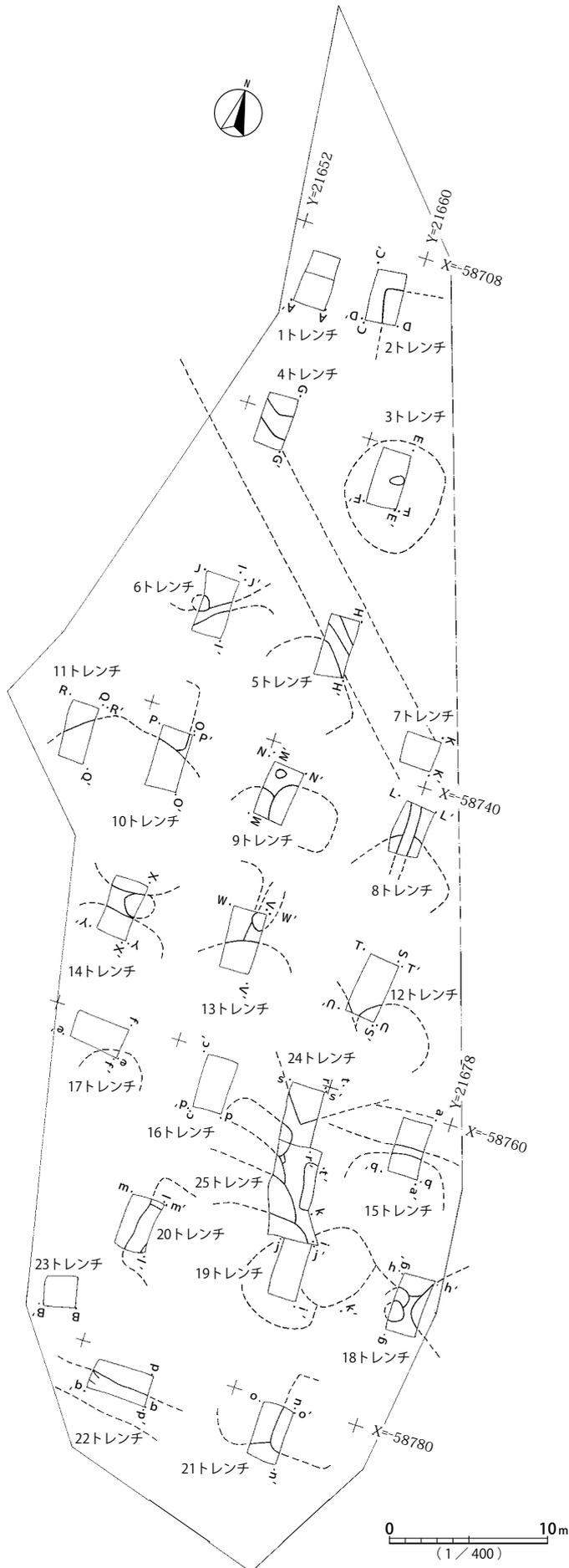
当調査区は、その拡張工事区域での遺構確認調査であったが、全域に遺構が存在するため、海保大塚遺跡の広範な広がり確認される結果となった。当調査区東側には海保大塚古墳があり、その周溝跡隣地までトレンチを設定した結果、周溝には周堤帯はなく、現地表面下 18 トレンチには、弥生時代の住居が検出されている。近世に三山塚として改変を受けている海保大塚古墳は、現状の周溝が近世に掘削され、拡張された可能性が高いことが推測される。

### 引用参考文献

北見一弘 2000 「畑木小谷遺跡」『不特定遺跡発掘調査報告（3）』市原市教育委員会（財）市原市文化財センター

北見一弘 2002 『畑木小谷遺跡Ⅱ』（株）ツーカーセラー東京（財）市原市文化財センター

国際文化財株式会社 2014 「海保小谷遺跡・海保大塚遺跡」『市原市海保地区遺跡群Ⅰ』第 2 分冊 大成建設（株）



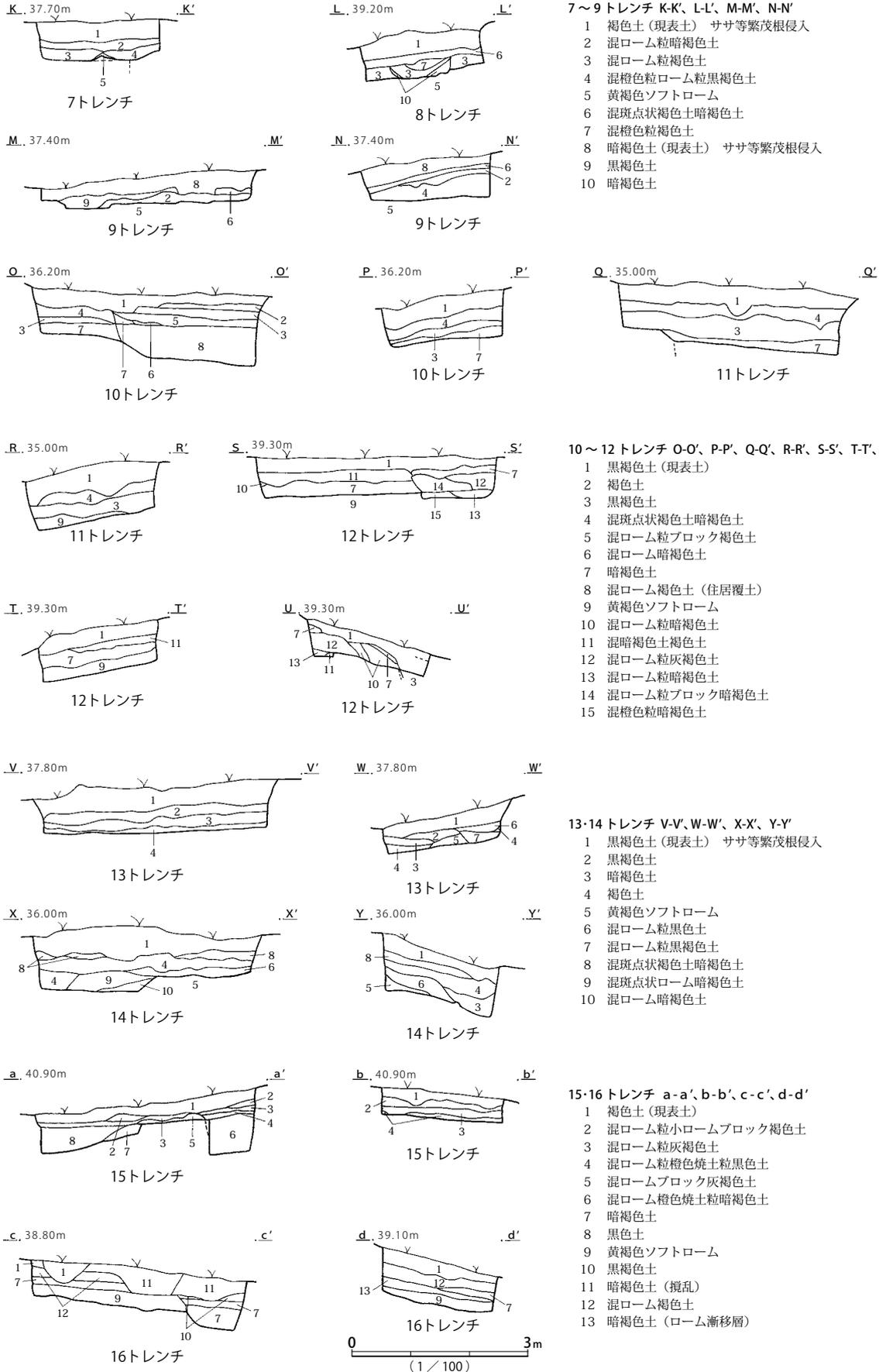
1～3・23トレンチ A-A'、B-B'、C-C'、D-D'、E-E'、F-F'

- 1 褐色ローム (現表土) ササ等繁茂根侵入
- 2 褐色ハードローム
- 3 混上部黄褐色スコリア暗褐色ローム
- 4 明褐色ローム (立川ローム最下部?)
- 5 淡灰褐色ローム (武蔵野ローム最上部?)
- 6 ブロック状ゴロゴロ褐色ローム
- 7 混赤褐色スコリア (TP) を含む褐色ローム
- 8 暗褐色土 (現表土) ササ等繁茂根侵入
- 9 混ローム褐色土
- 10 暗褐色土

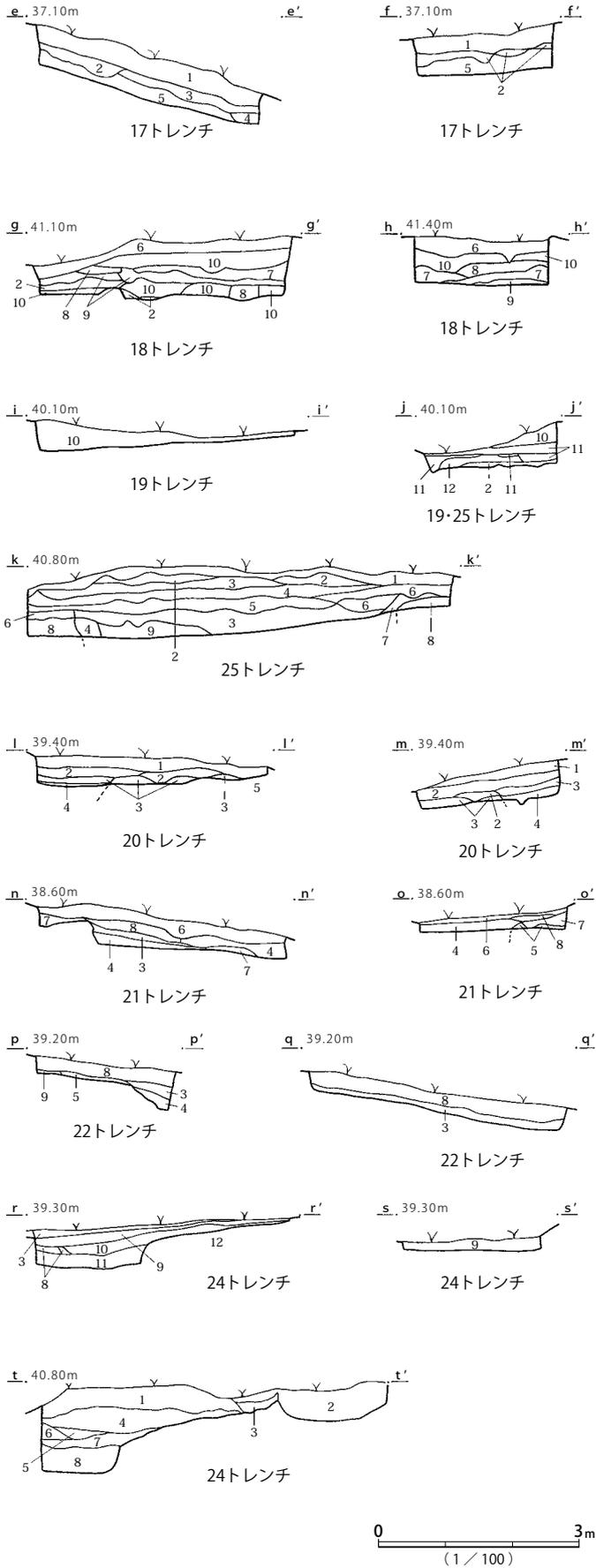
4～6トレンチ G-G'、H-H'、I-I'、J-J'

- 1 暗褐色土 (現表土)
- 2 混ローム粒黒色土
- 3 混ローム粒褐色土
- 4 明褐色土
- 5 褐色土
- 6 褐色土 (ローム漸移層)
- 7 黄褐色ソフトローム
- 8 褐色ローム (地山)
- 9 混ローム粒黒褐色土
- 10 黒褐色土
- 11 暗褐色土
- 12 混ローム褐色土
- 13 混ローム粒暗褐色土
- 14 混ロームブロック暗褐色土
- 15 橙色焼土

第35図 海保大塚遺跡(第2地点) トレンチ配置図・断面図(1)



第36図 海保大塚遺跡(第2地点) 断面図(2)

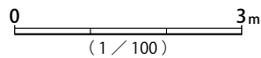


- 17・18トレンチ e-e', f-f', g-g', h-h'
- 1 黒褐色土 (現表土) ササ等繁茂根侵入
  - 2 暗褐色土
  - 3 黒色土
  - 4 黒褐色土
  - 5 褐色土
  - 6 褐色土 (現表土)
  - 7 混ローム粒黒褐色土
  - 8 混ローム褐色土
  - 9 混ローム粒黒色土
  - 10 混ローム暗褐色土

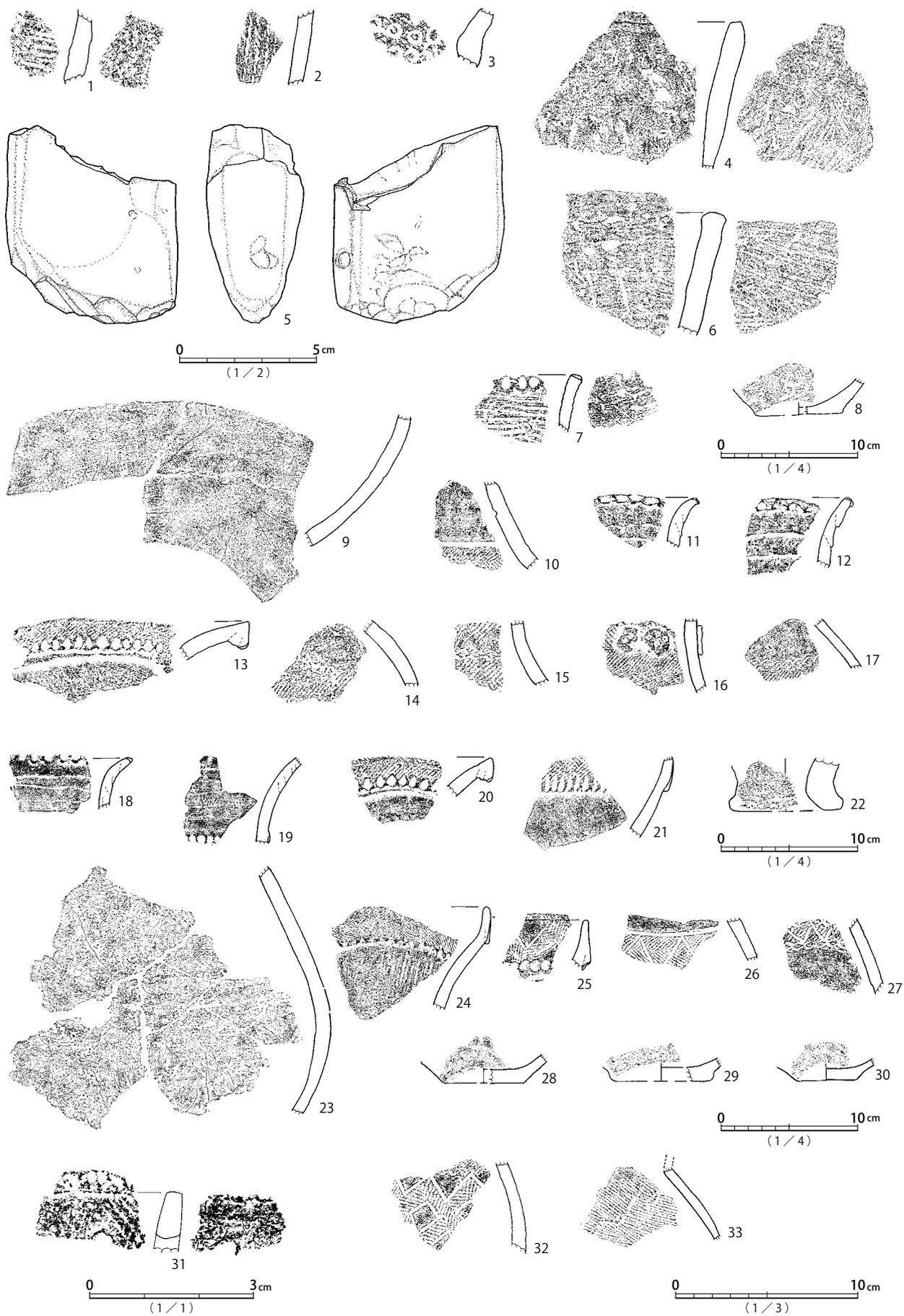
- 19・25トレンチ i-i', j-j', k-k'
- 1 黒褐色土 (現表土)
  - 2 褐色土
  - 3 混ロームブロック褐色土
  - 4 混ロームブロック暗褐色土
  - 5 混ローム粒黒色土
  - 6 暗褐色土
  - 7 褐色ロームブロック
  - 8 黄褐色ソフトローム
  - 9 混ロームロームブロック褐色土
  - 10 混ローム暗褐色土
  - 11 硬化混ローム暗褐色土
  - 12 混ローム褐色土

- 20～22トレンチ l-l', m-m', n-n', o-o', p-p', q-q'
- 1 暗褐色土 (現表土)
  - 2 混ローム粒黒褐色土
  - 3 混ローム粒暗褐色土
  - 4 混ローム粒褐色土
  - 5 黄褐色ソフトローム
  - 6 褐色土 (現表土)
  - 7 褐色土 (ローム漸移層)
  - 8 混ローム暗褐色土
  - 9 硬化暗褐色土

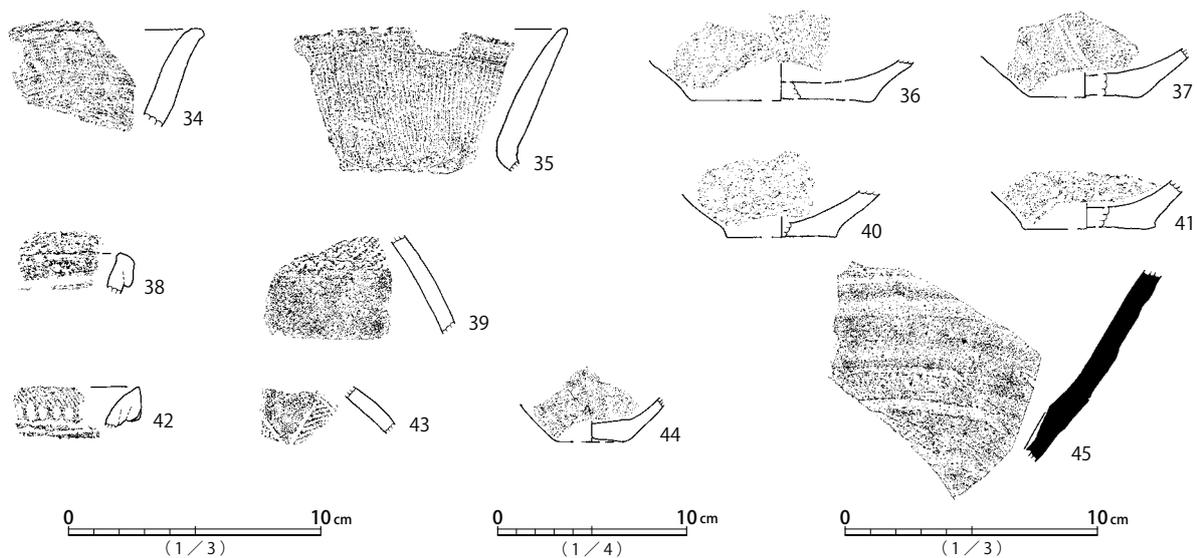
- 24トレンチ r-r', s-s', t-t'
- 1 黒褐色土 (現表土)
  - 2 褐色土 (攪乱)
  - 3 褐色土
  - 4 混ローム粒黒色土
  - 5 混ローム黒褐色土
  - 6 混ローム褐色土
  - 7 混ローム粒暗褐色土
  - 8 混ローム粒褐色土
  - 9 硬化混ローム粒暗褐色土
  - 10 混ローム粒黒褐色土
  - 11 混ロームブロック褐色土
  - 12 褐色ハードローム



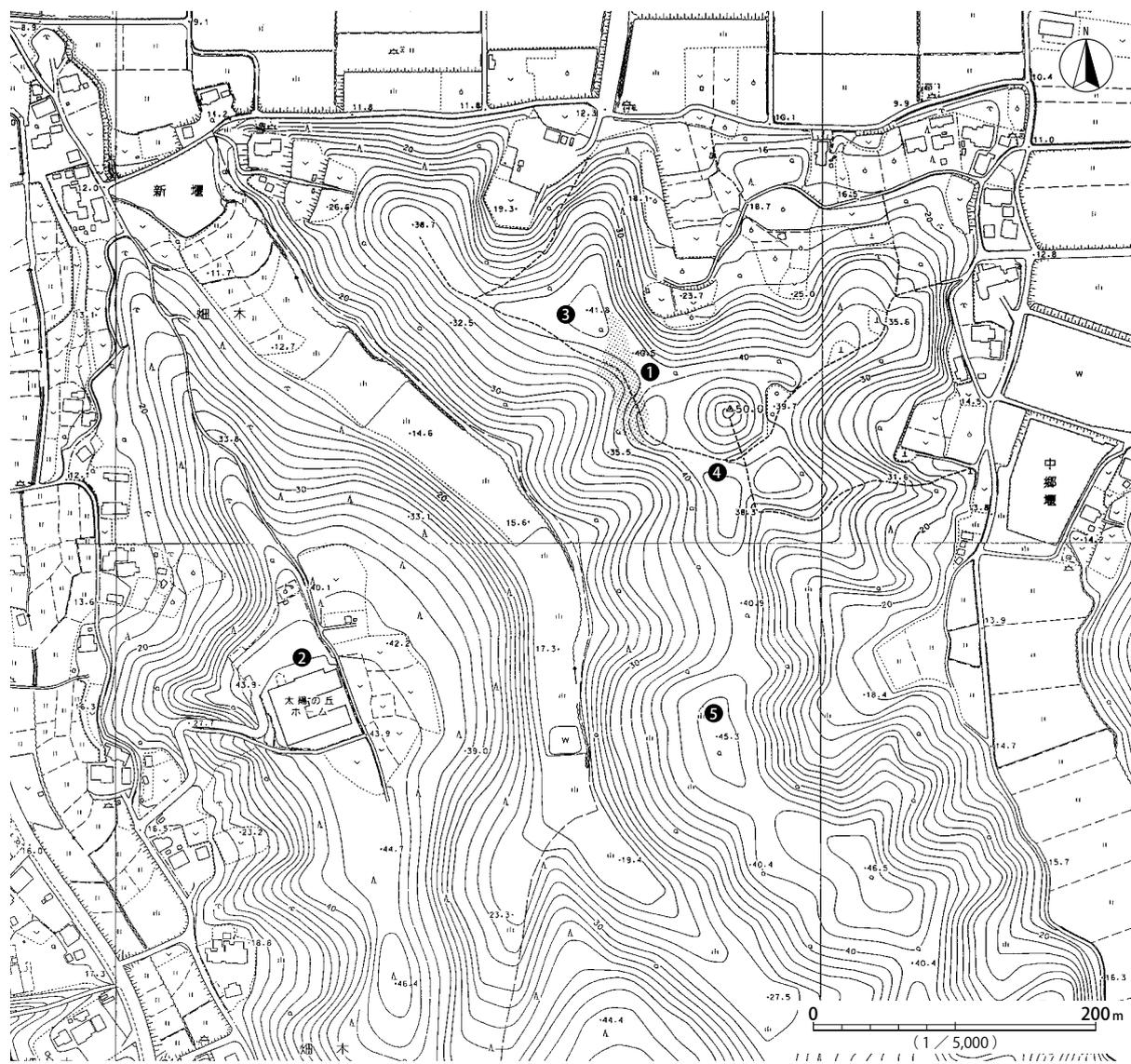
第37図 海保大塚遺跡(第2地点) 断面図(3)



第38图 海保大塚遺跡(第2地点) 出土遺物 実測図(1)



第39図 海保大塚遺跡(第2地点) 出土遺物 実測図(2)



第40図 海保大塚遺跡(第2地点) 周辺地形図



市原城跡 (門前地区第4地点)

神宮 図版 No.	遺物 No.	遺構 No.	遺構種別	遺構種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	現存量	色調 (外 / 内)	胎土	備考	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
18	1	1	深鉢	深鉢	底面文と散沫細文。	ナデ。	ナデ。輪積み痕あり。	胴部	褐色 / 褐色	密	胎之内式土器？			
18	2	1	深鉢	深鉢	平文細文。	ナデ。	ナデ。輪積み痕あり。	胴部	にぶい褐色 / 暗褐色	密	胎之内式土器？			
18	3	1	鉢	鉢	口唇部細文。口縁部羽状細文。	ハラミガキ。	ハラミガキ。赤彩。	口縁部	にぶい黄褐色 / 赤褐色	密	加曾利B式土器？			
18	4	1	壺	壺	口唇部細文。口縁部羽状細文と底面押捺。	ハラミガキ。	ハラミガキ。赤彩。	口縁部	明赤褐色 / 赤褐色	密				
18	5	1	壺	壺	口唇部内面羽状痕。	ハラミガキ。	ハラミガキ。赤彩。	胴部上半	褐色 / 褐色	白雲母白色粒含む				
18	6	1	壺	壺	口唇部内面羽状痕。他ハラミガキ。	ハラミガキ。	ハラミガキ。	胴部	明赤褐色 / 明赤褐色	密				
18	7	1	鉢	鉢	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。	ハラミガキ。	ハラミガキ。	口縁部付近	にぶい褐色 / 赤褐色	密				
18	8	1	壺	壺	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。	胴部	赤褐色 / にぶい褐色	密				
18	9	1	環	環	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。	底部 1/2 弱	褐色 / 褐色	密		<7.6>	(3.2)	
18	10	1	環	環	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。	底部 3/4 弱	明赤褐色 / 明赤褐色	密		6.0	(1.6)	
18	11	1	高台付杯	高台付杯	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	底部完存	にぶい褐色 / 黒褐色	密		6.5	(2.0)	
18	12	1	須臾器	須臾器	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	底部 1/6	灰色 / 灰色～オリーブ灰色	密		<9.6>	(2.6)	
18	13	1	灰軸	長頭壺	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	底部 1/4	灰白色～灰オリーブ / 灰白色～灰オリーブ	密		<10.2>	(2.8)	
18	14	2	高台付杯	高台付杯	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	底部 1/8	褐色 / 黒褐色	密		<8.0>	(2.1)	
18	15	2	皿	皿	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	底部 1/2	暗赤褐色 / 暗赤褐色	密		<3.8>	(0.9)	
18	16	2	須臾器	蓋	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	口縁 1/8	灰色 / 灰色	密		<16.6>	(1.4)	
18	17	3	カワラケ	カワラケ	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	口縁 1/8	明赤褐色 / 明赤褐色	密		<10.6>	(2.2)	
18	18	4	土師器	土師器	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	把手部周辺のみ	褐色 / 褐色	密				
18	19	7	壺	壺	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	口縁部片	褐色 / 褐色	密				
18	20	7	環	環	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	1/4 弱	黒 / 黒	密	内外面黒色処理	<10.0>		(3.5)
18	21	8	壺	壺	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	口縁部	明赤褐色 / 明赤褐色	白色粒多				
18	22	8	壺	壺	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	胴部	明褐色 / 明褐色	密				
18	23	8	環	環	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	口縁部の一部欠	褐色 / 褐色	密		11.5	4.4	4.5
18	24	8	環	環	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	底部 1/12	褐色 / 褐色	密		<8.6>		(1.5)
18	25	8	環蓋	環蓋	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	紐 2/3	にぶい赤褐色 / 黒色	密				(2.3)
18	26	8	環蓋	環蓋	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	紐 4/5	褐色 / 褐色	密				(1.8)
18	27	8	環	環	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	底部 1/2 弱	明赤褐色 / 黒色	密		<6.4>		(3.0)
18	28	8	環	環	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	口縁～底部 1/3 強	黒褐色 / 赤褐色～黒褐色	密		<13.0>		(3.7)
18	29	9	須臾器	須臾器	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	胴部	灰色 / 灰色	密				
18	30	10	カワラケ	カワラケ	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	胴部	灰色 / 灰色	密				
18	31	10	カワラケ	カワラケ	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	底部	褐色 / 褐色	密				
18	32	11	須臾器	須臾器	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	胴部	赤褐色～暗赤褐色 / 赤褐色～暗赤褐色	砂粒多				
19	33	12	深鉢	深鉢	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	口縁部	極暗赤褐色 / 極暗赤褐色	密				
19	34	12	深鉢	深鉢	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	胴部	黄褐色 / にぶい褐色	密				
19	35	12	深鉢	深鉢	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	胴部	赤褐色 / 粗灰色	密				
19	36	12	壺	壺	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	口縁部	明赤褐色 / 明赤褐色	密				
19	37	12	壺	壺	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	口縁部	赤褐色 / 赤褐色	密				
19	38	12	壺	壺	口唇部細文。口縁部羽状細文。他ハラミガキ。赤彩。	ハラミガキ。	ハラミガキ。黒色如理。	口縁部	にぶい褐色 / 明赤褐色	密				



種別	図版 No.	遺物 No.	トレンチ No.	遺構 No.	遺構種別	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	現存量	色調(外/内)	胎土	備考	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
23	8	22		3		縄文土器	深鉢	無面縄文。	ヘラミガキ。	胴部	にぶい褐色/にぶい褐色	密	称名寺式			
23	8	23		3		縄文土器	深鉢	口縁部無文帯下、平行沈線文、口縁部指頭押捺文、体部平行沈線文。	器面摩耗。 ナゾ。	口縁部	褐色/褐色	密	称名寺式			
23	8	24		3		縄文土器	深鉢	荒い縄文。	ナゾ。	胴部	灰褐色/灰褐色	密	加曾利B式			
23	8	25		3		縄文土器	深鉢	一部に縄文現る。	ナゾ。	底部	黒褐色/にぶい黄褐色	密	馳之内式			
23	8	26		3		縄文土器	鉢	口縁部おそろく4車直の波状線。	ナゾ。	底部	黒褐色/黒褐色	密	称名寺式			
23	8	27		4		縄文土器	深鉢	細文。	ヘラミガキ。	口縁部	にぶい褐色/にぶい褐色	密	馳之内式			
23	8	28		4		縄文土器	深鉢	細文。	ヘラミガキ。	胴部	褐色/褐色	密	加曾利E式終末			
23	8	29		4		縄文土器	深鉢	細文。	ナゾ。	胴部	黒褐色/褐色	密	加曾利E式終末			
23	8	30		4		縄文土器	深鉢	細文。	ヘラミガキ。	胴部	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色	密	加曾利E式終末			
23	8	31		4		縄文土器	深鉢	細文。	ナゾ。一部器面剥離。	胴部	褐色/褐色	密	馳之内式			
23	8	32		4		縄文土器	深鉢	無面縄文。	ヘラミガキ。	胴部	褐色/褐色	密	称名寺式			
23	8	33		5		縄文土器	深鉢	細文。	ナゾ。	口縁部	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	密	加曾利E式終末			
23	8	34		7		縄文土器	深鉢	口縁部無文帯。	ナゾ。	口縁部	褐色/褐色	密	加曾利E式終末			
23	8	35		9C		縄文土器	深鉢	棒状工具による平行沈線文内に縄文施文。	ナゾ。	口縁部	褐色/褐色	密	称名寺式			
23	8	36		9C		縄文土器	深鉢	細文施文。	ナゾ。	口縁部	褐色/にぶい褐色	密	称名寺式			
23	8	37		11		縄文土器	深鉢	細文。	ナゾ。	胴部	褐色/にぶい褐色	密	加曾利E式終末			
23	8	38		11		縄文土器	深鉢	細文。	ナゾ。	胴部	にぶい褐色/にぶい褐色	密	加曾利E式終末			
23	8	39		11		縄文土器	深鉢	細文。	ナゾ。	胴部	相灰色/灰褐色	密	加曾利E式終末			
23	8	40		11		縄文土器	深鉢	沈線文と縄文。	ナゾ。	胴部	灰褐色/灰褐色	密	加曾利E式終末			
23	8	41	表深			土師器	高坏	ヘラケズリ。	ヘラナゾ。	胴部の一部	褐色/褐色	密	鬼高式足御高坏。			(26)
23	8	42		9A		石器	石簇	両面調整。	小削片再生、先端部リタッチ再生。	完形	黒曜石・黒綿線透明	蜜・気泡なし	細文時代小型石簇。重量0.7g	幅 1.47 厚さ 0.4	長さ 1.81	

諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第2地点)

種別	図版 No.	遺物 No.	トレンチ No.	遺構 No.	遺構種別	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	現存量	色調(外/内)	胎土	備考	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
27	8	1		1		縄文土器	深鉢	条痕。棒状工具による刺突文。	条痕。	口縁部突起	褐色/明褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	2		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	口縁部突起	褐色/褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	3		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	明赤褐色/にぶい褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	4		1		縄文土器	深鉢	口縁部波状隆線、口唇棒状工具による刺突文。	条痕。	胴部	赤褐色/にぶい赤褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	5		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	赤褐色/灰褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	6		1		縄文土器	深鉢	条痕。棒状工具による刺突文、正痕見舞。	条痕。	胴部	明赤色/にぶい赤褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	7		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	褐色/にぶい褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	8		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	暗褐色/にぶい黄褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	9		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	褐色/にぶい黄褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	10		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	にぶい褐色/にぶい褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	11		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	黒褐色/褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	12		1		縄文土器	深鉢	条痕。棒状工具による刺突文。	条痕。	胴部	灰黄褐色/にぶい黄褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	13		1		縄文土器	深鉢	条痕。棒状工具による刺突文。	条痕。	胴部	灰褐色/にぶい赤褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	14		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	にぶい黄褐色/褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	15		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	褐色/にぶい黄褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	16		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	明褐色/暗褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	17		1		縄文土器	深鉢	条痕。棒状工具による刺突文。	条痕。	胴部	黒褐色/明赤褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	18		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	褐色/にぶい褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	19		1		縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	にぶい赤褐色/褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	20	1			石器	磨石	側面若干の磨打痕。		胴部	暗灰黄色	硬砂岩	茅山上層式	幅 6.0 長さ 2.5	高さ 8.6	
27	8	21	3			縄文土器	深鉢	条痕。	条痕。	胴部	褐色/にぶい褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	22	3			縄文土器	深鉢	横位磨り付け隆線。条痕。	条痕。	胴部片	褐色/黒褐色	繊維含む	茅山上層式			
27	8	23	4			縄文土器	深鉢	口縁部頂から縦位磨り付け隆線。条痕。	条痕。	口縁部	にぶい赤褐色/明赤褐色	繊維含む	茅山上層式			

種別	図版 No.	遺物 No.	トレンチ No.	遺構 No.	遺構種別	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	現存量	色調(外/内)	胎土	備考	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
27	8	24	4		深鉢	深鉢	口縁部突起、化粧土痕、条痕。	条痕。	口縁部突起	口縁部突起	黒褐色/褐色	繊維含む	茅山上層式			
27		25	4		深鉢	深鉢	条痕。	条痕。	胎部	胎部	にぶい赤褐色/暗褐色	繊維含む	茅山上層式			
27		26	4		深鉢	深鉢	条痕。	条痕。	胎部	胎部	にぶい褐色/にぶい黄褐色	繊維含む	茅山上層式			
27		27	4		深鉢	深鉢	条痕。	条痕。	胎部	胎部	赤褐色/にぶい褐色	繊維含む	茅山上層式			
27		28	4		深鉢	深鉢	条痕。	条痕。	胎部	胎部	明赤褐色/にぶい褐色	繊維含む	茅山上層式			
27		29	4		深鉢	深鉢	条痕。	条痕。	胎部	胎部	赤褐色/にぶい黄褐色	繊維含む	茅山上層式			
27		30	4		深鉢	深鉢	三条の平行沈線文。	無文。	胎部	胎部	褐色/褐色	繊維含む	早期沈線文系土器			
27	8	31	5		深鉢	深鉢	口縁部波状突起類在隆帯、条痕。	条痕。	口縁部突起	口縁部突起	暗赤褐色/にぶい赤褐色	繊維含む	茅山上層式			
27		32	5		深鉢	深鉢	胎部口縁部区画隆帯、条痕。	条痕。	胎部	胎部	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色	繊維含む	茅山上層式			
27		33	5		深鉢	深鉢	条痕。	条痕。	胎部	胎部	褐色/褐色	繊維含む	茅山上層式			
27		34	6		深鉢	深鉢	尖底部近、胎部、条痕。	条痕。	胎部	胎部	褐色/黒色	繊維含む	茅山上層式			

椎津向原遺跡(第4地点)

種別	図版 No.	遺物 No.	トレンチ No.	遺構 No.	遺構種別	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	現存量	色調(外/内)	胎土	備考	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
30		1	1		土師器	土師器	口縁部横位ナデ、胎部縦位ケズリ。	横位ナデ。	口縁部 1/6	口縁部 1/6	淡黄褐色/淡黄褐色	密				(5.6)
30		2	1		土師器	環口縁部	摩擦痕形不明。	斜格子状暗文。	口縁部 1/10	口縁部 1/10	赤褐色/赤褐色	密	内面暗文			(3.7)
30	8	3	1		土製品	管状土罽	端部欠損。		90%	90%	淡黄褐色	密				(2.5)
30	7	4	3		土師器	裏底部	被染器面汚れ。	ナデ。	底部 1/2	底部 1/2	黒褐色/淡黄褐色	密				(2.0)
30		5	4		須臾器	坏蓋	縁辺打ち欠き。	凸部に擦り痕跡。	縁辺部のみ欠損	縁辺部のみ欠損	灰色/灰色	白色粒子的形成良好	転用風?			

上境町遺跡(第2地点)

種別	図版 No.	遺物 No.	トレンチ No.	遺構 No.	遺構種別	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	現存量	色調(外/内)	胎土	備考	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
32	7	1	1		土師器	手づくお土器	ヘラナデ。	指ナデ。	完形	完形	明赤褐色/赤色	密	和泉式、住居床直上出土	6.7	4.9	4.2
32		2	2		土師器	裏	器面摩耗	器面摩耗	底部 3/4	底部 3/4	明赤褐色/明赤褐色	密	和泉式、土坑出土	<4.5>	<2.0>	(8.7)
32	7	3	4		土師器	高坏	器面摩耗、赤彩痕跡有る。	指ナデ。	胎部 3/4	胎部 3/4	明赤褐色/赤褐色	密	和泉式、土坑出土	<11.5>	<8.7>	<25.0>
33		4	1		土師器	裏	器面摩耗。	器面摩耗。	口縁部 1/5、胎部下位 1/3 ~ 底部完存	口縁部 1/5、胎部下位 1/3 ~ 底部完存	褐色/褐色	密	和泉式、土坑出土	<15.7>	5.4	<25.0>
33		5	1		土師器	高坏	器面摩耗。	器面摩耗、赤彩。	口縁部 1/5、胎部下端 2/3	口縁部 1/5、胎部下端 2/3	褐色/赤褐色	密	和泉式、2分割同一個体	<20.4>	<6.4>	<6.8>
33	7	6	1		土師器	高坏	器面摩耗。	器面摩耗。	胎部 1/6	胎部 1/6	褐色/褐色	密	和泉式、土坑出土	<20.2>	<6.8>	<10.5>
33	8	7	2		土師器	裏	器面割離。	器面摩耗。	口縁~胎部上位 1/5	口縁~胎部上位 1/5	明赤褐色/明赤褐色	密	和泉式、内外細輪郭み痕あり。	<17.2>	<8.6>	<8.6>
33	7	8	4		土師器	裏	口縁部ナデ。他器面摩耗。	口縁部ナデ。	口縁部 2/3	口縁部 2/3	淡黄褐色/淡黄褐色	密	和泉式、土坑出土	<18.7>	<25.2>	(5.4)
33		9	4		土師器	高坏	坏部打段、摩耗。	摩耗。	口縁部 1/10	口縁部 1/10	褐色/浅黄褐色	密	和泉式、土坑出土	<25.2>	<5.4>	(5.4)
33		10	4		土師器	坏	器面摩耗。	器面摩耗。	口縁部 1/8	口縁部 1/8	淡褐色/褐色	密	和泉式、土坑出土	<10.7>	<3.5>	(3.5)

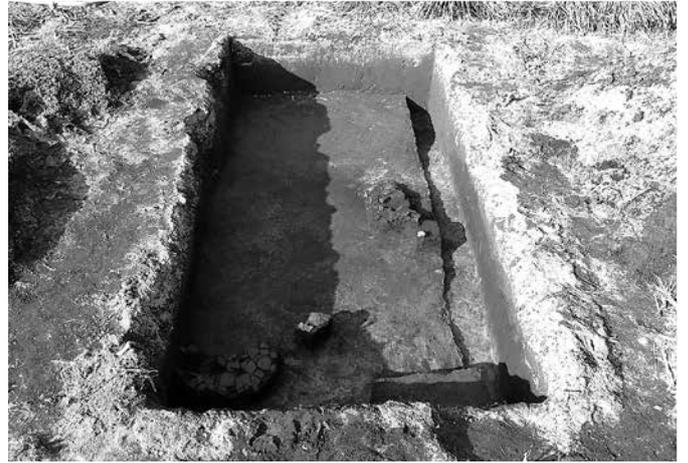
海保大塚遺跡(第2地点)

種別	図版 No.	遺物 No.	トレンチ No.	遺構 No.	遺構種別	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	現存量	色調(外/内)	胎土	備考	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
38		1	7		土師器	鉢	条痕。	条痕。	胎部	胎部	明赤褐色/褐色	繊維含む。	条痕文系			
38		2	8		土師器	鉢	擦余文。		胎部	胎部	褐色/相灰色	繊維含む。	稲荷台式			
38		3	10		土師器	深鉢	凹形竹管押圧。		胎部	胎部	褐色/褐色	繊維含む。	条痕文系			
38		4	11		土師器	深鉢			口縁部	口縁部	褐色/黄褐色		子母口式			
38	8	5	11		石器	敲打器	裏面半磨石配用。		約 1/2 ?	約 1/2 ?	灰色	火山岩、珪晶	打割石弁状の敲打刺離。重量 205.4g	幅 6.21	高さ 3.46	長さ 7.0
38	8	6	11		土師器	深鉢	擦底。	擦底。	口縁部	口縁部	灰黄褐色/にぶい褐色		子母口式			
38		7	25		土師器	深鉢	口唇部斜状庄痕刻み、条痕。	条痕。	口縁部	口縁部	にぶい黄褐色/褐色					
38		8	全体一括		土師器	鉢	無文、胎下半部縦位付きあり。	縦ミナナ。	底部 1/4	底部 1/4	赤褐色/オリーブ黒色	密若干の砂塵交じり	弥生後期	<6.3>	<2.5>	(2.5)
38		9	2		土師器	裏	横位在割区画内打割文。	上半部赤彩。	胎部	胎部	にぶい黄褐色/明褐色	密	弥生後期			
38		10	2		土師器	皿	口縁部輪郭み痕、口唇部丸棒状刻み。	横ナデ。	胎部	胎部	明褐色/褐色	密	弥生後期			
38		11	7		土師器	裏		横ナデ。	口縁部	口縁部	褐色/褐色	密	弥生後期			

図版 No.	遺物 No.	トレンチ No.	遺構 No.	遺構種別	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	現存量	色調(外/内)	胎土	備考	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
38	12	8			弥生土器	甕	口縁部輪郭のみ直、口唇部丸棒状列のみ。	横ナズ。	口縁部	褐色 / 褐色	密	弥生後期			
38	13	9			弥生土器	甕	複合? 重口縁、折返し部細文帯体押し刻み、頭部赤彩。	赤彩色。	口縁部	明赤褐色 / にぶい赤褐色	密、黄白色粒含有	弥生後期			
38	14	9			弥生土器	甕	胴部上半部細文帯。	横ミカヅ。	胴部	褐色 / 明赤褐色	密、黄白色粒含有	弥生後期			
38	15	9			弥生土器	甕	胴部上半部細文帯S字状結節区画。	内面赤彩。	胴部	明褐色 / 赤褐色	密	弥生後期			
38	16	9			弥生土器	甕	頸部口形添付文細竹管刺突、地紋羽状細文。		頸部	明赤褐色 / 明赤褐色	密、黄白色粒混入	弥生後期			
38	17	9			弥生土器	甕	胴部上半部細文帯S字状結節区画。		胴部	褐色 / 明赤褐色	密	弥生後期			
38	18	11			弥生土器	甕	口縁部輪郭のみ直、口唇部丸棒状列のみ。	横ナズ。	口縁部	褐色 / 褐色	密	弥生後期			
38	19	11			弥生土器	甕	口縁部近しい頭部に輪郭のみ直、横位原形刺突。	横ナズ。	口縁部	褐色 / 褐色	密	弥生後期			
38	20	12			弥生土器	甕	複合? 重口縁細文帯、折り返し部に原形刻み、赤彩。	赤彩色。	口縁部	褐色 / 赤褐色	密、黄白色粒含有	弥生後期			
38	21	12			弥生土器	鉢	複合? 重口縁細文帯、折り返し部に原形刻み、赤彩。	ヘラナズ、赤彩。	口縁部	赤褐色 / 赤褐色	密	弥生後期			
38	22	12			弥生土器	鉢?	ヘラナズ。	ヘラナズ。	胴部	にぶい赤褐色 / 明赤褐色	密若干の砂礫交じり	弥生後期			<8.0>
38	23	14			弥生土器	甕	胴部無文ナズ整形。	ナズ整形。	胴部	褐色 / 明赤褐色	褐色シヤモット含有	弥生後期			
38	24	14			弥生土器	甕	複合? 重口縁羽状細文、折り返し部に原形刻み、赤彩。	ヘラナズ、赤彩。	口縁部	褐色 / 赤褐色	密	弥生後期、融熱			
38	25	14			弥生土器	甕	複合? 重口縁細文帯区画内細文、折り返し部に原形刻み、細文帯外赤彩。	ヘラナズ、赤彩。	口縁部	赤褐色 / 明赤褐色	密、黄白色粒含有	弥生後期			
38	26	14			弥生土器	甕	胴上半部細文帯区画内羽状細文。	ヘラナズ。	胴部	赤褐色 / 褐色	密	弥生後期			
38	27	14			弥生土器	甕	胴上半部細文帯区画内羽状細文S字状結節区内赤彩。	ヘラナズ。	胴部	黒褐色 / 明赤褐色	密	弥生後期			
38	28	14			弥生土器	?		ヘラナズ。	底部 1/4	黒色 / 褐色	密	弥生後期			<5.8>
38	29	19			弥生土器	甕	底部細線ハケ。	ヘラナズ。	底部 1/4	赤褐色 / 明褐色	密	弥生後期			<7.2>
38	30	15			弥生土器	甕	底部細線ハケ。	ヘラナズ。	底部 3/4	褐色 / 明褐色	密	弥生後期			<4.2>
38	31	18			弥生土器	鉢	口唇部原形押正、ハケ、焼成部横位穿孔、赤彩色。	ハケ。	口縁部	にぶい赤褐色 / にぶい赤褐色	密	焼成前、横位穿孔1箇所、径 3.5mm。弥生後期			
38	32	17			弥生土器	甕	平行沈線交差部細文内細文外赤彩、上S字状結節細文。	ヘラナズ。	胴部	赤褐色 / 赤褐色	密	弥生後期			
38	33	17			弥生土器	甕	口唇部直下胴上半部ハケ。	ヘラナズ。	胴部	にぶい赤褐色 / 明赤褐色	密	弥生後期			
39	34	20			弥生土器	甕	口縁部無文ナズ整形。	ナズ整形。	口縁部	褐色 / 褐色	密	弥生後期			
39	35	20			弥生土器	甕	口縁部細線ハケ。	口縁部細線ハケ。	口縁部 1/4	赤褐色 / にぶい赤褐色	密	弥生後期			
39	36	20			弥生土器	甕	底部細線ハケ。	ヘラナズ。	底部 1/4	にぶい赤褐色 / 暗赤褐色	密	弥生後期			<9.5>
39	37	20			弥生土器	甕	底部ヘラナズ。	ヘラナズ。	底部 1/4	にぶい赤褐色 / 灰褐色	密	弥生後期			<5.8>
39	38	24			弥生土器	甕	複合? 重口縁。	器面磨ね。	口縁部	褐色 / 褐色	密	弥生後期			
39	39	24			弥生土器	甕	胴部上半S字状結節。		胴部	赤褐色 / 褐色	密	弥生後期			
39	40	21			弥生土器	甕?	底部ヘラナズ。	ヘラナズ。	底部 1/4	赤褐色 / 黒褐色	密	弥生後期			<5.8>
39	41	全体一括			弥生土器	甕	ナズ整形。	ナズ整形。	底部 1/4	明赤褐色 / にぶい褐色	褐色シヤモット含有	弥生後期			<6.8>
39	42	25			弥生土器	甕	複合? 重口縁、折り返し部に原形刻み、細文帯。	ヘラナズ、赤彩。	口縁部	明赤褐色 / 明赤褐色	密	弥生後期			
39	43	25			弥生土器	甕	平行沈線部細文内細文外赤彩。	ヘラナズ。	胴部	赤褐色 / 明赤褐色	密	弥生後期			
39	44	7			弥生土器	甕		ナズ整形。	底部 1/4	明赤褐色 / 明赤褐色	密	弥生後期			<3.1>
39	45	5			須臾器	短頸甕?	胴部口コ整形。	ロコ口整形。	胴部	淡灰色 / 灰黄色	密	古墳時代終末			



山新遺跡 1トレンチ



山新遺跡 3トレンチ 土層断面



山新遺跡 4トレンチ 遺構検出



山新遺跡 5トレンチ 遺構検出



椎津城跡 1トレンチ地区 全景



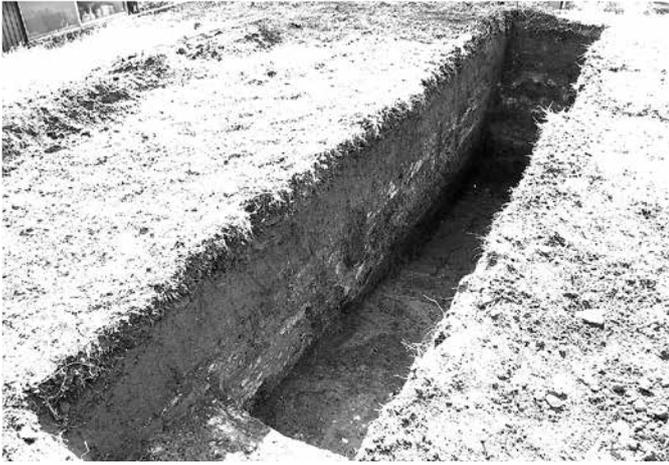
椎津城跡 1-1トレンチ 土層断面



椎津城跡 2-2トレンチ 土層断面



椎津城跡 2-2トレンチ 貝殻・焼土検出



椎津城跡 2-4トレンチ 土層断面



椎津城跡 3-3トレンチ 土層断面



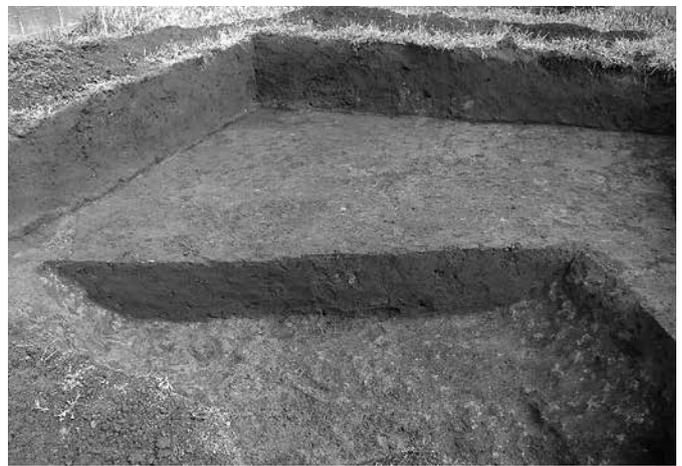
椎津城跡 3-3トレンチ 全景



椎津城跡 3-3トレンチ 土層断面



市原城跡 調査前



市原城跡 1トレンチ 遺構検出



市原城跡 1トレンチ 土層断面



市原城跡 7トレンチ 遺構検出



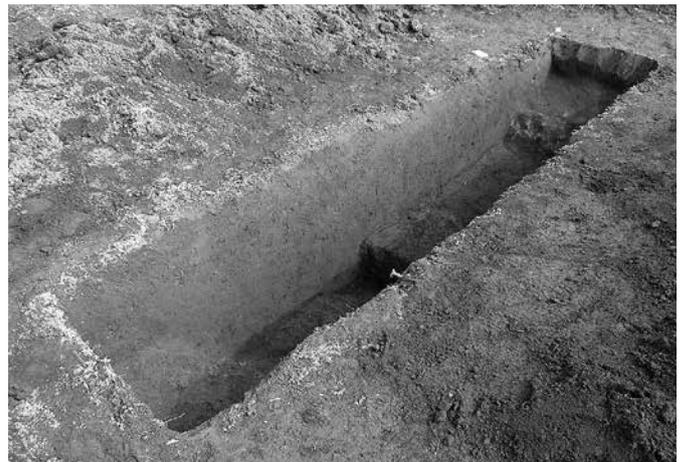
市原城跡 9トレンチ 遺構検出



市原城跡 12トレンチ 遺構検出



市原城跡 2・15トレンチ 遺構検出



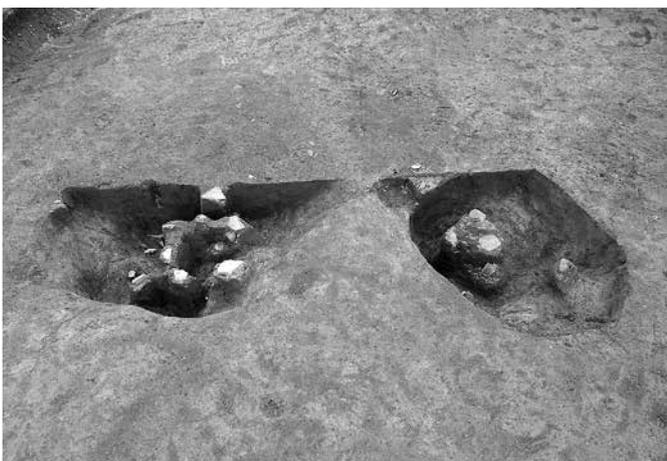
市原城跡 16トレンチ 遺構検出



能満分区遺跡群 5トレンチ



能満分区遺跡群 2号遺構 土層断面



能満分区遺跡群 3・4号遺構 遺物検出



能満分区遺跡群 調査区 全景



諏訪台古墳群・諏訪台遺跡 1トレンチ 調査風景



諏訪台古墳群・諏訪台遺跡 1トレンチ 遺構検出



諏訪台古墳群・諏訪台遺跡 3トレンチ 土層断面



諏訪台古墳群・諏訪台遺跡 5トレンチ 全景



椎津向原遺跡 1トレンチ 遺構検出



椎津向原遺跡 2トレンチ 貝層検出



椎津向原遺跡 3トレンチ 遺構検出



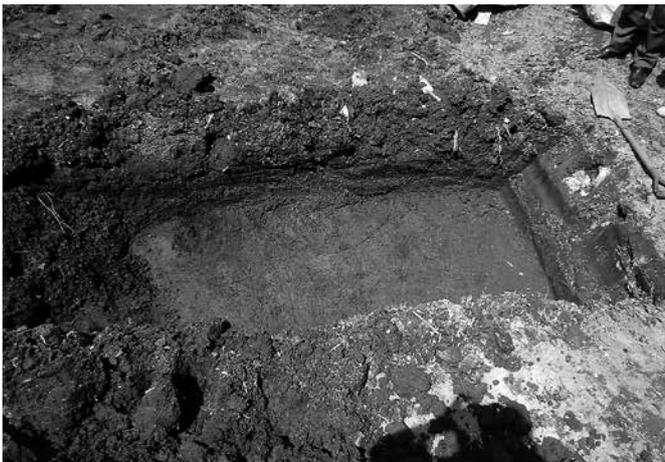
椎津向原遺跡 3トレンチ 全景



上境町遺跡 1トレンチ 土層断面



上境町遺跡 2トレンチ 遺構検出



上境町遺跡 4トレンチ 遺構検出



上境町遺跡 6トレンチ 全景



上境町遺跡 1号遺構 全景



上境町遺跡 2号遺構 全景



上境町遺跡 3号遺構 全景



上境町遺跡 4号遺構 全景



海保大塚遺跡 調査区 全景



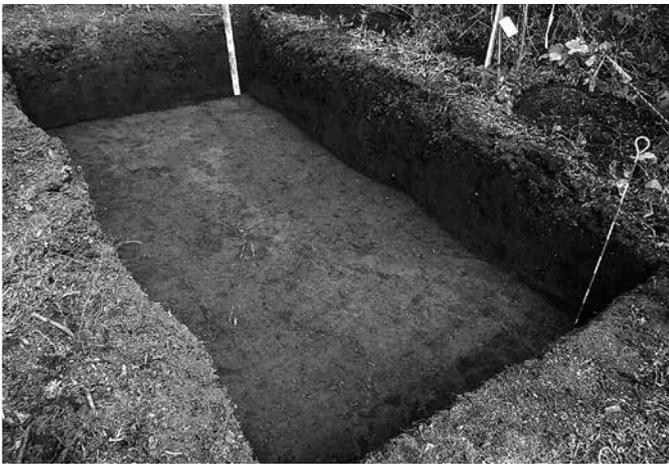
海保大塚遺跡 5トレンチ 遺構検出



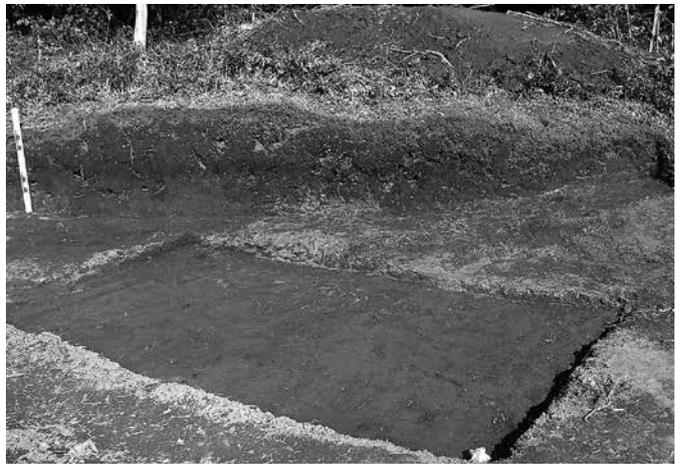
海保大塚遺跡 7トレンチ 遺構検出



海保大塚遺跡 9トレンチ 遺構検出



海保大塚遺跡 18トレンチ 遺構検出



海保大塚遺跡 19トレンチ 遺構検出



海保大塚遺跡 22トレンチ 遺構検出



海保大塚遺跡 23トレンチ 下層調査



山新遺跡-1



山新遺跡-2



山新遺跡-14



椎津城跡-6



椎津城跡-15



市原城跡-9



市原城跡-12



市原城跡-13



市原城跡-23



市原城跡-27



市原城跡-28



市原城跡-40



市原城跡-43



市原城跡-53



市原城跡-54



市原城跡-55



椎津向原遺跡-4



上境町遺跡-1



上境町遺跡-3



上境町遺跡-6

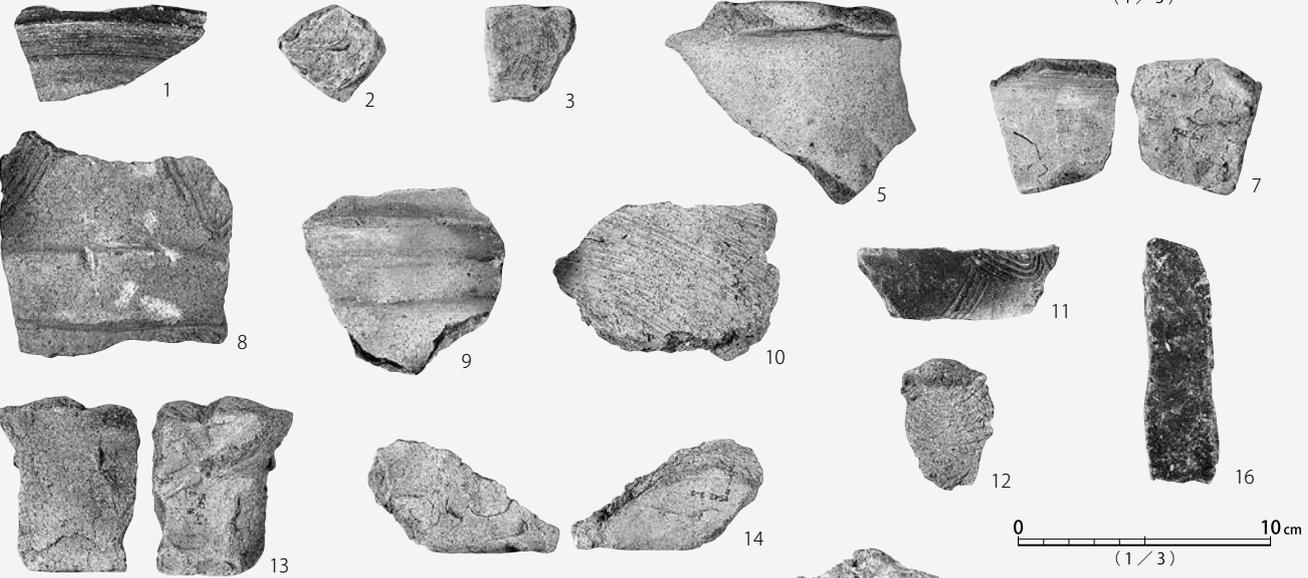


上境町遺跡-8

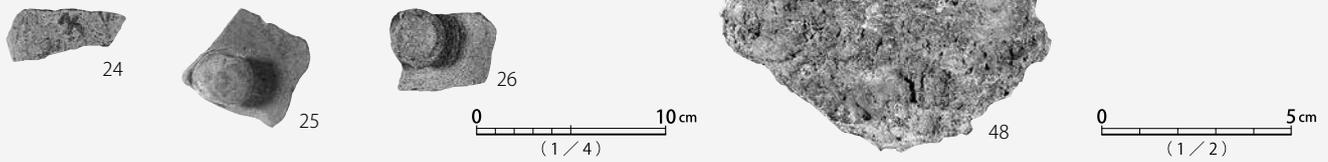
山新遺跡 (永津前地区第2地点)



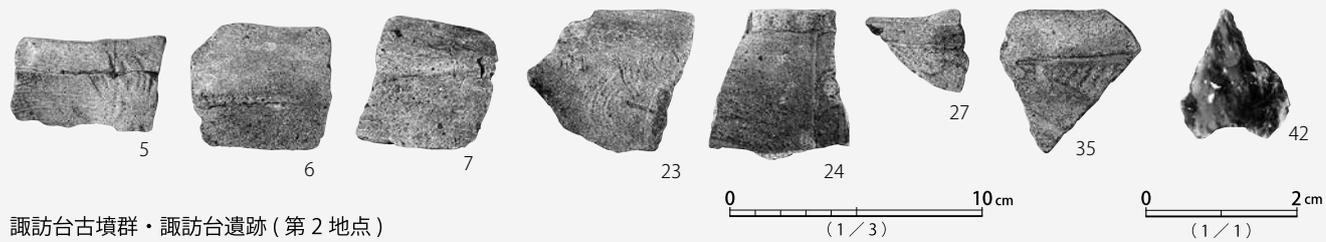
椎津城跡 (重要遺跡確認調査)



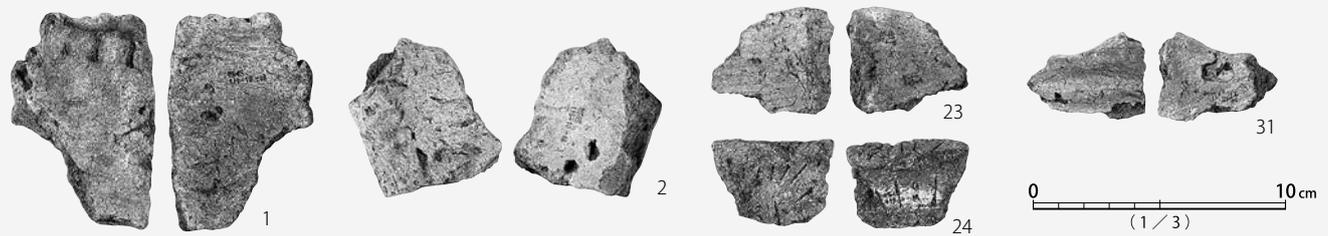
市原城跡 (門前地区第4地点)



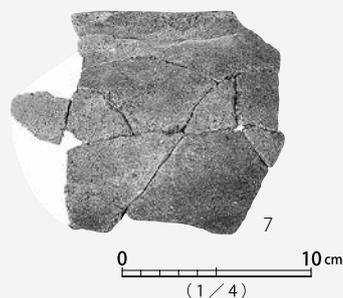
能満分区遺跡群 (上小貝塚地区第4地点)



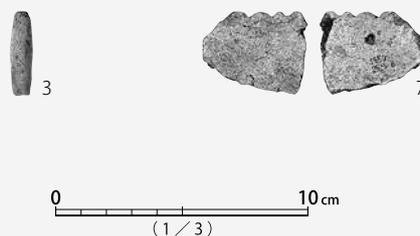
諏訪台古墳群・諏訪台遺跡 (第2地点)



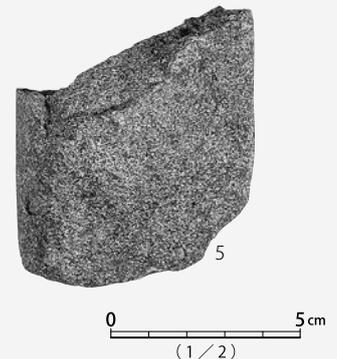
上境町遺跡 (第2地点)



椎津向原遺跡 (第4地点)



海保大塚遺跡 (第2地点)



報告書抄録

ふりがな	へいせい 28 ねんどいちほらしあないせきはつちつちようさほうこく							
書名	平成 28 年度市原市内遺跡発掘調査報告							
副書名	山新遺跡(永津前地区第 2 地点)、椎津城跡(重要遺跡確認調査)、市原城跡(門前地区第 4 地点)、能満分区遺跡群(上小貝塚地区第 4 地点)、諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第 2 地点)、椎津向原遺跡(第 4 地点)、上境町遺跡(第 2 地点)、海保大塚遺跡(第 2 地点)							
巻次								
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第 39 集							
編著者名	木對和紀・近藤 敏							
編集機関	市原市教育委員会(市原市埋蔵文化財調査センター)							
所在地	〒 290-0011 千葉県市原市能満 1489 番地 TEL 0436(41)9000							
発行年月日	2017 年(平成 29 年)3 月 17 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
さんしんいせき 山新遺跡 (なかつまえちくだい 2 ちてん) (永津前地区第 2 地点)	ちばけんいちほらしあねさき 千葉県市原市姉崎 2581 番 1	12219	349	35° 47' 79"	140° 05' 85"	20160112 ~ 20160119	130 ㎡ / 1,273 ㎡ (確認調査)	社会福祉施設建設
しいづじょうあと 椎津城跡 (じゅうよういせきかくにんちようさ) (重要遺跡確認調査)	ちばけんいちほらししいづ 千葉県市原市椎津 695 番 1	12219	316	35° 47' 17"	140° 03' 62"	20160208 ~ 20160223	154 ㎡ /3,698,549 ㎡ (確認調査)	重要遺跡確認調査
いちほらじょうあと 市原城跡 (もんぜんちくだい 4 ちてん) (門前地区第 4 地点)	ちばけんいちほらしもんぜん 千葉県市原市門前 2 丁目 289 番ほか	12219	797	35° 51' 82"	140° 12' 70"	20160229 ~ 20160311	159 ㎡ / 1,590.8 ㎡ (確認調査)	個人住宅建設
のうまんぶんくいせきぐん 能満分区遺跡群 (かみこかいづかちくだい 4 ちてん) (上小貝塚地区第 4 地点)	ちばけんいちほらしのうまん 千葉県市原市能満 1925 番 10	12219	780	35° 49' 90"	140° 14' 48"	20160422 ~ 20160506	47 ㎡ / 476.43 ㎡ (確認調査) 86.6 ㎡ (本調査)	個人住宅建設
すわだいこふんぐん・すわだいいせき 諏訪台古墳群・諏訪台遺跡 (だい 2 ちてん) (第 2 地点)	ちばけんいちほらしすわ 千葉県市原市諏訪 2 丁目 2 番 5	12219	760	35° 49' 06"	140° 10' 77"	20160510 ~ 20160519	78 ㎡ / 788.73 ㎡ (確認調査)	個人住宅建設
しいづむかいばらいせき 椎津向原遺跡 (だい 4 ちてん) (第 4 地点)	ちばけんいちほらししいづ 千葉県市原市椎津 あざこきど 字小木戸 1351-1 の一部、1351-6 の一部	12219	303	35° 46' 51"	140° 03' 31"	20160603 ~ 20160610	55 ㎡ / 486.8702 ㎡ (確認調査)	個人住宅建設
かみさかいまちいせき 上境町遺跡 (だい 2 ちてん) (第 2 地点)	ちばけんいちほらしのげ 千葉県市原市野毛 あざしらはたおき 字白幡起 192 番	12219	449	35° 49' 32"	140° 07' 95"	20160915 ~ 20161003	49.5 ㎡ / 495.54 ㎡ (確認調査) 80.25 ㎡ (本調査)	個人住宅建設
かいほおつつかいせき 海保大塚遺跡 (だい 2 ちてん) (第 2 地点)	ちばけんいちほらしかいほ 千葉県市原市海保 あざおおつか 字大塚 1574 番ほか	12219	1083	35° 47' 32"	140° 06' 88"	20161005 ~ 20161031	184 ㎡ / 1,764 ㎡ (確認調査)	事業場等の造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
山新遺跡 (永津前地区第 2 地点)	包蔵地	古墳時代		近世溝状遺構 1 条、 時期不明流路 1 条、 土坑 13 基、溝 6 条		縄文土器、弥生土器、 弥生時代砥石、古墳時 代土師器		遺構は未検出ながら、縄文時代中期、弥生 時代後期、古墳時代前期の遺物が一定量出 土した。
椎津城跡 (重要遺跡確認調査)	包蔵地、城館跡	古墳時代・中世		主郭南東部、東方腰 曲輪の版築、一ノ堀、 主郭西腰曲輪の堀		縄文土器、古墳時代土 師器、埴輪、中世陶器、 石造物		主郭部の大部分が盛土造成によって構築 されており、文献での永禄 3 (1560) 年の椎 津大普請を彷彿させる調査成果があった。
市原城跡(門前地区第 4 地点)	包蔵地、城館跡	弥生時代・古墳時代・奈良 平安時代		弥生時代竪穴住居跡 3 軒、奈良平安時代 竪穴住居跡 7 軒、土 坑多数、溝状遺構 3 条		縄文土器、弥生土器、 古墳時代土師器・奈良平 安時代土師器・須恵器		調査区全面が過去に削平を受け、遺構確認 面がハードローム上面となる。
能満分区遺跡群 (上小貝塚地区第 4 地点)	包蔵地・集落跡・貝塚	縄文時代		縄文時代土坑 9 基、 ビット 12 基		縄文土器・石鏝、古墳時 代土師器		表土の厚さが 20cm 前後と非常に浅く、遺 構確認面まで耕作攪乱がある。
諏訪台古墳群・諏訪台遺跡 (第 2 地点)	包蔵地・集落跡・古墳	縄文時代・弥生時代		縄文時代土坑 5 基・ 炉穴 1 基、弥生時代 方形周溝墓 1 基		縄文土器・焼礫		諏訪台古墳群 10 号墳隣接地に位置する。
椎津向原遺跡(第 4 地点)	包蔵地	奈良平安時代・中世		奈良平安時代住居跡 4 軒・土坑 4 基、中 世溝状遺構 2 条・土 坑 2 基		奈良平安時代土師器・須 恵器、中世陶器		推定久留里西往還から北西側に隣接する地 点の調査。
上境町遺跡(第 2 地点)	包蔵地	古墳時代		古墳時代建物跡 1 軒・土坑 4 基、中世 溝状遺構 2 条		古墳時代土師器		養老川左岸河口部地域の微高地における竪 穴住居跡の初検出例である。
海保大塚遺跡(第 2 地点)	包蔵地	縄文時代・弥生時代・古墳 時代・奈良平安時代		縄文時代土坑 2 基、 弥生時代住居跡 30 軒・土坑 3 基、古墳 時代周溝 3 条、奈良 平安時代溝状遺構 2 条		縄文土器・石器、弥生土 器、古墳時代須恵器		海保大塚遺跡本調査部分の東隣接部と海保 大塚古墳に挟まれた台地斜面に位置する。
要約	今年度は、市内に所在する遺跡について、平成 28 年内に 5 遺跡の発掘調査を行い、昨年度末に調査を行った 3 遺跡を加えて、8 遺跡を報告した。山新遺跡(永津前地区第 2 地点)では、海岸平野の台地に近い砂丘列上の遺跡が検出された。椎津城跡は重要遺跡確認調査として、主郭部を対象に実施し、文献での永禄 3 (1560) 年の椎津大普請を想定される大規模な盛土造成が確認された。市原城跡(門前地区第 4 地点)は、弥生時代と平安時代の建物跡と、対象地内を縦断する奈良・平安時代溝状遺構が検出された。能満分区遺跡群(上小貝塚地区第 4 地点)では、縄文時代中期終末の土坑群を検出した。諏訪台古墳群・諏訪台遺跡(第 2 地点)では、古墳群下層の縄文早期の遺構と遺物及び弥生時代方形周溝墓の一部を検出した。椎津向原遺跡(第 4 地点)は台地南西縁辺部に位置し、奈良・平安時代集落跡が本地点まで広がるということが確認された。上境町遺跡(第 2 地点)は標高 5 m の自然堤防の微高地に位置し、養老川河口部地域の古墳時代中期集落の存在を確認した。海保大塚遺跡(第 2 地点)では海岸平野に面する台地上の弥生時代集落と、古墳時代墓域を検出した。							

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第39集

## 平成28年度 市原市内遺跡発掘調査報告

平成29年3月17日 発行

編 集 市原市埋蔵文化財調査センター  
千葉県市原市能満1489  
TEL 0436(41)9000

発 行 市原市教育委員会  
千葉県市原市国分寺台中央1-1-1  
TEL 0436(22)1111

印 刷 株式会社 正文社  
千葉県千葉市中央区都町1-10-6  
TEL 043(233)2235